元バカと黒髪美少女と薬師

暁 巧

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

明久と翔子は幼なじみで理科とも幼なじみ。

化学者で且つ科学者。薬学の最先端は阿部　理科（あべ　りか）!?

Ｆクラスはさらなる過激さ（過激者？）を加えて、試召戦争に突入する。

初めまして。お久しぶりの方は、お久しぶりです。

なろう様から引っ越して来ました。

これから、よろしくお願いします。

目　次

第一問（序章）　過去の夢（とおいむかしのやくそく）――1
始まり。自己紹介～の試召戦争
第二問　寝顔×登校×爆殺？――2
第三問　そのもう一人の幼なじみは……――4
第四問　トライアングラ～殺人未遂事件――6
第五問　真面目生真面目糞真面目に不真面目――9
第六問　コリオ＝獄寺＝フレイヴェルン。あだ名はデイダラ。「芸術は爆発だ」――12
第七問　理科のみぞ知るセカイ――17
第八問　え!?　雄二と契約っ（パクティオー）!?――22
第九問　秋葉（あきば）くんバリに言ってみた。秋葉（あきは）じゃないよ？――25
第十問　恩を仇で返すなんて不義理は有り得ん。義理と任侠の侠路（おとこみち）、…任侠と書いて『にんぎょ』と読むきん!!
28
第十一問　『血染めのミズキ』ん？　ユーフェミアと園崎??
36
挑め、Ｄクラス！
第十二問「やろう？」って簡単に言うけど、言い方によってはいやらしくなるよね？　それを解らず無邪気に「やろうよぉ」とか「やっちゃぉ？」って言われた日にゃぁ……ああ、ロマンチックが止まらない。ｂｙ．明さん――43
第十三問　文月新聞『速報！　勝利の秘訣。　文月編』――52

おべんといべんと→Ｂクラス戦へ

第十四問　なくしたテガミ　59
第十五問　青い春。初春は関係ない。　66
第十六問　おっぱいリロード！　できるほど胸は無い。　74
第十七問　善悪の彼岸　83
第十八問　サムライがーる。合言葉は『油断大敵』　92
第十九問　跪いてお嘗めよ、聖なる足。掠れた喉で女王様とお呼びなさい。……むしろ、姫――いや、女神で。　99
第二〇問　嘘つきゆーくんと変われたしょーちゃん　106
Ａクラス戦、開戦……。あなたの望む結末があるといいわね
第二一問　お茶にごす……の？　114
第二二問　美闘士達の決戦！『クイーンずブレイド』　119
第二三問　ゴロゴロの実？　ｖｓ　鮮血のムッツリーニ　126
第二四問　目からビィィーームッ!!!　131
第二五問　ＨｉＭＥ達の峻烈な舞　137
第二六問　『ＨＯＬＹ』所属？　142
第二七問　三歩進んで二歩下がる　149
第二八問　刀語り　153
第二九問　それはまるで、バカボンド　157
第三〇問　だって涙が出ちゃう。女の子だもん！　164
第三一問　語れ！涙！　172
幕間　幸せだったり、楽しかったり、バカやったり
第三二問　キミとキスとアマガミと……　179
第三三問　サブ　→　ルート　→　エロイベント　→　マスタールート……？　182

第三四問　オデコさんと本音を曝け出した仲間達 ―――― 188
特別問題　①―1　ｇｈｏｓｔｓｃｒｉｐｔ．――　姉原美鎖（あねはらみさ）＋ゲイリー・ホアン＆トゥエニー ―――― 194
特別問題　①―2　すいみんスイミンすいみんスイミン睡眠不足っ♪ ―――― 202
特別問題　①―3　バトルアスリート ―――― 207
特別問題　①―4　ながされて世界紀行 ―――― 216
祭りってアレよねぇ…。人がゴミのようだわ。
第三五問　実行委員の一存 ―――― 224
第三六問　ツブレドブネズミに選ばれた戦士たち ―――― 233
第三七問　悪ノ華 ―――― 241

第一問（序章）　過去の夢（とおいむかしのやくそく）

〝「――――……？」〟

泣いてる？　これっていつの……。

『ぼくは、何があっても、理科の味方だから！』

『……私も。ずっと友達』

…ああ、そうか。

『…うん！』

そっか…、……あの頃の事か……。

〝「明久、翔子……約束よ。ずっとずっとずっと、友達だって」〟

『もちろんだよ！　約束するっ!!』

『……約束』

夢を見た。

……遠い遠い昔の夢を……。変わらずにいるのかしら…？　守れているかしら？　……あの頃の、あの時の約束は、褪せずにいるのか……。

ふふっ。あの頃以上に仲良くなったのは、いい変化ね。互いに反応しあってお互いを深めあう。……まさしく化学反応。

今日は気分がいいわ。もう一眠り……。おやすみ、明久、翔子……

ｚｚＺ……

始まり。自己紹介〜の試召戦争
第二問　寝顔×登校×爆殺？

ブルッ。体の底から身震いする。寒い……。目が覚めちゃうじゃない、全く。…ふぁ……ｚｚＺ……。
「あー遅刻しちゃうっ！　って、立って寝ないで!?　危ないから」
明久に手を引かれる。楽だわ、ホント。
このお人好しを絵に書いたようなのが、幼なじみの吉井よしい　明久あきひさ。
薬学界の天才で最先端。さらには、ｇｏｄ　ｏｆ　ｄｒｕｇ神の薬と呼ばれ四大天使に数えられる存在である、ａｒｃｈアーク　ａｎｇｅｌエンジェル大天使Ｒｕｐｈａｅｌラファエルの生まれ変わりだとも言われる、この阿部あべ　理科りかと友達どころか、幼なじみ。だからといって、他の友達と変わることなく、接してくれる友達。
「また遅くまで実験してたんでしょ？」
「〈こくり〉」
「実験する時は、僕に声かけてって言ってるよね？　何かあってからじゃ、遅いんだよ？」
そう……。〝明久〟に何かあってからじゃ遅過ぎる。
「忘れてたわ」
「また？　忘れないように、顔に書いた方がいいかもね」
「それじゃあただの嫌がらせじゃない」
「僕が気づけば、付き添えるでしょ？」
そうね。だとすれば、……きっとまた〝忘れる〟でしょうね。
「聞いてる？」
「〈こくりこくり〉」
この文月学園に入学してから二度目の春が来た。
校舎へと続く坂道の両脇には新入生を迎える為の桜が咲き誇っていた。風が吹き、桜の花弁がゆらゆらと舞踊る。

その風景に、一瞬目が奪われ　ることなどなく、〈こくり…〉この文月学園へ通学途中、二度目の眠気が来、た……。

「本当に〈こくり〉聞いて〈こくりこくり、……こくり〉る？　って、どれだけ頷くのさ！」

「ごめん、おはよ」

「寝てたの!?」

「吉井、阿…〈ドガンっ！〉ぬぉッ!?!?」

避けられたか……。

第三問　そのもう一人の幼なじみは……

「何やってるのさ!?」
「びっくりした。寝起きにあんなもの見せられちゃ抹消もしたくなるわよ」
　地球に重力があるのと同じくらい仕方のない事だから。
「さて、問題です」
「理科の行動が一番問題だからね!?」
「先程使われた爆発物の薬品は何でしょうか？
（1）エチルエーテル
（2）1，2　ジクロロエタン」
　因みに、どちらも発火、爆発を起こしやすい代物。
「よくそんな物持ち歩いてたね!?　バスとか電車通学ならどうするつもりだったのさ!?!?!」
「護身用に常備」
「車内のアナウンスでも言ってるよね!?　〝車内への危険物の持ち込みは〟って」
「大丈夫よ。扱い慣れてる」
「そういう問題じゃないよ!?　それに警官に職務質問され……」
「学生と答えればＯＫよ。もしくは、護身用に常備って」
「護身用にじゃ通らないからね!?　かなり物騒だから！　あと、職務質問って、そのまま〝職務〟って意味で仕事してますか？　してませんか？　聞くってことじゃないんだよ!?
　それに何より、〝1，2　ジクロロエタン〟なんて皮膚に触れただけで危険な薬品だよ!?」
「吉井」
　明久のツッコミに冷静に声をかける筋骨隆々とした逞しい教師。
「何でしょうか!?!?!」
「落ち着け。それと……、霧島がおまえの真後ろで待機してる」
「何ィッ!?!?!?」

明久のホントに真後ろ。数センチしか離れてない。明久の影かと見紛うほどに……。いや、むしろアレは守護霊ね……。

バッと振り返った明久。絶妙な機動で明久との距離を維持する翔子。

「近っ！　翔子ちゃん、近い！」

「……おはよう明久」

翔子は明久をハグする。相変わらず仲いいのね。

「翔子、おはよ」

「……理科、おはよう。…明久は、してくれない……？」

「翔子ちゃんおはよう。って、僕を抱きしめながら挨拶はやめて!?」

「仕方ないわね。……交ざれっていうんでしょう？」

明久ったら、仕様がないわね。

「言ってないよ!?」

「吉井。おまえも大変だな」

「見ていないでなんとかしてくださいよ！」

「俺は馬に蹴られたくないからな」

「馬??」

「男なら、甲斐性を見せてみろ。吉井」

うん、明久に言っても無駄。翔子だって、坂本雄二のこともあるし。

「複雑ね～……」

「結局抱きしめるの!?」

あー……。教室までの距離が遠い。……誰よ、こんな遠くしたの。

……あ。藤堂カヲルさんだったわ……。

第四問　トライアングラ～殺人未遂事件

明久は、Ａクラスの前で別れを告げてる。
「じゃ、翔子ちゃんまた」
「……明久、私を置いて行っちゃうの？」
「置いて行くとかじゃなく、仕方ないっていうか……」
「翔子、仕方ないんだってさ」
「……置いて行くのは仕方ない？　私、いらない子…？」
「違う違う違う！　そうじゃないんだよ。ただ……クラスが違うんだ……」
「!!!!」
あ。驚いてる。
「……盲点だった」
「えぇっ!?!?!?」
「さっき鉄巨人に言われたばかりじゃない。しようがない子ね」
「……明久が私を誘惑してた」
「してないよ!?　それに僕なんかの誘惑に負ける人間は存在しないと……」
スッと翔子と共に挙手。じぃーっと明久を見つめる。
「落ち着いて!?　とりあえずとっても腕のいい脳外科医を紹介するから、メモの準備して」
「……解った（わ）」
「代表もそっちの子も、解っちゃダメなんじゃないかなぁ」
「なんで？　明久が必要だって言ってるのに」
「あはは……。あー…そっちの……明久くんだっけ？　キミも自分をそんなに卑下しなくてもいいと思うんだけどね」
「僕がカッコよくないのは、ホントのことなんだけどね」
「そんなことない！」
「……明久はカッコいいし」
うん、うん。

「ホントに？」
「……可愛いし」
　うん、うん。
「え？　え？」
「……襲いたくなる」
　うん、うん。
「最後のは明らかにおかしいよね!?」
「あはは♪　二人共面白いね」
「あら？　見かけない顔ね。初めまして。かしら？」
　翡翠の様な綺麗な色合いの短い髪と元気な印象を受ける笑顔と相まって、ボーイッシュという言葉がしっくりくる様なそんな子。
「うん、そうだね。初めましてだね。
　去年の終わり頃に転校してきた、工藤くどう　愛子あいこって言います。スリーサイズは……上から７８・５６・７９だよ☆」
「僕は、そんなっ全然！」
「興味……ない？」
　明久がごくりって唾を飲み込んだ。津々ね。どう見ても。
「育て甲斐あると思うんだけどなぁ～♪」
「育てるとか喜んで、じゃない、解らないな、僕は」
　嘘。目がきょどってる。
「ホントにぃ～？」
「も、ももちろんだよ。工藤さんが『愛子』……へ？」
「愛子でいいよ♪　ボクも明久くんって呼んでるしね？」
「えっと……あ…」
「そうそう。愛子って呼んでくれたら、胸触らせてあげるからね」
「……（葛藤中……）」
　悩む時点で、触りたいって言ってる様なものなのに。
「あ、愛子……。あ、でも、僕は別に」
「どうぞ？」
　ごくりと唾を飲み込んで、ゆっくりと手を伸ばし始めた明久に翔子が宣告。

「……私は悲しい」
「翔子ちゃん、これはあの……」
「……私が明久の未来を奪う事になるなんて……」
「ちょっ！　やめて、翔子ちゃん！　まだ未遂だし、その場の雰囲気と言うかノリと言うか……」
「明久は変わってしまったわ……。翔子、手を貸すわ。これ使って？　大したものじゃないけど」
「……何？」
「1，2　ジクロロエタン」
「コイツ、本気で僕を殺す気だッ!!!」
「あ、あはは……」
　ちょっとからかうつもりが、既に殺人未遂事件に発展しつつあるし、むしろ発展途上の事件。この状況に工藤愛子の乾いた笑い声だけが常識を残した。

第五問　真面目生真面目糞真面目に不真面目

「皆さん進級おめでとうございます。私はこの２年Ａ組の担任、高橋たかはし　洋子ようこです。よろしくお願いします」

大きめの窓から中を覗いて見ると、髪を後ろでお団子状にまとめ、眼鏡をかけてスーツをきっちり着こなした知的女性の代表のような教師がいた。

彼女がそう告げると、黒板ではなく壁全体を覆うほどの大きさのプラズマディスプレイに担任教師の名前が表示された。

贅沢…っていうか、壁全体を覆うほどの大きさのプラズマディスプレイなんている？　デカければいいってものでも無いでしょうに。黒板サイズで充分事足りるのが理解できないのかしら？

「まずは設備の確認をします。ノートパソコン、個人エアコン、冷蔵庫、リクライニングシート、その他の設備に不備、不満のある人はいますか？」

Ａクラスの教室は５０人の生徒が普通に授業を受けるには過剰なほどの広さと設備があって、冷蔵庫には当然のように各種飲料やお菓子を含めた様々な食料がエアコンは教室どころか客人に一台で、それぞれが好みの温度に調整できるようになっているみたいだった。

更に見渡してみると天井は総ガラス製でありながらスイッチ一つで開閉可能となっていて、壁には格調高い絵画や観葉植物がさりげなく置かれてて……何？　何処かのリゾート施設を意識したわけ？　全くもって理解に苦しむわ……

「参考書や教科書などの学習資料はもとより、冷蔵庫の中身に関しても全て学園が支給致します。他にも何か必要なものがあれば遠慮などすることなくなんでも申し出てください。

では、はじめにクラス代表を紹介します。霧島翔子さん。前に来てください」

どっかから紅茶の香りがした。大和撫子って感じの翔子だけど、洋物も結構似合うのよね。

「……はい」
名前を呼ばれて前に出てきた翔子。黒髪を肩まで伸ばしてまるで日本人形のような綺麗な少女。女性から見ても魅力的に映る。
物静かな雰囲気の彼女はその整った容姿と相まって、穢れを近づけない神々しさを放ってる。
クラス代表。……つまり2年生のクラスを編成する振り分け試験において、この教室内で誰よりも優秀な生徒。
さらに言うなれば、学年で最高成績を誇るAクラスでのトップはそのまま2年生のトップということになる。同じクラスに入れたはずなんだけど、仕方ない。
「……霧島翔子です。よろしくお願いします」
クラスみんなの視線の中心にありながら顔色一つ変えずに淡々と名前を告げる。
その目はクラスメイトではなく、此方へと向けられている。
霧島は1年の時から有名で、その綺麗な容姿は学年を問わず知れ渡り、男子生徒からの告白が絶えなかった。だが、誰一人として彼女の心を動かした生徒はいない。だからって同性愛者だって噂が立つのはどうだろ。既に決まった相手がいるって考えに至れ無いほどバカなの？
「明久、手くらい振ってあげなさい」
「そだね」
明久が手を振ると翔子も手を振って返してきた。
「Aクラスの皆さん。これから1年間、霧島さんを代表にして協力し合い、研鑽を重ねてください。これから始まる『戦争』で、どこにも負けないように」
戦争ね……。カヲルさんに交渉権をつけられるか……やってみましょうか。翔子もその事、考えてそうだし。明久はどうかしらね？
「明久、行くわよ」
「あ、うん」
「そうそう。〝力〟は隠しておきなさいね」
「理科はどうするの？」

「〝力〟って？」とは聞かないのね。つまりは、同じ考えを持っている。その上、方針とかもあるのでしょうね……
「姫路より抑えようかな」
「Ａクラス戦までは？」
　ほら、ね？
「そうね。取り敢えずは、試召戦争を始めないと」
「できるだけ早く、だね」
「えぇ。そうなれば、今日明日には仕掛けたいわね」
「そうだね。そうなれば、まずはＤクラス。Ｅクラスは気にしなくて平気だしね。姫路さんがいるのは勿論、僕達の操作技術って学園一だしね」
　だから、まずはＤクラス打倒。
「それにＦクラス代表は、恐らく……」
「雄二。だろうね」
　だとすれば、話は通しやすい。どう持っていくかにもよるでしょうけど。
「たぶん、ね。ま、とにかく、返り咲きましょうか？」
「だね」
「「打倒Ａクラス！」」

第六問　コリオ＝獄寺＝フレイヴェルン。あだ名はデイダラ。「芸術は爆発だ」

２年Ｆ組と書かれた外れかけたプレートのある教室についた。廊下側の窓も割れ、這えば潜り抜けられるほどの穴も開いてる。……カヲルさんは、喧嘩を吹っ掛けているのだろうか…？

慌てている明久は無視して、教室へと入った。

「悪かったわね。遅れたわ」

「すいません、ちょっと遅れちゃいましたっ♪」

明久は、何処かで頭を強く打ったのね……

「可哀想に……」

「ちょっと待って理科！　どういう事!?」

「あ、気にしなくていいわ。腕のいい医者紹介してあげるから。……めげるんじゃないわよ?」

「何それ!?　どういう事!?」

「傍についていながら、何もできなかっただなんて翔子や玲さん、親御さんに顔向けできない……ううっ……」

「僕のが泣きたいよ!!!」

「黙って早く座れ、このウジ虫野郎共」

暴言を吐きつけてきた実験体マウスは、……ああ。翔子の。……アレがねー……。あんな猿推奨できない。…明久、がんばるのよ?

ゴリラこと坂本さかもと　雄二ゆうじ。あら?　猿本だったかしら?　１８０強の身長があり、程よく筋肉がついていてターザンだ。うん、解ったわ。ターザンと呼びましょ。

「酷いよ！　先生っ！……って、…雄二?……何やってんの?」

「先生が遅れるらしいから、代わりに教壇に上がってた」

「先生の代わりって…雄二が?　何で?」

「ターザンがゲイを見せてくれるのよ?　明久、席に着いて見物よ」

「ゲイ、ガチで頑張ってね」

「お前らの言い方には悪意しか感じられんぞ？　俺は、このクラスの最高責任者だからだ」
「……へぇー……」
「なんかムカつくな、お前ら」
「ちょっと通して下さいね」
　後ろから覇気の無い声がしたので振り返ると、そこには寝癖の付いた髪にヨレヨレのシャツを貧相な体に着た、いかにもさえない風体の男がいた。……ｔｈｅ　Ｆクラスって感じね。
「それと席についてもらえますか？　ＨＲを始めますから」
　恐らくこの人が、このクラスの担任。
「はい、わかりました」
「うーっす」
「ええ」
「えー、おはようございます。２年Ｆ組担任の……」
　先生は薄汚れた黒板に名前を書こうとして、やめた。
　……チョークすら碌に用意されてないのね。ん～……勉強させる気無し。と。
「……福原ふくはら　慎しんです。よろしくお願いします。
　皆さん全員に卓袱台と座布団は支給されてますか？　不備があれば申し出てください」
　この教師に言うより、カヲルさんに直談判の方がより効率的で確実よね。
　早速手が挙がった。まぁ、訴えたい気持ちは解らなくもないけど。
『せんせー、俺の座布団に綿がほとんど入ってないですー。それと彼女がいませぇん』
「あー、はい。我慢してください」
　……。
『先生、俺の卓袱台の脚が折れています。女友達さえいない現実に心が折れています』
「木工ボンドが支給されています。
　…自分で直してください」

酷いわね。色々と……
『センセ、窓が割れてていて風が寒いんです。それと、幼稚園や小学校ですら女の子と仲良くなったことない事実に人生が寒いんですけど』
「わかりました。ビニール袋とセロハンテープの支給を申請しておきましょう。
頑張って補強してください」
この教室ら……燃もそうかしら？
「……焼夷弾」
「何それ怖いっ！　どうしたのさ、いきなり」
それにしても、カビ臭い。たぶん床に敷き詰められている古い畳のせい。
「やはり、撃ち込むしか無いって言うの…？」
「何を？　ねぇ、何を？」
「はい。では、自己紹介でも始めましょうか。
そうですね。廊下側の人からお願いします」
福原先生の指名を受けて、廊下側の生徒の一人が立ち上がり、名前を告げた。
「木下きのした　秀吉ひでよしじゃ。演劇部に所属しておる」
相変わらずね木下は。…木下姉弟は、性別を間違えたのよ。木下〝姉弟〟じゃなく、〝兄妹〟ね。
「――と、言うわけじゃ。今年1年よろしく頼むぞい」
次は……
「……土屋つちや　康太こうた」
限りない変態。相変わらず口数が少ないわね。何を考えているのか、解ったものじゃ……いえ、解り過ぎるくらいに思春期の中学生っていう感じかしら？
ん？　女子の声？
「島田しまだ　美波みなみです。海外育ちで、日本語は会話はできるけど読み書きが苦手です」
島田美波…ね……
「あ、でも英語も苦手です。育ちはドイツでしたので。趣味は……」

島田は、どう処理すべきかしら？
「趣味は吉井明久を殴ることです☆」
「ちょっ!?　島田さん!?!?」
ちょうどタイミングがいいし、ちゃんと警告しておかなきゃね。
「阿部理科よ。幼なじみを傷つける存在には、お薬を処方してあげるから」
『幼なじみって誰ですか？』
「明久よ」
『『『何いっ!?』』』
五月蠅いわね……。
『吉井明久に死さえ生温い制さ……』
〈ひょいっ〉
←
一口サイズの物体を投げ入れる。
←
〈パクッ〉〈カリッ〉
←
口の中の水分とナトリウムボロハイドライド　＋　酸化剤、アルコール、酸ｅｔｃ…　＝　噛んだ時漏れた薬品の化学反応。つまりは……
『〈ズガン！〉バァッ!?!?』
『近藤！』
……爆発。
「ふっ…汚い花火ね。…あと、誰だったかしら？　処方箋が欲しいのは」
一人一人、目を覗き込む。
『『『〈ブンブンブン！〉』』』
素直でよろしい。じゃ、あとは……
「はい。あ～ん」
「嫌よ!?　あんなの見せられて口開けるワケ無いじゃない！」
「アレは、序ノ口よ？」

「序ノ口!?」
「Ｓｏｄｉｕｍ　ｔｅｔｒａｈｙｄｒｏｂｏｒａｔｅテトラヒドロホウサン　ナトリウム」
「え？」
「化学名又は一般名で言う『水素化ホウ素ナトリウム』のことよ。『水素化ホウ素ナトリウム』っていうのはね、水に触れると自然発火するおそれのある可燃性・引火性ガスを発生させるだけでなく、飲み込むと有毒で皮膚に接触すると有毒。発生させるガスによっても、重篤な皮膚の薬傷や重篤な眼の損傷、呼吸器への刺激のおそれのある危険物なの」
「何て物持って来てるのよ!?」
「だから、『水素化ホウ素ナトリウム』」
『「「「「そうじゃねぇだろ!?」」」」』
　ん？　まあいいわ。
　あ、次は明久の番ね。
「あ、明久、貴様の番だ」
「ねぇ。これって、ある種曝し首だよ……」
「明久、余計なことは言わずにさっさと終わらせてくれ。生きた心地がしねぇ」
「解ったよ。仕方ない……コホン。えーっと、吉井明久です。気軽に『ダーリン』って呼んでくださいね♪」
「明久がそう望むのなら……ダーリン☆」
『『『「ぐはっ!!」』』』
「…こんなつもりじゃなかったんだけど、……幸せをありがと」
　明久、意外と喜んでいるわね……。翔子に報告かしら？

第七問　理科のみぞ知るセカイ

不意にガラリと教室のドアが開き、息を切らせて大きい胸を上下させて、そこに手を当てている女子生徒が現れた。
「あの、遅れて、すいま、せん……」
『えっ？』
誰かが。って言うよりは、むしろ〝誰もが〟、というべきか。教室全体から驚いたような声が上がった。姫路だって人類よ？　びっくりする事無いんじゃない？
クラスがにわかに騒がしくなる中、平然としている福原先生が話しかけた。……初めて先生らしいと思ったわ。確定できないところが、この先生って気もしてきた。
「丁度よかったです。今自己紹介をしているところなので姫路さんもお願いします」
「は、はい！　あの、姫路（ひめじ）　瑞希（みずき）といいます。よろしくお願いします……」
小柄な身体をさら縮こまらせて声を上げる。
白く透き通るような肌に、綺麗にキューティクルを光らせているふわっとした柔らかそうな髪。誰にでも同じように気の使える優しさと愛しさと切なさと？……明久のバカが感染（うつ）ったかしら？　まぁ、それに加えて保護欲を掻き立てられるような可憐な容姿。と、同性から見ても魅力的に映るし、嫌味ったらしくない。人として出来すぎて……
「出来杉ちゃんね」
「理科は何を言ってるの？」
『はいっ！　質問です！』
自己紹介を終えた男子生徒の一人が高々と左手を挙げる。
「あ、は、はいっ。なんですか？」
『なんでここにいるんですか？』
「そ、その……」

もうちょっと聞き方の考慮が必要じゃない？　…ああ。バカだものね。うん、便利ね。
「バカという言葉で全て解決」
「ねぇ!?　さっきから理科は何を言って…」
「明久。まだ他の人が自己紹介中よ。静かになさい」
「えええええええええ!?!?!?!?!?!?!?」
「バカ久、うるせぇぞ」
「ちょっ…」
「万屋かと思ったぞ、その叫び方」
「何を言って……」
「シルバーソウルね」
「置いてけぼりか！　ぼっちか!?」
「五月蠅い。さっきも言わなかったかしら？　しようのない子ね」
「僕を虐めて楽しいか!?　泣くぞ」
「是非、お願い」
「くぅっ…、意地でも泣くもんか！」
　土屋に手の平を向けてから下ろす。
「写真は大丈夫よ、土屋」
「ムッツリーニは何をしてるのさ！」
「もう収めたから」
「理科!?　いつも以上についていけないよ!!!」
「置いて行っちゃうのね…」
「どっちかと言うと、僕の方が置いていかれてるんですが……」
　姫路がさっきからちらちらこっちを見てくる……ガン飛ばそうって？
「大人しい顔して……侮れないわね」
「理科。もう黙ってようか」
　酷いわ。非道で外道で邪道で極道よ。
「あ、えっと…振り分け試験の最中、高熱を出してしまいまして……」
　その言葉を聴いてクラスのみんなは『ああ、成る程』と頷いた。
　試験途中の退席は０点扱い。

姫路は振り分け試験を最後まで受けられずに、結果としてFクラスに振り分けられたってワケ。
そんな姫路の言い分を聞いて、クラスの中から、ちらほらと言い訳の声が上がってくる。
『そう言えば、俺も熱（…の問題）が出たせいでFクラスに』
『ああ。化学だろ？　アレは難しかったな』
『俺は弟が事故に遭ったと聞いて実力が出し切れなくて』
『黙れ一人っ子』
『前の晩、彼女が寝かせてくれなくて』
『はい、今年一番の大嘘ありが――』
『騙されるな！』
『『『!?』』』
『そう言って我らの目を誤魔化す腹積りだ』
『『『何っ!?』』』
『ちょっ…!?』
『極刑だ』
『ヒャッハー！　やっちゃうよ～』
……何なのか……理解できないの。…枯れ葉剤を撒けば、大人しくなるだろうし…。けど、撒くとこっちにも被害が出るし。無難に王水かしら？
「で、ではっ、一年間よろしくお願いしますっ！」
そんな中、逃げるように雄二と明久の間の卓袱台に着こうとする姫路。
「き、緊張しましたぁ～……」
席に着くや否や、安堵の息を吐いて卓袱台に突っ伏した。何気に行動力あるわね。
「あのさ、姫……」
「姫路」
「は、はいっ。何ですか？　えーっと……」
「坂本だ。坂本雄二。よろしく頼む」
「え、あ、姫路瑞希です。よろしくお願いします」

姫路が深々と頭を下げた。丁寧。姫路、さすが。と言ったところかな。
「ところで、姫路さん体調は大丈夫なの？」
「よ、吉井君。お陰様で今日来る事ができました」
「んーん。気にしないで。姫路さんが元気なら、それでいいんだ」
「は、はい！」
ターザンさんが何かを始めるようです。
「わら」
「ところで姫路。明久がブサイクですまん」
「まだ続いてたのかっ!!」
明久の顔を見て驚いた姫路へ、ここぞとばかりに雄二が明久を弄る。
「そ、そんなこと無いです！　目もパッチリしてるし、顔のラインも細くて綺麗だし、全然ブサイクなんかじゃないですよ！　その、むしろ……」
「そう言われると、確かに見てくれは悪くない顔をしているかもしれないな。俺の知人にも明久に興味を持っている奴がいたような気もするし」
「え？　それは誰――――」
「誰よそれっ!?」「そ、それって誰ですかっ!?」
島田と姫路が同時に、明久の台詞を遮って聞いてきた。
「たしか、久保（くぼ）――」
「久保さん？　どの久保さん？」
「――利光（としみつ）だったかな」
久保　利光　→　♂（性別／男）
「……」
「おい明久。声を殺してさめざめと泣くな」
「もう僕、お婿にいけない…」
「もらってあげようか？　お嫁さんに」
「なぁっ!?」
明久が耳元に唇を寄せて囁ささやく。「言わないでよ？　翔子ちゃ

んに」って。んっ…、くすぐったい。
「明久、半分冗談で言ったんだ。安心しろ」
「え？　残りの半分は？」
「姫路、本当に大丈夫なんだな？」
「あ、はい。もうすっかり平気です」
「ねぇ雄二！　残りの半分は?!」
　明久の話を流し、とりあわない雄二に対して、明久は大きな声を出した。
「はいはい。そこの人達、静かにしてくださいね」
　そのせいで、パンパン、と教卓を叩いて福原先生が警告を発してきた。
「あ、すいませ……」
　バキィッ、バラバラバラ……
　突如、先生の叩いた教卓がゴミ屑と化す。
　軽く叩いただけで崩れ落ちた。ほんと、ゴミ屋敷ね。……ん～カヲルさん、ここまでするかな？　これじゃぁ、余計に勉強しなくなる人間が増えるだけでしょうに…
「え～……替えを用意してきます。少し待っていてください」
　気まずそうに告げると、先生は足早に教室から出て行った。
「あ、あはは……」
　明久の隣で、姫路が苦笑いをしていた。
　ん？　明久が、真剣に考え込んでる……。翔子との約束もあるしね。
　さぁて、どうしよっか？　明久？
　お互いに目を見て頷きあった。

第八問　え!?　雄二と契約っ（パクティオー）!?

明久が坂本に声をかける。
「……雄二、ちょっといい？」
「ん？　なんだ？」
「ここじゃ話しにくいから、廊下で」
「別に構わんが」
明久と坂本を追って廊下へと出る。
「んで、話って？」
「この教室についてなんだけど……」
「Ｆクラスか。想像以上に酷いもんだな」
「雄二もそう思うよね？」
「もちろんだ」
「雄二、Ａクラスの設備は見た？」
「ああ、すごかったな。あんな教室は他に見たことがない」
一方はチョークすらないひび割れた黒板。
もう一方は値段も分からないほど立派なプラズマディスプレイ
……確かにね。常軌を逸脱してるわ。
「そこで僕からの提案。折角２年生になったんだし、『試召戦争』をやってみない？」
「戦争、だと？」
「うん。しかもＡクラス相手に」
「…何が目的だ」
急に坂本の目が細くなった。まぁ、明久は『観察処分者』のバカだと思われているでしょうしね。
「いや、だってあまりに酷い設備だから」
「嘘をつくな。全く勉強に興味のないお前が、今更勉強用の設備なんかの為に戦争を起こすなんて、ありえないだろうが」
「そんなことないわよ？　ねぇ？　明久」
此処が異質な空間に感じるかもしれない。

坂本雄二という存在が、吉井明久と阿部理科の言葉ことのはの糸に絡め獲られる人形のようだ。
「もちろんだよ。個人的な理由はあるけれど、姫路さんのような体の弱い人に使い続けて大丈夫だと言える環境じゃないし、既に咳き込んで辛そうだったからね」
「藤堂カヲル学園長に直訴も考慮しているわ」
坂本、冷や汗？　気をつけて、風邪引くから。ふふっ。
「カビを吸い込めば体内で繁殖するからね……度々出して申し訳ないんだけど、姫路さんのような人だと日和見感染して皮膚にも症状が現れる可能性もあるし」
「ま、そうなればこの学園は終わりでしょうけどね。個人的に潰れてもらっては困る理由もあるの」
けれど……ま、貸しにしましょうか、カヲルさん。
「おまえらそれぞれに理由があるってか」
顎に手を当てて思考している。
「そうなるね」
ｔｈｉｎｋｉｎｇ　ｔｉｍｅはお終いよ。
「それで？　坂本雄二代表。結論は出たのかしら？」
「……興が乗らねぇな」
よく言うわ。態々Ｆクラスの代表になるよう調整した男が。
明久に視線を送ると、少し笑みを深めた。ちょっと〈ぞくっ〉てした。
「まぁ、僕は別にいいんだけどね」
「は？　明久、何言ってやがるおまえは」
明久の発言が理解できず、坂本が問い返してた。
「確かにね。理由があるって言ったけど、日にちをおいても〝僕は〟構わないよ」
「っ！……」
既に詰んだかしらね？
「雄二はどうか知らないけどね？　それにいざとなったら、向こうから仕向けるようにすればいいだけだし？」

「はぁ……明久に追い詰められるとはな…。おまえの入れ知恵か？」
「ふふっ…。さて、どうかしらね？」
坂本が諸手もろてを上げた。
「完敗だ。どのみち言われるまでもなく、俺自身Ａクラス相手に試召戦争をやろうと思っていたところだ」
やっぱりね。謀ろうなんて数年早いんじゃない？
「で、雄二は何がしたいの？」
「世の中学力が全てじゃないって、そんな証明をしてみたくてな」
「それが全てかしら？　坂本」
「さぁてな」
自信に満ち溢れた意地の悪い笑みを浮かべていた。
「それにおまえらのお陰で、俺はＡクラスに勝つ作戦も思いついたし――おっと、先生が戻ってきた。教室に入るぞ」
「あ、うん」
ふーん……、Ａクラスに勝つ…ね。
神の薬が見ててあげる。…元神童、失望させないで頂戴よ？
さ、見せてもらおうかしらね……神童と呼ばれた男の力を。

第九問　秋葉（あきば）くんバリに言ってみた。秋葉（あきは）じゃないよ？

「さて、それでは自己紹介の続きをお願いします」
　壊れた教卓を先生が持ってきたボロの教卓と替えて、気を取り直してＨＲが再開される。
「えー、須川すがわ　亮りょうです。趣味は――――」
　特に何もなく、淡々とした自己紹介の時間が続いた。
「坂本君、キミが自己紹介最後の一人ですよ」
「了解」
　坂本で最後のようだ。
　先生に呼ばれて坂本が席を立って、ゆっくりと教壇に歩み寄る。その姿にはいつもの巫山戯た雰囲気は見られず、クラスの代表として相応しい貫禄を身に纏っているように思えた。一瞬だけどね。
「坂本君は、Ｆクラスの代表でしたよね？」
　先生が坂本に尋ねると、鷹揚に頷いていた。……Ｆクラスの代表なんて自慢にもならないわ。それにも関わらず、坂本は自信に満ちた顔で教壇に上がり、こちらの方に向き直った。
「Ｆクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは代表でも坂本でも、好きなように呼んでくれ」
「ゴリラ」
「明久、絶滅危惧種なんだからあまり虐めちゃダメよ？　ストレスで死んじゃうかもしれないから」
「おい！」
「そうだね」
「そうじゃねぇ！」
　何を騒いでいるのかしら……檻に入れるべきよ。麻酔薬あったはずよね……大人の象が1～2秒で昏睡するのが。
「しかも、世にも珍しいゲイゴリラだからね」

「どんなだ!?」
「略してゲリラね」
「おかしいだろっ?!!」
「「そう?」」
「っく…。…話が逸れたな……さて、皆に一つ聞きたい」
坂本持ち直したわ。つまんない。
坂本はゆっくりと、全員の目を見るように告げる。間の取り方が上手い。いつの間にかみんなの視線は、坂本に向けられていた。
クラスの様子を確認した後、坂本の視線は、教室の各所に移りだす。

カビ臭い教室。

古く汚れた座布団。

薄汚れた卓袱台。

クラス全員が、坂本の視線を追い、それらの備品を順番に眺めていった。
「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが……」
雄二は一呼吸おいて、静かに告げる。
「…不満はないか?」
『
大ありじゃあっ!!
』
2年F組生徒の魂バカの雄叫び。雑兵モルモット共は乗せやすいみたい。
「だろう? 俺だってこの現状は大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている」
『そうだそうだ!』
『理科たん、虐めて! ハァハァ…』

『いくら学費が安いからと言って、この設備はあんまりだ！　改善を要求する！』
「！」
……何…、今の。
『そもそもＡクラスだって同じ学費だろ？　あまりに差が大きすぎる！』
堰を切ったかのように次々とあがった不満と屑の声。
「みんなの意見はもっともだ」
Ｆクラスの反応に満足したのか、自信に溢れた顔に不気味な笑みを浮かべてさっきのセリフを無視した。
……罰が必要ね。木下に快く同意をもらって、言ってもらう。
「雄たん萌へもえ～っ」
「誰だっ!?　殺すぞ!!!」
ねちっこい声を出してもらったのが良かったのかしら？　過剰なくらい反応を示したわね。
「雄二、どうでもいいから続けて」
「いや！……まぁいい。とにかく、これは代表としての提案だが――」
野性味満点の八重歯を見せ、
「――ＦクラスはＡクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う」
Ｆクラス代表、坂本雄二は戦争の引き金を引いた。

第十問　恩を仇で返すなんて不義理は有り得ん。義理と任侠の侠路（おとこみち）、…任侠と書いて『にんぎょ』と読むきん!!

Ａクラスへの宣戦布告。それは、このＦクラスにとっては現実味の乏しい提案にしか思わないだろう。
『勝てるわけがない』
『これ以上設備を落とされるなんて嫌だ』
『姫路さんがいたら何もいらない』
『阿部さん、いや、阿部様がいれば安泰』
『雄たん、ハァハァ…』
「「誰だ（誰よ）！」」
「俺はこの拳に全てをかける！」
「Ｈｇ２（ＮＯ３）２。今手元にあるのは硝酸水銀（Ｉ）だけね……目も皮膚も腐食させてあげるわ」
※硝酸水銀（Ｉ）。別名、硝酸第一水銀　＝　化学式：Ｈｇ２（ＮＯ３）２。
ラットに経口投与した場合の半数致死量（ＬＤ５０）は１７０ｍｇ／ｋｇ、経皮投与した場合の（ＬＤ５０）は２３３０ｍｇ／ｋｇ。
眼や皮膚への腐食性がある。摂取した場合は主に腎臓や神経系に影響が及ぶ。これ自体は不燃性であるが、酸化剤であり周囲での燃焼を助長する。加熱による分解で腐食性・毒性のある煙霧を生じることがある。
「理科、落ち着いて。僕や理科にまで被害が及ぶよ？」
「ガス室を作り上げる方が確実ね」
「何がだ!?　っつーか、怖ぇぇよ！」
坂本。次の獲物は…あなたかもしれない……
「こほん！　とにかく、必ず勝てる。いや、俺が勝たせてみせる」
そんな圧倒的な戦力差を知りながらも、豊臣サルはそう宣言した。

『何を馬鹿なことを』
『できるわけないだろう』
『何の根拠があってそんなことを』
否定的な意見が教室中に響き渡っていく。
個人戦なら、勝ち目はあるんだけどね。
「根拠ならあるさ。このクラスには試験召喚戦争で勝つことのできる要素が揃っている」
ゲリラの言葉を受けてクラスの皆が更に騒めく。
「それを今から説明してやる」
不敵な笑みを浮かべて、壇上からみんなを見下ろす。
「聞いてあげる。説明なさい」
「はぁ…、ったく。おい、康太。畳に顔つけて姫路と阿部のスカートを覗いてないで前に来い」
「……!?〈ブンブン〉」
「は、はわっ」
「ねぇ、見る？」
スカートの裾を持って、下着の見えるか見えないかのラインまでずり上げる。
「「おぉーっ…」」
クラスが揺れた。……何？　物好きが多くない？
「お代はあなた方の命で」
「「おいっ!?」」
「冗談よ。〈ぼそっ〉半分は」
「で、だ。姫路と阿部のスカートを覗き込んでいたのが、土屋康太。こいつがあの有名な、寡黙なる性識者ムッツリーニだ」
「……!!〈ブンブン〉」
土屋康太という名前はそこまで有名じゃない。…けれど、ムッツリーニという名前は別。知る人ぞ知るその名は、男子生徒には畏怖と畏敬を。女子生徒には軽蔑を以て挙げられる。らしい。ホントに……Fクラス以外も駄目なんじゃないかしら。
必死になって顔と手を左右に振り否定のポーズを取る土屋。

姫路がスカートの裾を押さえて遠ざかると、土屋は顔についた畳の跡を隠しながら壇上へと歩きだした。
『ムッツリーニだと……？　馬鹿な』
『あり得ん、ヤツがそうだというのか……？』
『だが見ろ。あそこまで明らかな覗きの証拠を未だに隠そうとしているぞ……むしろ、道化を演じているようにも見える』
『ああ。神懸かっているな。さすがだよ、ムッツリの名に恥じない姿だ……』
『実は俺もムッツリだ』
今のカミングアウトは必要だった？
「ムッツリーニ、仲間がいたみたいだよ？」
「……!!〈ブンブンブン〉」
「???」
姫路は頭に多数の疑問詞を浮かべてる。あだ名の由来は、『ムッツリスケベ』。姫路に教えてあげよ。
「姫――」
「おぉーっと！　雄二、続けて」
明久、人前で羽交い締めだなんて、…大胆になったわね。翔子に……
「〈ぼそっ〉余計なことは言わなくてもいいからね？」
何で解ったのかしら？
「おう。…姫路のことは説明する必要はないだろう。皆だってその実力はよく知っているはずだ」
今、凄い眼差しを受けた気がするわ。
「えっ？　わ、私ですかっ？」
「ああ。主戦力だ。期待している」
1年の時学年4位だった実力者。期待するのも仕方のないことかもしれない。
因みに、2位と3位は存在せず、同立1位がさらに二人いる。名前は公開されてはいないけどね。
『そうだ。俺たちには姫路さんがいるんだった』

『彼女ならＡクラスにも引けをとらない』
『ああ。彼女さえいれば何もいらないな』
『阿部様がいれば勝つる』
『霧島さんは俺の嫁』
――瞬間。とある３人から攻撃されて公言者を撃沈。
「木下秀吉だっている」
何事も無かったかのように再開……間違えた。何事も無かったわ。
秀吉は美人な男の娘として有名。演劇部のホープのこととか、Ａクラスにいる双子のお姉のこととかでも有名だったりする。
『おお……！』
『ああ。アイツは確か、木下優子の……』
『秀吉、可愛いよ秀吉』
「当然、俺も全力を尽くす」
『確かになんだかやってくれそうな奴だ』
『坂本って、小学生の頃は神童とか呼ばれていなかったか？』
『それじゃあ、振り分け試験の時は姫路さんと同じく体調不良だったのか』
『雄たぁん』
『実力はＡクラスレベルが二人もいるってことだよな！』
「誰だぁっ!?」
坂本を呼んでいる声にまた叫ぶ。
でもまぁ、クラスの士気は確実に上がっていった。思った通りね。
けれど、数学がＢクラス並の島田美波を呼ばないって事は知らないって事よね。それならばきっと、他の人の点数についてｅｔｃエトセトラ……知らない事があるのね。
「それに、吉井明久と阿部理科だっている」

……シ　ン……

そして一気に下がる。オチ担当？　チラッと明久に目をやる。
「ちょっと雄二！　どうしてそこで僕らの名前を呼ぶのさ！　全くそ

んな必要ないよね！」
　ふっ…。よく言うわね。あ、坂本が〝いつもの〟バカな明久に戻ったって安堵してない？　そんな嫌だったの？　明久に言い包くるめられたこと。
『誰だよ吉井明久って』
『聞いたことないぞ』
『じゃあ、阿部理科ってのは？』
『さぁ？』
『おデコちゃんだろ』
　バンド使ってオールバックにしてるだけでしょうに。坊主だったらどんな反応をしたのかしらね。うん。とりあえず、明久と翔子には怒られるわね。
「って、ホラ！　折角上がりかけてた士気に翳りが見えてるし！　僕は雄二達とは違って普通の人間なんだから普通の扱いを――ってなんで僕を睨むの？　士気が下がったのは僕のせいじゃないでしょう！」
「む…そうか。知らないようなら教えてやる。こいつらの肩書きは……《観察処分者》だ」
「「え？」」
　どういうこと？　むしろ、どういうつもり？
「理科もだったんだ（知ってたの？）」
　明久が話ながら唇の動かし方を変えている。腹話術の要領で話をしている訳だ。相変わらず無駄にすごい技術ね。勿論、明久には劣るけど、できないこともない。
　まぁ、新薬開発研究中とかだと何処で誰が見ているか解らないもの。事実、盗聴，盗撮は頻繁にあったし、探偵や隣人に扮した何処ぞのスパイなんてのもいた。初めのうちは、リアルでそんなのがいる事にも驚いたけど。……慣れって怖いわ。
『なあ、……《観察処分者》って、バカの代名詞じゃなかったっけ？』
「ち、違うよっ！　ちょっとお茶目な17歳につけられる愛称で（その方が都合がいいって事かな？　どう思う、理科）」

「やめなさい、明久。みっともないわ。潔く認めるのよ（同意見よ。焦って綻びでもしたら相手の思うツボだし）
　因みに、永遠の１７歳です♪　おいおい☆（全く、面倒な事になったわ…）」
　挙げ足取りなんてやられてしまえば、きっと余計な要求をされる。ホンット、意地悪婆さんだわ。
「そうだ。《観察処分者》っていうのは、バカの代名詞だ」
「肯定するな、バカ雄二！（この後行く？）」
「言っていい事と悪い事があるわ（そうね。これが終わった後でいいでしょ）」
「あの、それってどういうもの何ですか？」
　姫路が小首を傾げて聞いてきた。頂点に近い場所にいた姫路に、この単語は馴染みがないんだろう。知ってるからってどうってことはないけど。
「具体的には教師の雑用係だな。力仕事とかそういった類いの雑用を、特例として物に触れるようになった試験召喚獣で熟すといった具合だ」
　そう。本来、召喚獣は同じ召喚獣は触れるが、物に触ることができない。召喚フィールドとか、立ったりすることはできるみたい。他はただの霊で、《観察処分者》は実体化させた霊ってとこかしら。例えにまでオカルトを含めてしまうのは、アレなんだけど。
「そうなんですか？　それって凄いですね。試験召喚獣って見た目と違って力持ちって聞きましたから、そんなことができるなら便利ですよね」
「あはは。そんな大したもんじゃないんだよ（とりあえず、影ながら頑張りますか）」
「そうね。自慢できる事じゃないもの（そうね。さっさと終わらせてしまいましょ。話しないと）」
『おいおい。《観察処分者》ってことは、試召戦争で召喚獣がやられると本人も苦しいってことだろ？』
『だよな。おいそれと召喚できないヤツが一人いるってことになるよ

な』
あら？
「理科は!?」
『阿部さんは俺が守る！』
『いや、おれが！』
『俺も！』
カミカゼ部隊でも作ろうかしら？
「ああ、そうなる。だが、気にするな。どうせ、いてもいなくても同じような雑魚共だ」
「雄二、そこは僕達をフォローする台詞を言うべきところだよね？」
「カス共に言うべきこぶぁっ!!??」
カミカゼ隊は、言葉だろうと危害を加える者に容赦は無し、と。メモメモ……
「と、…とにかくだ。俺達の力の証明として、まずはＤクラスを征服してみようと思う」
「――理科」
「えぇ」
行きますか。
「皆、この境遇は大いに不満だろう？」
『『『当然だ!!』』』
ノリノリね。
「ならば全員、筆ペンを執れ！　出陣の準備だ！」
『『『おおーーっ!!』』』
テンションが上がってきたのは解るけれども、簡単に乗っかり過ぎじゃぁないかしら。…あ、そうだわ。
「俺達に必要なのは卓袱台ではない！　Ａクラスのシステムデスクだ！」
『『『うおおーーっ!!』』』
「ニューヨークへ行きたいかぁっ!!!」
『『『ｙｅａｈａａーーッ!!!』』』
「い、いやー……」

クラスの雰囲気に圧されたのか、姫路も小さく拳を作って掲げてた。意外とノリがいいのね。
「うん」
「何を言っているのさ!?　理科は！」
笑みが戻らない。うんうん。と、何度も頷く。
「何で『満足満足！』みたいな顔してるの?!」
「正解よ。何番のパネルをとる？」
「どこの!?　ていうか、何チャンスなの!?」
じゃ、そろそろ行きますか。明久に視線をやる。
ため息を一つついてから、「うん」と頷いている明久を横目に教室を出た。その後ろでは――
「明久にはDクラスへの宣戦布告の使者になってもらう。無事大役を……明久は？　ををいっ!?　いないのか！」
何か言っているのが聞こえてきた気もするが興味無し。
そう、目指すは学園長室。今はそれだけ。

第十一問　『血染めのミズキ』ん？　ユーフェミアと園崎??

カヲルさんとの話が終わって教室に戻ってみると、アウストラロピテクスがこっちを見ていた。猿に近いだけあって獲物を狩る時に見せる威嚇の眼差しは、迫力あるわね。

「ケンカ売ってんのか!?」

「あら？」

「理科、声に出てたよ？」

言いたいのはそういう事ではなくて、痛い目を見たのを覚えていないのかしら？　っていう事だったんだけど…。

ほら、捕獲された。抵抗虚しく、数の暴力に負けてる……。

あ、序でにしたかったのは――――

「聴力検査よ。囁く程の音量で果たして聞こえるのかどうかっていう」

「実験は大成功だね！」

「ウヴォオイッ!?　俺をがふっ!?!?」

殴り飛ばされた。さすが、半端ないわ。カミカゼ部隊は強し。

「やはり坂本は、動物界脊索動物門哺乳綱サル目（霊長目）ヒト上科ヒト科ゴリラ属。

つまりはＧｏｒｉｌｌａ．学名：Ｇｏｒｉｌｌａ　Ｉｓｉｄｏｒｅ｜Ｇｅｏｆｆｒｏｙ｜Ｓａｉｎｔ―Ｈｉｌａｉｒｅ．所謂、ニシゴリラとヒガシゴリラに別れるんだけど、タイプ種を詳しく言うと、ニシゴリラがＧｏｒｉｌｌａ　ｇｏｒｉｌｌａで、ヒガシゴリラはＧｏｒｉｌｌａ　ｂｅｒｉｎｇｅｉ。どっちのタイプかっていうのは判別が難しいと思う。あ、新種なのかも」

「ん？　ゲイ？」

そこ拾うのね。

「違ぇっ！　何回ゴリラっつうんだよ！　てめえぼばぁっ!?」

学習しなさいよ。
ゲイが何らかの爆発でぶっ飛ばされた。う～ん……落とした記憶は無いのだけれど。あ、さらに壁で跳ね返ったところに飛び込んで頭を掴み空中殺法から鳩尾に鋭い突きを入れ、透かさず頭を鷲掴み、物凄い勢いで引き摺って壁へと叩きつけること数回、もう坂本は血を滴らせ白目を剥いていた。
「やめて！　坂本のライフはもうゼロよ!?」
「理科が原因なんだからね？　あ、血は見ない方がいいよ」
と言われながら、明久のハンドタオルで目を塞がれる。
「目隠しプレイね？」
「ちょっ！　変なこと言わないでよ!?」
それを聞きつつ、坂本達と移動した。後で聞いた話、坂本は這って行ったらしいわ。
階段上って扉を開けたっていう事は……屋上ね、おそらく。
「理科は、明久に目隠しされたまま屋上へと連れ込まれたのだった。
きゃっ！　何する気？　明ひ、ぁんっ」
どう？　迫真の鳴き声。
「よぉしぃぃぃぃ？」
「よーしーいーくーん？」
「何もしてないから！　っていうか、二人は何で」
「「あっはははははっ!!!!」」
「怖っ!?　理科っ！　お願いします、やめてくださいっ!!　ほら、島田さん目が虚ろで焦点合ってないし！　姫路さんなんか、瞳孔開いちゃってるじゃんかぁっ!!??!」
クスッ。面白い。盲目的というのは、彼女達の為の言葉ね。……寧ろ独裁的？　ジャイアニズムの権化。言い得て妙だわ。
なんて肩を震わせて笑っていたら、
「笑い事じゃぁないんだからねっ!?」
もうっ、明久。涙目で肩を掴まないでよ。
「劣情を催すでしょう？」
「なんでさっ!?」

「疑問を挟む余地なんて無いでしょうに。可笑しなこと言うわね」
「おまえがなっ！」
　坂本、必死過ぎ。
「ウケるわね」
　坂本にはきちんと届いたみたいだ。噛み付いちゃダメよ、もうほぼ思い通りに動いてくれるようだから。
「そんなことよりも！　吉井君は…阿部さんと何処まで行ってたんですか？　ですか？」
「クスクスッ、どこ行ってたのかしらぁ？」
「何処までだなんて……恥ずかしいっ、ね？　明久」
「〈ゾクッ〉同意求めないで!?　ていうか、火炎にガソリン注ぐような真似やめてよ？　うげっ!?　二人の顔に今度は影が射したし！　ほら、島田さんなんて、あの眼でケタケタと嗤い続けてんだよ??!!」
　あ。ポニーテイルの娘が鉄バットで素振りを始めたわ。あら、グリップの底に何か…悟、ご？　あれは名前かしら？　さと――
「誰のバット奮ってんの!?　ひぐらしないちゃうのっ？」
　ああ。まさらタウン出身のマザコンと同じ名前か。ま、あれだけ美人ならマザコンになっても致し方ない。初恋は、ママ。
　それにしても、
「人妻ってやらしい響き」
「何言っちゃってんの!?」
「……準備完了致しました」
　土屋？　何をやっているのかしら？　あれはマイク？　歌うの？
　こほん。と可愛いらしく咳払いしてから始まった。
「私の敵（吉井明久を奪う者）を名乗る皆さん、お願いがあります。死んでいただけないでしょうか？」
　この場の人間以外にも放送をしているのね。電波ジャックってやつかしら。
「え、今なんと？　姫路さん？」
　とりあえず池袋にいるバーテンさんが道路標識で銃弾を防いでくれて、ダチに手ぇ出してんじゃねーぞとか言ってくれるの待ってみ

る。……青だぬきがいればねぇ…。
「今日の阿部理科は自由だぁ」
「何言ってんのさ」
今日も自由でした。
「ＦＦＦ団の方々、皆殺しにしてください。虐殺です♪」
「虐殺姫ならぬ虐殺姫路さんがっ?!?!」
「おまいらもち着け。さすがにシュウシュウがつかんでゴザル。うほっ、いいゆふぃ」
「理科ぁっ!?」
ちっ…。悪巫山戯も此処までにしましょうか。
「舌打ちしたよねっ？」
「……〈サスサス〉」
自分の頬の辺りを擦りながら周りの目を気にする土屋を少し上目遣い気味に見た。
「…！　な、何だ？」
「覗いていた時の畳の後はもう消えてるよ？　ていうか、否定しないでよ？　ムッツリーニがＨなのは周知の事実だから」
「……!!!!（ブンブンブンブン）」
ここまでバレているのに明久の言葉を否定し続けるなんて、ある意味凄いわね。
「土屋」
「……〈ゴクリ〉。どうした」
上目遣い＋潤んだ瞳。多少は効果の見込みがあったみたい。
裾をゆっくりとずり上げながら聞く。
「――何色だった？」
「純白」
「即答か、ムッツリーニ」
「ちなみに姫路はみずいろだ。
純白ももちろんいいのだが、同年代に比べ、色気のある阿部には黒のレースも非常によく似合うと思う。しかし、いかんせん俺が強要してしまっては些か不満が残ってしまう」

淀みなく話した土屋に吉報を。
「黒のレースなら持っているわよ？」
「「「よしっ！」」」
男子陣が残らずガッツポーズ。瞬間。場は殺意に充たされた。
それでも言葉を紡ぎ続けるのをやめない。
「ちなみに、今日の下着はシルクだから肌触りがスゴくいいんだけど……触ってみる？」
ガタッ、と例外なく反応したバカ達。殺意よりも目先の欲望が勝ったのね。ブシャァァァッって音も聞こえるけど気にしたら負けよ。
Ｐｒｒｒ……。電話？
「なっ!?」
着信画面を見て絶句している猿に変わって出てあげましょう。はいっと。
『もしもし、雄…』
「はい、もしもし」
「▲ッ×ー◇！・――〉@」
地球の言語で話なさいな。
『…っ！　誰』
「シルクの下着のクラスメイト」
ここで電話を返す。
それにしても翔子、咄嗟のことに誰と話したかわかってないみたい。出た瞬間予想外の声だったろうし。
「し、翔子、あのだな」
『雄二、』
ちょっと甘い感じの声を出してみる。
「んっ。電話中なんでしょ？　今触っちゃダメよ？　明久も？」
『話がある!!!』
「触ってねぇよ！」という声を掻き消して、向こうの殺意が伝わる。ここは武芸者達が集う何かがあるのかしら？
「頼む！　待ってくれ翔子！」
『雄二大丈夫。一瞬で終わるから』

「おかしいだろっ!?　話は一瞬じゃ終わらねぇよ！　…？　翔子…？」
「切れてやがる!!」とキレる若者。……ぷっ。
「愉快ね」
「うぉっふぉぉイっ!??!」
キレ過ぎてテンションおかしいわよ？
…にしても、翔子はブレたりしないのかしら？　それとも、放っておけない理由がある？　ま、こればっかりは何ともし難いわ。翔子が解決することだしね。
……でも、いつでも相談相手になるからね、翔子。
あ、明久助けないと。
「ていっ「ちょっと待ったぁぁぁっ!!」　――何？」
「なにで殴ろうとしてるわけ!?」
「鉄パイプ」
「そう！　それっ！　〝ていっ〟ていう可愛い言い方が吹き飛ぶよね!?」
そうかしら？　顎に人差し指を当てて首を傾げる。
「〝そうかしら？〟とか思わないでよ!?　腕がブレて見える程の速さで奮われてたんだから！」
「正解」
よく解ったわね。なら――
「アタックちゃ～んすっ。どの子を殴る？」
「本当にアタックする気なの!?　ていうか、殴らないから！」
「はいっ」
どうぞ。
「〝はいっ〟じゃないよ！　鉄パイプいらないからっ」
我が儘ねぇ。なんて思っていると島田が目を潤ませて何か言おうとしたところで……
Ｐｒｒｒ……
明久にも電話。
「あ、もしもし？　どうしたの？　え〝っ!?」

明久は携帯に手を当て、口元を隠す。だが、「〇〇ちゃん」と聞こえる為、女の子と話しているのは理解できる。
収拾がつかなくなる前に終わらせますか。ホンット、仕方ないわね。
とりあえず収めた後でお弁当を食べて、Dクラス戦の話。午後に開戦だから思考をまとめておくべきね。余計に力は曝さず、効率よく勝利を手に入れる。
明久を見やると苦笑いに混じって思考しているのだと思わせる目が時折伺えた。
坂……ゴリの話を聞いていると、ここぞというところで姫路を使うのだと解った。Dクラス代表まではほぼ力押しでしょうけどね。
影でこっそり動こうにも土屋がいるからねぇ……味方とはいえ情報は漏らしたくない。土屋の情報収集能力と隠密行動は現代の忍びと言って差し支えないだろう。カヲルさん以上に油断ならないかもね。
いっそのこと引き込む？　ファインダー越しに覗かせてやると言えば二つ返事で答えるわね。
「……」
けど今のところは保留かしら。現行のまま、でも単独行動はできるようにしておこうかしらね。遊撃として動くのはアリ…？　カミカゼ部隊を使って時々戦えばいいかな？
…ふぅ……。坂本、そして土屋。厄介ねホント。

挑め、Ｄクラス！
第十二問「やろう？」って簡単に言うけど、言い方によってはいやらしくなるよね？　それを解らず無邪気に「やろうよぉ」とか「やっちゃぉ？」って言われた日にゃぁ……ああ、ロマンチックが止まらない。ｂｙ．明さん

「吉井！　木下達がＤクラスの連中と渡り廊下で交戦状態に入ったわよ！」
　ポニーテイルを揺らしながらこちらへ駆け寄って来たのは、明久と同じ部隊に配属された島田。ちなみに、きちんと遊撃ポジションは手に入れたわ。
　ん？　明久、どこを……
「ああ、胸か」
「アンタの指を折るわ。小指から順に、全部綺麗に、二度に渡って」
「なら此方は、アンタの肋骨を折るわ。下から順に、全部綺麗に、左右に渡って」
「二人とも痛いっ！　聞いてるだけで痛い！
　そ、それよりホラ、試召戦争に集中しないと！」
　今現在前線部隊にいるのは、木下率いる先攻部隊で、明久率いる中堅部隊は、先攻部隊とＦクラスの中間辺りに部隊長として配置されている。
　どうするか模索し、戦場の情報を集めていると、野太い声が聞こえてきた。
『さぁ来い！　この負け犬が！』
『て、鉄人!?　嫌だ！　補習室は嫌なんだっ！』
『黙れ！　捕虜は全員この戦闘が終わるまで補習室で特別講義だ！
終戦まで何時間かかるかわからんが、たぁっぷりと指導してやるから

な？　喜ぶといい』
『ひぃっ!?　た、頼む！　見逃してくれ！　あんな拷問耐えきれる気がしない！　いや、耐えられない！』
『拷問？　ハハハッ！　そんなことはしない。これは立派な教育だ。補修が終わる頃には趣味が勉強、特技は数解、尊敬するのは二宮金次郎。といった理想的な生徒に仕立て上げてやろう。ほら、見えてきたぞ？　理想郷はすぐそこだ』
『っ!?!?!?　き、鬼神だ！　誰か、助けっ――イヤァァーーーッ〈バタン、ガチャ〉』
　拷問で間違いないわね。洗脳もその一つでしょうし。
「島田さん、中堅部隊全員に通達」
「ん？　なに？　作戦？　何て伝えんの？」
「総員退避。と」
「意気地なし！」
　「目が、目がぁぁぁっ！」って転げ回ってる。ム○カがいるわ。大佐だったかしら？
「バルス？」
「チョキで殴ったね!?　親父にはぶたれたことないのに！」
　そんなご家庭はＤＶというのよ。というか、母と姉からは実行されていると公言してるわね。
「目を覚ましなさい、このバカがっ！」
　酷いわね、こいつ。
　すっ、と片手を上げた。すぐさま駆け寄り、一人傅（かしず）く。
「いい？　アンタは部隊長なんだから、臆病風に吹かれてちゃダメ。木下達が点数を補給する間ウチら中堅部隊が、前線部隊に代わって前線を維持する。その重要な役割を担っているウチらが逃げ出したりしたら、アイツらは補給ができないじゃない。ね？」
　膝まづいている存在に声をかけた。
「須川亮、だったわね」
「はっ」
「粉末と練りわさびがあるから――」

「心得ております」
「――そう。ならば、……やーっっておしまい！」
「アラホラさっさー」
「ごめん、僕が間違って……って、理科？　さっきから何を…『にぎゃぁぁっ!?!?!?』島田さん!?（理科？）」
　明久と目が合う。
「明久、タオル。拭いてあげて（こっちは勝手に動くから、後はよろしく）」
　頷いた明久に、すぐ行動を開始する。
「手がぁっ！　痛ぇっ!?」
　クスクスクスっ。あー、面白いわね……須川って。中々に使えるっと。
「須川、手を洗ってすぐ来て頂戴。移動するわ」
「――――――完了致しました」
　1分ほどかしら？　やるわね。
　移動して木下と合流。そして逐次、土屋から戦況報告がメールにてあがってくる。
「阿部、援護に来てくれたんじゃな！」
「木下、報告は受けているわ。木下はついて来なさい、他は回復試験を受けに戻ること」
『『イエス、マム！』』
　敬礼と共に去って行った。
　早速、厄介なのがいたわ。
「木下、Dクラスの清水は知っているわね？」
「うむ、知っておる」
「なら話が早いわ。島田の声で且つ遠くから清水の方に聞こえるように感じさせてこの場から離脱させなさい」
「それはちと、難しいのぉ」
「難しいからといって諦めるのかしら？　あなたの芝居に対する思いはその程度？」
「そんな事無いぞい！　ワシは、ワシの思いは本気じゃっ！　見てお

れ」
「えぇ、わかっているわ。期待して見ているから頑張って」
「もちろんじゃ」
「でも、そういうとこを見るとやっぱり違うんだって思うわ」
「ん？」
「なんでもないわ」
「そうかの？」
「んもう。いいから…や・っ・て？」
「っ!!」
どすを効かせたつもりだったんだけれど、どこか変だったかしら？
それに……、須川も木下も顔赤くない？　二人を見やるとぷいっと視線を逸らす。くすっ、まぁいいわ。
「がんばれ、オトコノコ」
「おぅ」
「わ、わかったのじゃ」
お互い返事した後、一瞬睨み合ったように見えたのだけれど……気のせいかしら？
「お前には負けねぇっ！」「お主には負けん！」
大変なのね、オトコノコって。
「木下」
「うむ。…んゞんゞっ。――美春ーっ、どこーっ？」
「お姉さまっ!?」
「――ウチは、こっちにいるわ。会いに来て？」
「おんっねぇっ、さまぁ～ん!!!」
「「……」」
凄まじいわね……。あ、今のうちに姫路を所定の位置に移動させるよう土屋にメールを……
っと、もう返信？
Ｆｒｏｍ：土や
Ｓｕｂｊｅｃｔ：了解した
本文：船越女史を呼び出されたが、未到着。明久達の戦況は芳しく

ない。
「須川、放送室へ行って船越先生の誘導を頼むわ。終わり次第すぐ戻ること。きちんと考えて行動なさい？」
「ああ、任せてくれ。期待に応えてみせる」
「ええ、結果を示して頂戴」
「イエス、マイロード」
　須川を見送りながら考えに耽っていると木下から指示を仰がれた。
「阿部よ、どうするのじゃ？」
「ちょっと待って」
　携帯を取り出してコールする。僅か半コールほどでつながった。ほとんど刹那の間じゃない。
「土屋、今この先にいるのは近衛部隊と代表だけかしら？」
『…いや、それに加えて数名の生徒が残っている』
「おそらく回復試験ね……。土屋、近藤吉宗を含めた3名ほどでいいわ。坂本達にも気付かれないように此方へ寄越して頂戴。
　それと近藤にスカートの替えが欲しいからそれも持って来させて。後、姫路の準備はどうかしら？」
『……了解だ。近藤を含めた3名を向かわせた。姫路もそろそろ辿り着くはずだ』
　さすが…。早いわね。土屋を上方修正しなくちゃ。
　そうこうしているうちに姫路が着き、遅れて放送も始まった。
「遅れ、て、すみません」
　ピンポンパンポーン♪
《連絡致します》
「気にしなくていいわ、姫路」
《船越先生、船越先生。す、…須川亮君が体育館裏で待っています》
　嘘でも言いたくないのね。
《生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです》
　数学の船越先生（４５歳・女性・独身）は、婚期を逃して、終には生徒達に単位を盾に交際を迫るようになった、第一種特定危険人物認定教師らしいわ。

「すごい…ですね、須川君」
「姫路、策のうちよ。これも」
《あ、あなた欲しさに、揉め事が起きそうです。至急、体育館裏までお越しください》
ピン、ポンパンポーン♪
Dクラスから響（どよめ）きが聞こえる。士気が下がったかな？
士気の上がっているはずのこっちは勢いのままに押し込めることも可能。絡め手として、少数が動きDクラス代表を仕留める。
「え？　ああ。そう、いうことで…すか私は」
「共にAクラス前で待機。木下〝さん〟と一緒に、今も辛そうにしているあなたの介抱をするから」
「急ぎ来、た為のこれ、さえ利用するんですね」
「いえ、初めからそのつもりだったわよ？」
「へ？」
「開戦した時点でDクラスの敗戦は確定したの。
くすっ。――わかる？」
「ホント、お主には適わんわい」
「来たわ」
「近藤吉宗、只今を持って傘下に入る。それと言われていた物だ」
差し出されたそれを受け取って、木下に渡す。
「それを履いて、Aクラス前へ移動するわ。ズボンは土屋に。後、土屋は余計なことはしないこと。木下の写真までは許す」
カシャカシャっ！　パシャパシャッ！　早速、着替え中の木下の撮影。
「これは貸し一つよ？」
「構わない」
着替え終わり頃に須川も帰ってきた。
「遅れたか？」
「大丈夫よ。須川は近藤達と一緒にDクラスを誘きだすこと。場所は渡り廊下に寄りすぎないでDクラスからも少し離れた位置で」
「わかった。近藤行くぞ」

「土屋、体育の大島先生には」
「……声をかけた」
「そ。日本史の――」
「……明久のところへ既に向かっている」
「最高ね、アナタ」
「……〈カァァァッ〉……別に…」
「？」
顔、赤くない？　少し首をひねった。
木下からは歯軋りを、須川からは舌打ちが聞こえた気がした。戦中だものストレスくらい蓄まるでしょうね。
あ、Ｃクラスに遠藤先生がいたわね。
「土屋、Ｃクラスへ行って」
「……遠藤先生ならさっき声をかけた」
「ホントもう、どうしてくれるのよ？」
「……ん？」
「アナタ無しじゃダメな身体になっちゃうじゃない」
土屋が地面に頭を打ち付け始めた。大丈夫かしら？
まぁいいわ。遠藤先生も来たみたいだし、作戦開始よ。
手首を上から前へと振って近藤達を動かせる。
「「「打倒Ｄクラァス！」」」
いい位置取りね。須川よね、確か…？　使えるわね。あら、今の声でＡクラスの数人も気づいたわね。態々見に来る物好きもいるみたい。活発そうな娘ね。
そして、Ｄクラスが扉を開けるのと同時に須川達が駆け出した。
こっちも姫路を気にする。
「姫路、大丈夫？」
「少し、楽…になってきました」
「姫路さん体調が優れないんですか？」
おいでました。
「遠藤先生、そうなんです。授業中に倒れそうだったので、アタシ達が付き添いに」

「あり、がとうござ…います。木下さん、もう少し休んでから…っは、で、構いませんか？」
木下は当然だけど、姫路も中々の演技者ね。遠藤先生がこっちに来る前に息は整っていたはずだったものね。
戦況は……Ｄクラス代表は未だＤクラス前、少しＡクラス寄り。近衛はサイドに展開、残りの雑兵は９人か…。思っていた以上に多いわね。今展開されているのは現国か……あ、須川のコンビと近藤のコンビが一人ずつ倒した。連隊２の、遊撃で隠し玉の持つ将が土屋ね。後７人、そろそろ頃合いでしょう。土屋にアイコンタクト。即座に相手のいなかった土屋は、敵の一人に〝保健・体育〟で挑む。現国フィールドは崩され、もう一度同じ相手と隣の生徒に保健・体育で挑み、フィールドを形成する。相手が驚いて武器を構え遅れた刹那で相手を屠り、隣の召喚獣の得物を飛ばし切り伏せ３０点台にまで落としたところで漸く時が動き出した。
『Ｄクラス　村上裕也
Ｄクラス　田渕聡
保健・体育　０点
保健・体育　３４点
ＶＳ
保健・体育　４２７点
Ｆクラス　土屋康太』
「Ｄクラス村上裕也、戦死！」
「「なっ!?」」
戦場にいる誰しもが息を呑んだ。くすっ…。やるわね。
土屋の援護に回れるように点数の振り分けも考えられた編成が須川によって即座に行われ、土屋から５～６メートルほど下がって左翼に展開するのは須川の連隊、右翼に展開するのは近藤の連隊。土屋（将）を前に出した変型の鶴翼陣。
さぁ、どう出るのかしら？　Ｄクラス。Ｆクラスの将は、手強いわよ？　ふふっ……
「Ｆクラス須川亮だ。悪いがおまえらを討ち取らせてもらう」

棍を持った須川の召喚獣と須川が息を吐きながら構える。
ここで言っちゃダメよね……。今日、無性に言いたいこの言葉。――やーっておしまい！
策がダメになるから言わないけどね。
「同じく近藤吉宗。代表までの道筋を作る、だからさっさと退け」
近藤が構えをとり、目を閉じていた土屋がゆっくりと瞳を曝す。
「……戦死したいのならかかって来い。相手になってやる」
敵方も一斉に構えを作る。土屋の雰囲気に呑まれたの？　アレも充分役者な気がするわね。
「……Ｆクラス隠密、土屋康太。…推して参る！」

第十三問　文月新聞『速報！　勝利の秘訣。　文月編』

須川の棒術もさる事ながら、近藤も負けてはいない。何より、土屋が追随を許さない。…っと、見ている場合じゃぁないわね。さっさと決着をつけますか。
「じゃ、行くわよ？」
「うむ、任せるのじゃ」
「はい！　行きましょう」
疑問符を浮かべて首を傾げる可愛い遠藤先生。その先生の手を引っ張って移動する。
「え？　え？　ちょっと、阿部さん？」
「遠藤先生、そんなに可愛い声を出さないでください。興奮しますので」
「ま、待ってください。私達は年の差がっ」
その前に性別が同じですよ、遠藤先生。
…召喚範囲に捕えた。
「遠藤先生、Ｆクラス阿部理科と木下秀吉が近衛の二人に英語で勝負を挑みます」
「あ、えと……はい。承認します」
「「試獣召喚サモン！」」
「「なっ!?」」
驚いてる驚いてる♪　代表も近衛達も透きだらけだわ。ねぇ？　姫路。
「くっ！……」
先に立ち直った代表が呻いて後退し始めているが、既に姫路が退路を絶っている。
「あの……」
「え？　あ、姫路さん。どうしたの？　Ａクラスはそっちだよ…？」

パニックになって現状を認識できてないわね。
「いえ、こちらで合っています。Ｆクラスの姫路瑞樹です。えっと、よろしくお願いします」
「あ、こちらこそ」
「遠藤先生、Ｆクラス姫路瑞樹がＤクラス代表平賀君に英語勝負を申し込みます」
「……はぁ。どうも」
「はい。試獣召喚サモンです」
「試獣召喚サモン!?」
平賀がとっさに反応する。何もしなかったら、問答無用で補習室という名の魔女の窯への強制連行だから……
『Ｆクラス　姫路瑞樹
英語　４０３点
ＶＳ
英語　１１９点
Ｄクラス　平賀源二』
「え？　あ、あれ？」
戸惑いながら平賀は召喚獣を構えさせた。
けど、結果は目に見えているわ。
「ごめんなさい、これも戦争ですので」
やわらかい声とは裏腹に背丈の倍はある大きな剛剣を軽々と構え、その得物に似合わず素早い動きで相手に肉薄して反撃の意図を与える刻も無く、一撃でＤクラス代表をくだし、この戦の決着とした。
まずまずよ、姫路。
ん、今の結果発表されるみたい。
【Ｄクラス代表　平賀源二　討死】
「Ｆクラスの勝利です！」
『『『うぉぉーーっ！』』』
『『『そんなぁーっ!?』』』
その知らせを聞いたＦクラスの叫びとＤクラスの悲鳴が混じり、耳が痛い。正直勘弁。

「凄ぇよ！　本当にＤクラスに勝てるなんて！　……マジか？　夢じゃないのか？」
「ホントだよ。これで畳や卓袱台ともおさらばだな！」
「ああ。アレはＤクラスの連中の物になるからな。笑いが止まらねー」
「俺達勝ち組ってワケだ。坂本雄二サマサマだな！」
「やっぱりアイツは凄い奴だったんだな！　雄たんは」
　坂本をベタ褒めだけれど、ぬか喜びじゃなければいいわね。
「坂本、万歳マンセー！」
「姫路さんの胸を愛しています！」
　最低なヤツね…。
「阿部！　好きだぁっ！」
「５度ほど輪廻転生してからなら考えてあげる」
「よしっ！　約束だ」
　……。このクラスにはまともな人間はいないみたい。
　それより本気かしら…？　一度ならず五度までも死ねるつもり？
　その自信はどこから来るの？　……とりあえず頑張ってみればいいんじゃない。
　代表である坂本を褒め称える声がいたるところから聞こえる。
　坂本の方を見ると、がっくりと項垂れているＤクラス生徒達の奥でＦクラスに囲まれていた。
「あー、まぁ。なんだ。そう手放しで褒められると、なんつーか」
　デレているのか、可愛いらしく頬を掻いている姿は見るものを不快にさせる――に違いない。
「おまえは俺を何だと思ってんだ」
　小声で言ったんだけど、聞こえてた？
「現代に蘇った原人。いえ、現れる人と書いて現人ね」
「なんだそれは」
「むしろ、変人でいいんじゃない？」
「よかねーよ」
「そうよ？　ダメ。変人は天才とも言われるんだからその方達に失礼

に当たるわ。だから変態って呼んであげて？　そっちのイメージの方が悪印象だから」
「そんな俺が嫌いかっ!?」
ノーコメントで。
そのようなセリフを吐いて顔を近づけたりしたら、
「雄二！　女の子から告白させようだなんて男らしくないよ!!」
勘違いされたわ。
「あ〜ーもうっ！　好きに言ってろ。それより、だ」
すぅーっと、坂本の目付きが鋭くなった。
坂本の作ろうとした空気は読まず、おどけて見せた。
「そんなに気になるんだ？」
ついでに、軽くウィンク。
「ああ。気になって仕方がねぇ」
「モテる女は辛いわ。って、そんな睨まなくても教えてあげるわよ。…全く、我慢の足りない子ね」
くいっと、顎で「いいから話せ」と先を促される。何様のつもりかしら？
「単純なことよ。放課後まで待たなくとも蹴りはつけられる」
「なっ!?」
「どうせズル賢いあなたのことだから、放課後の帰る人に紛れて且つ多対一でDクラス生徒を叩くというか、袋叩く感じ？　になってただろうし、決着つけられるからつけたってことよ」
「だが、不安要素が多かったはずだ。だから俺は」
続く言葉を言ったのは、明久。
「放課後まで待つつもりだった。でしょ？　雄二」
「…ああ。おまえも見当がついてたってワケか、明久」
「まぁね。雄二の悪度さならこうするかなって」
坂本のアレは納得のいかない顔というよりは、如何に自分が堕ちたのかっていうのを自覚したってところね。
ああ、そうそう。続き続き。
「まずは、Dクラスでの点数が高く簡単に排除できる清水美春を木下

を使ってFクラス近くへと寄せる。それを明久と島田、両名によって排除。警戒レベルが上がって渡り廊下の中程からFクラスまでの道程を進み辛くなった上に、通ろうとしても明久の召喚獣の扱いによって通れず、弱ったところをその他共が束になって潰す。

戦死者が出れば出るほど慎重を期すようになり、進退極まってくる。Dクラスが最下層のクラスに負けるはずがないという気持ちと、連勝をしているだろう明久の存在がもしかしたら…と思わせる。ここまで整えれば、後は2枚の切札（ジョーカー）を切って王（キング）を潰すだけ」

「ふっ、簡単に言ってくれる。

Dクラス近く…正確にはAクラス前だろうが……ま、その場で油断を誘うということは俺にはできない、おまえだからできた策ってワケだ」

どう捉えるかは坂本の勝手。A、Bクラス戦での戦力にするかもしれない。もちろん出るけど。

……次の相手……ま、Bクラスでしょうね。

Cクラスとは戦わないと予測したのは、おそらくはAクラスに対する当て馬にするだろうから。木下を使ってCクラスは噛ませ犬にされてしまうはずだ。普通に考えれば順に相手して行く力も無いFクラス。だが、試験をさせる暇なく攻め込み、切札の使い所を間違えなければBクラスにも勝てる。それは既に証明されたこと。順に攻め込まないのは次は自分達の番だと悟らせない為でもあるのでしょうね。

「さぁ？　木下達だけでもできたと思うけど、自分の見えない範囲を指示しなかったのは坂本じゃない」

「だな。慎重になってたんだろうな。初っぱなからというかこの先も負ける訳にはいかねぇからな」

思ってた以上に真剣なのね。……ん？　ああ、戦後処理がまだだったわね。

「話中済まないんだが、いいか？」

「おっ、悪い」

「時間かかるだろうから、クラスを明け渡す作業は放課後で良いか？」
「いや、その必要はない。俺達の目標はあくまでもＡクラスなんだよ。だからＤクラスの設備には一切手を出すつもりはない」
「大きく出たね？　坂本代表。でも、それでいいのか？」
　訝しむＤクラス代表。当然の反応ね。
「もちろん、条件がある」
「一応聞かせてもらおうか」
「なに。そんなに大したことじゃない。俺が指示を出したら、窓の外にあるアレを動かなくしてもらいたい。それだけだ」
　Ｂクラスの室外機……ふーん、そういうこと。でも、その程度のことで早速恩を支払ってもらいたくないわね。
「二人共、ちょっと待ってくれる？」
「なんだ？　阿部」
「どうしたんだい？」
「Ｄクラス代表、平賀君。あなた方Ｄクラスには別の機会に恩を返してくれると助かるわ。設備を破壊させる様な無茶はさせないから……それでどう？」
　バッと食いついて来たのは坂本の方だった。あーもうっ。
「おまえこそちょっと待て」
　順番よ、順番。
「坂本黙って。室外機を壊さなくても窓を開けさせるなんて容易いんだから」
「っ!?　おまえ、……気づいたのか？　俺が何をする気か」
　くすりと楽しい音を零してしまう。
「ええ。先ほどの応用かしら？　土屋と大島先生を使った」
「くっ……誤魔化しは効かねぇか。悔しいが、その通りだ。もし、おまえがそれを可能にするならば俺はそれで構わない。平賀、おまえはどうだ？」
「こちらもそれで構わないよ。むしろ、さっきの条件より飲みやすくなった。…からこその不安はあるんだけどね」
　大丈夫よ、これも一つの予防線だし。

「じゃ、交渉成立かしらね。坂本、後は任せるわ」
「ちょっ、おい！」
無視して踵を返す。
次は、Ｂクラスね。ん～、相手の代表は根本だったか。また面倒な……。この学園に全うな人間はいないのかしら？　って、学園筆頭がカヲルさんだからどうしようもない気もするわ。
ま、阿部理科という存在も世間一般からすれば異常な存在なんでしょうけれども。
とりあえず、情報は強力な武器になるから集めておかないとね。
おっ!!
あ、今いい感じのイマジネーションが……さっさと帰って実験しよ。

おべんといべんと→Ｂクラス戦へ
第十四問　なくしたテガミ

「たっだいまー」
「じゃないでしょう？　早く帰りたいんだから」
態々付き合ってるっていうのに。忘れちゃうから。
「はやくぅ、…して？」
「ちょっ!?　理科、待って！　僕らにはまだ早いと思うんだ！　それに場所だって、家うちの方がいいし」
何を言っているのかしら明久は。うちに帰るのなんて当然じゃない。というより、さっきから言ってたつもりなんだけど……伝わってなかったのかしらね。
「よ、吉井君!?　阿部さんっ」
あら、誰もいないと思っていたけど。後半部分、若干テンションが落ちた気がしないでもないけど、明久と二人でいたってのが気に入らなかったんでしょうし。
「あれ？　姫路さん？」
「っどどどどどうしたんですか？」
なにやら慌てている様子。何？
姫路が座っている席（？）をちらりと見やる。卓袱台の上には可愛らしい便箋と封筒が置いてあった。
ああ、そゆこと？
「あ、あのっ、これはっ……。これはですね、そのっ」
吃り過ぎよ、姫路。
「うんうん。解ってる。大丈夫だよ？　誰にも言わないから」
「えっと……ふあっ」
コテン、と卓袱台に躓いて転ける姫路。さらには慌て過ぎだから。
その拍子に隠そうとしていた手紙が目の前に飛んできて、その一文が目に入る。

《あなたのことが好きです》
たぶん……。けれど応援はできない。翔子にも明久にも幸せになってもらわないといけないから。
飛んできた手紙を綺麗にたたみ、明久が姫路に返してあげてる。
姫路を気遣うように笑顔で一言。
「頑張ってね、僕応援してるから」
「でも吉井君には――さんが…」
今、呼んだわよね？
「ん？　どうかした？　姫路さん」
「あ、い、いえっ」
「その手紙」
「は、はい」
「良い返事が貰えるといいね」
「はいっ。…そう、ですね」
姫路は複雑そうな顔を僅かに見せて返した。

☆

朝から船越女史らしい。というのに随分な余裕……あ、立ち上がった。今度は頭抱えて震え出した。…忘れてたのね。ん？　スゴい勢いで出て行ったけど……
『こらぁっ！　貴様、教室に戻らんか!!』
『後生ですから！　今日だけは、今日だ――いやぁぁっ!?!?』
『船越先生、教室はこっちですよ！』
両手を合わせて合掌。
「何をやってるの？　理科」
「須川の冥福を」
「まだ生きていると思うのじゃが…」
「鉄人も苦労するね」
「ね？」
首を傾げてみた。

明久と目を合わせたがやはりというか落ち着き払っている。ただこくり、と頷き合って意志疎通を終える。長年の付き合いだからこその応対。

☆

机に突っ伏す須川に声をかけた。
「須川、お疲れ様」
「ああ……。悪いが休ませてくれ」
「はい、コレ」と言って物を差し出す。
「何々だ、コレは？」
「労いの品よ。大したものではないけど、美味しくいただいて頂戴？」
「もしかして!?」
立ち上がった須川の周りから声も立ち上がる。
『諸君。ここはどこだ？』
『『『最後の審判を下す法廷だ！』』』
『異端者には？』
『『『死の鉄槌を！』』』
『男とは？』
『『『愛を捨て、哀に生きる者！』』』
『宜しい。これより――２―Ｆ異端審問会を開催する!!』
『今目の前に原罪を侵した者がいる』
大きく出たわね。
『罪状を読み上げたまえ』
『はっ！　被告、須川亮。（以下、この者を甲とする）は我が文月学園第二学年Ｆクラスの生徒であり、この者は我が教理に反した疑いがある』
『甲の罪状は女性、阿部理科（以下、この者を美額公びでこうとする）から手作りの物品の押収を行った背信行為である。
理解しやすく言いますと、この者は、アダムとイヴばりのきゃっきゃウフフを堪能しようと目論んでいた疑いがあります』

『御託はいい。結論だけを述べたまえ』
『女子の、しかも手作り弁当をもらっていたので、羨ましいであります！』
『うむ。実に解りやすい報告だ』
あ、逃げた。
『異端者が逃亡を図った！　決して逃がすなぁ！』
『『はっ!!!!!』』
「くっそぉぉ！　死んでも死守するからなっ!!!」
須川も器用ね。是非とも見てみたいものだわ。
「明久、とりあえずお昼にしましょ」
「冷たいよ、理科。態々争いの種を撒かなくてもいいのに…」
「はい、明久。おべんと」
「うん、ありが…あ…、もしかして……。理科、…恐ろしい娘……！」
…うん？　どういうことかしら。
ま、いいわ。いつも通り屋上で食べるとしますか。
「持つよ」
「ありがと」
そうこうしているうちに屋上へと辿り着いた。
「ん～っ。いい天気ねぇ」
思いっきりのびをした。節々が気持ちいいわ。
フェンスの前…先客？
「はろはろ～。吉井も阿部もこっち座りなよ」
「島田さんに、姫路さんも？　どうしたのさ、みんな揃って」
「本日の戦争の話をするからと思ってたからな。どうせだからメシも一緒にってことになった」
「それにしてもスゴい量だね」
確かに。半端ない。ナニ？　重箱って。お正月は数ヶ月も前に終わったはずだけど。
「姫路がみんなにってな」
「……　か　な　り　ラッ　キー。　今　日　死　ん　で　も　悔　い　は……ない」

「結構あるよね…」
「ムッツリーニがムッツリーニ足る所以じゃの」
「も、もしよろしければ、吉井君も如何ですか？」
「あー、ごめんね？　姫路さん。今日も理科の弁当があるから」
「そう、ですよね…」
　あーもう…。何でここまで気を揉まなきゃならないのかしらね。
「明久、少しくらいいただいたら？　みんなでってことなんだし」
「んー……、そうだね。じゃあ姫路さん、僕も少しもらってもいいかな？」
「はいっ！　もちろんです!!」
「それじゃ、いただくとするか」
「……俺も」
「二人共フライングじゃないか、〈パクッ〉まったごぱぁっ!?!?!?」
「明久!?」
「ホント、行儀の悪〈バタン〉」
「坂本っ!?　ｉｒｇｅｎｄｗｉｅ!?（どうしたの!?）」
「ｉｎ　ｒｕｈｉｇｅｒ　Ｗｅｉｓｅ，ｇｅｓａｍｍｅｌｔ，ｇｅｌａｓｓｅｎ，ｍｉｔ　Ｇｌｅｉｃｈｍｕｔ　Ｓｉｍａｄａ（島田、落ち着いて）」
　ドイツ語で喋る必要はなかったわね。……思わず。島田の動揺が感染ったかしら。
　明久？　起きたのね、良かっ…何をぶつぶつと……
「――川原で石なんか積んで楽しいの？　ようし！　僕も手伝ってあげるよ」
「Ａｕｆｓｔｅｈｅｎ，Ａｕｆｗａｃｈｅｎ　Ｐｕｈ!，Ｕｆｆ！（起きなさい！）」
　島田と同時に声を張り上げた。すると、今度は後ろから、
「……〈バタン〉…黒の下着も…見たかっ……た」
　土屋の最後だった。
　仕方ないわ。蘇生の秘術を使おうかな。
「明日、黒の下着を着けてくるから。頑張った人には見せてあげる」

倒れていたはずの3人がもぞもぞと蠢いた。
「はっ！　こんなところでくたばってらんねーだろ」
「……まだまだ死ぬワケにはいかない！」
「そうだよ。まだ見ぬ明日の為にも負けられないんだぁぁっ!!」
……大丈夫かしら？
〈プチッププチッ〉。
「褒美をとらせるわ〈チラッ〉」
「「ぐはっ！〈ブシャァァァッ!!〉」」
「はわわっ!?」
姫路も島田も何を言っているの？
で、男子はブラジャーがお気に召したのかしら。ん？　なんか…
「やん、パンツ食い込んじゃってる」
「「「かはっ!?〈ブシャァァァッ!!!〉」」」
「阿部!?!?」「阿部さんっ!?!?」
「桃源郷か……悪くねぇ」
「アルカディアがこんなところに」
「……ザナドゥ、俺は見つけた」
「ここがアヴァロン…ワシも本望じゃ……」
一人増えているわ。なにそれこわい。
――さて。屋上での会話をなんとか終え（死屍累々だったから）、教室へと戻ると……。
先に帰ってたはずの姫路の様子がおかしい。何かあったのかしら。
「姫路？　どうかした？」
「え？　い、いえ、何でもありません」
何でもないって顔じゃないけど、本人が言うんだから仕方ないわ。
「そ」と短く返事して手をひらひらと振る。Bクラス戦は目前だってところで不安は抱えたくないんだけど……コレばかりは、もうどうしようもないわね。
「ふぅ…」
「どうしたの、理科」
「テスト」

チラリと横目で明久を見やる。
「本気でやるってこと？」
明久の言葉に頷いて、腰に手の甲を当てる。
「そうよ。何か嫌な予感がするし…、不安要素が生まれたから」
「解った。僕は得意科目だけは全力を尽くすよ」
言葉もなく、首を縦に振るだけ。
席に着いてテストの準備をしながら愚痴を零していた。
「ホンット。儘ならないわね、全く」
視界の端に映った姫路の、少し俯き加減なその表情が妙に気になり、頭に焼き付いた。

第十五問　青い春。初春は関係ない。

「さて皆、総合科目テストご苦労だった」
　教壇に立った坂本が机に手を置いてみんなの方を向いている。きっと阿部理科という天才の背中も見えているはずだ。顔じゃなく背中というのがポイント。しかも後ろの席（？）だから誰もいない空間が広がっている。
「どれだけ坂本の話を聞く気が無いのかというと」
「ああ、よく伝わっているぞ、阿部」
「やめてっ！　想いが伝わっているだなんて勘違い……ストーカー……？」
「なっ!?　違っ！」
『諸君。ここはどこだ？』
『『最後の審判を下す法廷だ！』』
『美少女がストーカーされているみたいなんだが、どうすればいいと思う？』
『『死刑！』』
『よし、解った。坂本、死刑！』
『『ヒャッハァーー!!!』』
　執行までの早さが有り得ないわね。とりあえず……
　美少女祈祷中？…
　猿共戦闘中…

「はぁはぁっ……少しは熟考しろ！
　とにかく、午後はBクラスとの試召戦争に突入する予定だが、殺る気は充分みたいだな」
　お茶を飲み終わっても続いてたけど、漸く終了。
『はぁっはぁっ…、おうよ！』
　一向に下がらないモチベーション。Fクラスの武器の一つね。士気は結果に影響されることもしばしば。

「今回の戦闘は敵を教室に押し込むことが重要になる。その為、開戦直後の渡り廊下戦は絶対に負けるわけにはいかない、解るな？」
『おおーっ！』
本当に理解してるのかしら？　適当に返事してない？
「そこで、前線部隊は姫路瑞樹に指揮を取ってもらう。野郎共、きっちり死んで来い！」
「が、頑張ります」
ムリに乗ってるってわけでもないのかな？　周りに必死で合わせようとしているようにも見えるけど……
『うおおーっ!!』
「……はぁ…」
前線部隊の叫びに紛れるほどに小さなため息。
姫路の事みんな気づいてないみたいだけど、明久も気づき始めているわよ。
何より、陰りが見えるのよね…あの笑顔。

〈キーンコーンカーンコーン♪〉

昼休み終了のベルが鳴り響く。これでいよいよBクラス戦開始だ。
「よし、行ってこい！　目指すはシステムデスクだ！」
『サー、イエッスァー』
敵を教室に押し込むのが目的なので、とにかく勢いは必要になる。
今回の此方の主要武器は数学。Bクラスは比較的文系が多いのと、なぜか長谷川先生は召喚可能範囲が広いというのが理由。他にも英語のライティングの山田先生と物理の木村先生もいる。理数系メイン――まさしく独壇場。
「いたぞ、Bクラスだ！」
開戦の声を背中に受けながら布施先生を伴って階段を降りていく。
渡り廊下の中ほどまで来たところで、前から二人の少女と西村先生が歩いて来た。
「あなたが…阿部さんね？」

「さぁ、知らないけど？　何方かと勘違いなさっているんじゃない？」
「白々しい。西村先生、Ｂクラス岩下律子です。Ｆクラス阿部理科さんに総合科目で勝負を申し込みます！」
　どの阿部さんを呼んだのか知らないから、別の誰かと勘違いしているのでは？　という意味合いを込めて言ったのだけど。
「別ルートには、鉄巨人が配置されているだなんてＥＸステージ突入。って？」
「何を訳の解らない事を……」
　相手の目を覗き込んで言う。
「ねぇ。階段のところにも配置しているんでしょう？　呼んだら？」
「はい？」
　先ほどよりもさらに声色を低くする。
「呆気なく散りたいの？」
　その言葉に反応してか、それとも、岩下ってのがびくっと慄おののき始めたのがきっかけか……
「律子、私も手伝う！」
　階段の方から一人駆け寄って来た。
　さぁ、
「戦いましょう？　楽しいことは、これから始まるわ」
「「試獣召喚サモン！」」
　喚声に応えて魔方陣が展開。
　敵の二体は、フランベルジェという波状の剣を持った岩下とギサルメという斧槍を体勢低く構えた菊入。
　相対する召喚獣は、バンドをした髪に白衣と実験用滅菌手袋を装備したどっからどう見ても科学者然としたいつもの姿。それに加えて目につくのが、手首に巻かれた腕輪。
「そ、それって!?」
「私たちで勝てるわけないじゃない！」
「努力をすれば、届くかもしれないわよ？」

『Ｆクラス　阿部理科

総合　５０５１点
ＶＳ
総合　２０６３点
総合　１８８９点
Ｂクラス　岩下律子
Ｂクラス　菊入真由美　』

「ちょっと待ってよ!?　何、その点数っ！」
「律子！　落ち着いて！　とにかく戦わないと」
「えいっ」
召喚獣がチビ菊入の口内に黒い丸薬を放り込む。
「えっ？」
爆発。
「えぇーっ!?」
点数は一気に１０００は削った。
さすがに内部破壊は強力ね。けど、口内に入る程度の薬品じゃあの程度か。
二体いるし、腕輪で一気に片付けるかな？　消費が大きいから気をつけないと……。あの先と…、さらには近衛の排除。
すっ…、と。一人、召喚範囲の外側ギリギリに立った。
「面倒ね、かかってらっしゃい」
「それが終わったらな。
ったく。根本の言った通りか。厄介だな」
根本って確かＢクラス代表、よね。……時間稼ぎ？　それほど警戒されているってこと？　情報は漏らしていないはずなんだけれど――あ。去年の事を知っているってこと？　それとも翔子との関係性から？　どちら共確証は得られない。ん～～……
「とりあえず、目先の目標を駆逐するか。
【火炎放射フレイムスロアー】」
キーワードを紡ぐ。
この武器の点数消費量５００点。中距離武器っていうか兵器。放

ち続けている間1点ずつ消費していく。当たるとダメージ＋火達磨になって相手にダメージを与え続けるもので、短期決戦には持ってこいなんだけど、明久並に操作の上手い人だと避けられて此方がキツい、使い辛い兵装ね。

この腕輪の能力は、科学・化学の武器、兵器を生み出す力。

何そのチートって思ったヤツは大間違い。使う兵器、使う兵器にデメリットがもれなくついてくるワケ。腕輪を使わない方が強いけれど、それはカヲルさんとの契約に違反するからね。

「ハァ……」

「真由美、行くわよ！」

「ええ！」

早速の弊害。なんて面倒くさい。思わずガシガシと頭を掻いた。デカくて重そうな【火炎放射】のせいでさっきよりも動きが鈍くなっているのだ。

岩下の召喚獣が右から回り込み、菊入の召喚獣が左寄りに真っ直ぐ突っ込んで来た。

よくコンビを組んでいるのか、他の人間よりも操作が上手い。

が、明久や翔子の攻撃を捌いているので、捌けない事もない。けど、近接戦闘が得意ってワケでもない。

「当たれぇっ！」

剣が奮われる。大振りな袈裟斬りから、刃が股下の地面にぶつかって跳ねた反動を利用し、そのまま地から天へと真っ直ぐに斬り上げた。

「イヤ、よ！」

何とか避けられたところで、

「このっ！」

菊入が、視界外から左膨ら脛を貫いた。岩下に集中し過ぎたっ。

「くっ！……」

フィードバックの事を忘れてた。ちりちりと痛む。激痛は無いけれど、指にトゲが刺さった時のような痛みが攻撃を受けた箇所にある。

ただの刹那、思考が乱れた。
その僅かな透きを逃すまいと、岩下が突きを繰り出す。難なくそれを躱した瞬間……
「もらった！」
声と共に気がついた。〝躱させた〟んだと。
脇腹辺りにある剣を、咄嗟に右手で抑え込もうと刃に手を伸ばした。と同時に上体は、軌跡を描くであろう場所を予測して無理矢理体を反らして急所を遠ざけた。それでも、
「っあァッ!?」
焼けるように右腕の内側が痛んだ。
さっきよりもフィードバックが大きい！
腕を一本持ってかれた。
受けるダメージによってフィードバックも変わってくるの？
「ハァ、ハァッ……」
もしかして、疲労も？　体力が落ちて防御力も下がるって？　冗談じゃない。
「……遊びは終わりよ」
刺さった槍はそのままに、斬り上げ終わっていない状態の剣の下を潜り抜けざまにシリンダーを地面に叩きつけ、槍を離そうとしていない菊入を岩下へとぶつける。
で、砕けたシリンダーに入っていたのは、気化性爆発物。さぁ、避けられるものなら避けてみなさい。
振り返りながら左に抱えていたそれのトリガーを引く。
「灯蛾の如く燃え尽きなさい」
「ちょっ!?」
「そんなっ!?」
「答えは聞いてない。バイバイ」
一直線に火線が伸びる。途中から二体を包み込むように炎が動いたのは、気体に触れたせいね。
爆炎が包んだ。
渡り廊下の窓ガラスを揺らす轟音。

「「キャァァッ!!!」」
さらに二人の近くまで炎が迫っていったんだもの、悲鳴を上げるのもムリはないわね。

『Ｆクラス　阿部理科
総合　　１４７３点
ＶＳ
総合　　０点
総合　　０点
Ｂクラス　岩下律子
Ｂクラス　菊入真由美　』

油断してた。何処かで見下してたのかもしれないわね。
岩下と菊入に手を差し出した。
「あなた達かなり強いわね。Ａクラスにも通用するわよ？」
「お世辞でも嬉しいかな」
「そうだね」
順に握手を交わす。それと訂正も。
「お世辞なんかじゃないわ。さっきの点数見たでしょう？　あなた達は、それだけスゴいの。だから、勉強ももうちょっと――」
「努力をすれば、届くかもしれない？」
「真由美、それって…」
「うん。さっき阿部さんが言ってた言葉」
そこまで思って言ったわけじゃないのにね。頑張ってほしいとは思ったけど……。
「過程があるからこその結果。努力無くして成果無しよ。
ま、頑張んなさい」
「「はいっ!!」」
何だか……
「青臭い上に照れ臭いわね」
「あははっ、そうかも」

「ふふっ…。いいと思うけどな、十代なんだし？」
青春？　まぁ、悪くは無いかもね。
「そうね」
「じゃ、私たち補習だから」
「またね。阿部さん、頑張って」
「お互いに」

第十六問　おっぱいリロード！　できるほど胸は無い。

別れて残ったのは、３人。
「第二ラウンド開始だ。西村先生、野中長男が総合科目勝負を申し込みます！」
全く、儘ならないわ。
「勝負を受けないのか？」
「「受けます！」」
「へ？」
自身でも驚くくらい間抜けな音が漏れ聞こえた。
「Ｆクラス須川亮が総合科目勝負を受けます！」
「承認する！」
「「試獣召喚（サモン）！」」

『Ｂクラス　野中長男
総合　１９４３点
ＶＳ
総合　８６３点
Ｆクラス　須川亮　』

「アンタ、いつの間に…」
「ここはいいから、坂本達と合流してくれ」
「えぇ、解っ〈ｐｒｒｒｒ…〉」
こんな時に……。土屋？
「もしもし？」
『……早速で悪いんだが、阿部。教室がめちゃくちゃにされてペンなどもほとんどない。回復試験に支障が出そうだ。
そのタイミングでＣクラスにも動きがあった』

「チッ！……やられたわ。悪いけど、点数が半分以下に減らされてさらに勝負をする羽目になるところだったのよ。まだ戦えるけど、相手によっては厳しいわね」
　どうする…？　このまま突き進むか？　――にしても、こいつは目障りねェ。
『……阿部、さらに悪化したようだ。島田が人質にとられた』
「は？」
　どういうワケよ！　明久に頼んで……っく！　それを利用したか、根本。
「島田を釣ったのね？」
『……おそらくな』
「気づいてたの？」
『……島田の情報を照らし合わせての予測だ』
　さすがね。予測が立てられるだけの情報を手にしているってワケね。
「充分に称賛に値するわ。情報は武器だもの」
『……四時までに決着がつかなかったら戦況をそのままにして続きは明日午前九時に持ち越し、再戦。その間は試召喚戦争に関わる一切の行為を禁止するということになっ――』
「待って」
　目頭のところをゆっくりと揉み解しながら思い出し、思考する。
『――何だ？』
　……！　そうか、そういう……。
「土屋。さっき言ってたCクラスの動き、このタイミングだと漁夫の利を狙っているようにも見えるけれど、おそらくはそれ事態もブラフ」
『……何？　つまり、Cクラスもグルだということか』
「ん、そうね…。情報が足りないからまだ予測の範囲内から出ていないんだけれども、停戦協定の内容にある〝その間は試召喚戦争に関わる一切の行為を禁止する〟というのを利用してくるんじゃないかしら」

『……そうか。…Ｃクラスと根本との関連性を洗ってくる』
「坂本の方は、任せなさい」
　プッツと電話が切れた。
「須川、生きてるわね？」
「ああ、さすがにヤバいがな」
「上出来よ。
　布施先生、Ｆクラス阿部理科がＤクラス野中長男に化学勝負を挑みます」
「承認します」
　総合科目フィールドを消してから、再度化学勝負を挑み、フィールドを再形成する。
「試獣召喚（サモン）！」

『Ｂクラス　野中長男
　化学　　１４５点
　ＶＳ
　化学　　４１点
　化学　　２７６点
　Ｆクラス　須川亮
　Ｆクラス　阿部理科　』

「なっ!?」
「１０秒よ」
　少ない点数だろうが腕輪は健在だった。使いどこによっては最強にすらなる非普遍兵器（アブノーマルズ）。
　そして言霊を発する。
「【Ｄｅｓｅｒｔ　Ｅａｇｌｅ．５０Ａｃｔｉｏｎ―Ｅｘｐｒｅｓｓ】」
　左手に握られたデザートイーグルは、５０点消費、５０ＡＥの弾丸は最高７発装填の１発３０点消費。これだけならば、威力も申し分ないのだけれども、反動がかなり大きく致命的な透きができる為味方が

いない時には使い勝手が悪く弾補充の度に点数消費する上、装填中は両手が塞がるのでダメージのある攻撃はできない。――というよりは、不可能に近い。自身の透きもできる為、できるだけ距離を取りつつ装填と回避に専念といった感じになる。

射撃をする時は、きっちり姿勢を取らないと倒れたりするので姿勢を正す必要があるのだが、その為に射線は読まれやすい。

よしっ。

今回装填したのは2発。止めは須川に任せればいい。

姿勢を正して銃を構えたところで目配せをする。こくり。と頷いたのを確認した。

「くそっ！　行くぞ!!」

駆けて来る野中に、装填しながら笑みを深めた。

「Ｇｏ　ａｈｅａｄ．　Ｍａｋｅ　ｍｙ　ｄａｙ．（やればいいわ。ほら、楽しませてちょうだい）」

ズドン！　という音がしっくりくる重い銃声。

1発目で武器を弾き、反動を抑えつける。フィードバックで自身が倒れそうになるのを踏ん張って耐える。

2発目で胸を撃ち抜く。反動を無理矢理抑えて連射したせいだろう。急所から大きく外れてしまっていた。それでもダメージは高く、僅かだが点数が残って、消滅せずにふらついた。

その体勢のままで武器を投げつけてきたが、

「っらぁ！」

須川が叩き落とした。

そして透かさず、須川が胸の傷口に突きを入れて、くの字に折れ曲がったところを思いっきり顎を搗（か）ち昇げ、

「止めっ！」

がら空きになった喉めがけて全体重を乗せた棍を振り下ろす。

「野中長男、戦死！」

その言葉を聞く前に既に駆け出していた。

☆

Ｃクラスの前にいる坂本に追い付いた。はぁ、っ、何とか間に合ったわね。
「おう、ナイスタイミングだ。これからＣクラスに」
坂本のセリフを手を前に翳して遮った。
「はぁはぁ……、待ってなさい」
すぅーーっ、ふぅ～。少し動悸が治まった。
「俺達はこれから――」
「それを待ちなさいと言っているの。
ふぅっ……、明久はまだ囮かしら」
「そうだ。…で、阿部。何を待つってんだ？」
「…待た、せた……」
「康太？」
珍しく息を切らせている土屋に何事かと坂本は顔を顰めていた。
「他のクラスの前で何を騒いでるの？」
教室から出て来たのは、混じりけの無い黒髪をベリーショートにした気が強そうな女子――Ｃクラス代表、小山友香（こやまゆうか）じゃない！
「くっ！」
思わず呻いてしまった。僅かに表情を歪ませた土屋も、急ぎ携帯でメールを打ち込んでいた。
態々向こうから出向いて来たのだＣクラスの代表が。
土屋の合流を知って強引にでも持っていくつもりか？
「ちょうど良かった、Ｃクラス代表に話があったんだよ」
「坂本！」
少しは、聞く耳を持ちなさいよ！
「何の用かしら？」
「Ｆクラス代表としてクラス間交渉に来た。時間はあるか？」
このバカ！　神童は、過去の栄光じゃないっ。
「クラス間交渉？　ふぅん……」
「ああ。不可侵条約を結びたい」

辺りを見回すと何人かがＣクラス近くで談笑して此方を伺っているようだった。最近ではプロとも張り合えるくらいになった身としては、嗤えるくらいのレベルね。
ま、とにかく坂本を前に出過ぎないよう注意して、
「廊下じゃあなんだし、とりあえず中に入ったら？」
不味い。
談笑している奴らの口角がいやらしく釣り上がったように見えた。
そうこうしている内に坂本が教室へと入って行った。
小声で近くにいた須川に話しかける。
「須川、入口を確保していてちょうだい。おそらくヤバい状況よ」
「解った」
「存外頼りになるわね。坂本よりよっぽどマシよ？」
「ならば、今度はこっそり弁当を頼む」
クスッ。
少し頬を紅潮させて些かばかりか外方を向き、それでもきっちりと伝えてくる。そんな可愛らしい姿に再びクスッと、つい綻んだ。
「いっぱい頑張ってくれてるからご褒美としてあげるけど、最後まで油断せずにきっちりとね？」
「任せろ」
須川は、どん！　と胸を叩いてアピールする。
「土屋には、制服とは別に撮りたいと思う衣装を一着ならば撮らせてあげる」
グイッと親指を立てて命を滴らせる。今から出してどうするのよ。
「鼻血は拭いておきなさい。因みに、解っているとは思うけど、Ｂクラス戦終了してからの契約執行だから」
「もちろんだ」
今が一番輝いてない？　別にいいんだけどね。
「…で。土屋、援軍を呼んでいたのでしょう？　アナタ」
「……〈こくり〉…間もなく到着の手筈」
「そ。解ったわ」
二人の目を覗き込んで頷き合い、Ｃクラスへ入った。

「で、何だったかしら？」
「不可侵条約だ」
「そうだったわね」と外にいた奴らと同じ、いやらしい笑みを浮かべた。
やはり。と思った時には坂本の手を取っていた。
「お、おい。何を」
「仲が良いのね。二人は」
「違えよ！　こいつが勝手に」
「それにしても……不可侵条約ね……、どうしようかしらねぇ、根本クン？」
「なっ!?」
坂本が驚いて見下ろして来る。先ほどからの行動に納得いったのだろう。けれど、遅い。後手に回ってしまった。
「当然却下。だって、必要ないだろ？」
奥から取り巻きを連れて現れたBクラス代表、根本恭二（ねもときょうじ）。同時に入口からも声がした。
「阿部っ！　取り囲まれるぞ！」
廊下の奴らが動いたみたいだ。
「酷いじゃないか、Fクラスの皆さん。協定を破るなんて。試召戦争に関する行為を一切禁止にしたよなぁ？」
坂本が自身の迂闊な行動に下唇を噛んでいた。
「先に協定を破ったのはソッチだからな？　これはお互い様、だよな！」
根本が告げると同時に取り巻きが動き出す。さらにその背後からは、先ほどまで戦場にいた小柄な数学の長谷川先生の姿が隠されていたらしく、
「長谷川先生！　Bクラス芳野が召喚を――――」
「させるか！　須川が受けて立つ！　試獣召喚！」
瞬く間にこの場は戦場と化した。
須川のファインプレーにウィンクをして、そのまま手を引いた。フィールドから出ないと何度だって襲われる。

「悪い！　後は自分で走れる」
「…阿部！　道は確保している。さっさと下がれ」
　さすが土屋。
「康太、助かる」
「ねぇ、明久は？」
「…援護に来た」
「なら、坂本っ。姫路は任せるから、殿（しんがり）は任せなさい」
「すまない。行くぞ、姫路」
「ひゃぁっ!?　坂本君!?」
「悪いが時間が無いんだ。嫌かもしれんが我慢してくれ」
「で、でも……お、重くないですか…？」
　坂本は、おかしそうに笑い飛ばす。
「はっ。全然だ。寧ろ軽過ぎてちゃんと食べているのか心配になるくらいだぞ？」
「イチャイチャしてないで早く行ってくれる？」
「イチャイチャなんかしてねぇ（してません！）！」
　仲の宜しいことで。

　じゃ、そろそろ時間稼ぎも充分かしらね。
「頭っ!!!」
「え？　何だ？」「!!!」「何、どういうこと？」「どうしたんだ？」
　一人を除いて、疑問顔の一同。
　古典の竹中先生は、挙動不審に目玉をキョロキョロと忙しなくしていた。知っている生徒は他にいないと踏んだ竹中教諭が視線を合わせて来たので、ジェスチャーをする。頭の方に手を持っていって両手を前後左右に揺らしてみせた。
　「ひぅっ」と微かに息を飲む音が聞こえてきた。それだけできっと理解してくれたのだろう。お礼を言わんばかりの安堵の相好を見せた。こういう時女で良かったって思う。男なら、恨みを買うに違いない。
「少々席を外します！」

チャーンッス！
勢い良く手を上げて号令を出す。
「総員退避っ!!」
教室へ戻る道すがら、明日の決戦に対して今日以上に詰めようと思った。
本日の敗因は、Ｂクラスを下に見ていたこと。
自身の慢心に足下を掬われた結果に終わった。

第十七問　善悪の彼岸

「昨日言っていた作戦を実行する」
翌朝、登校してすぐに坂本から開口一番にそう告げられた。
ふぁ～っ……、んっ…眠いわね。
「理科、大丈夫？」
「ええ、悪いわね」
「おい、おまえら。作せ――」
「「大丈夫。予想がつくから」」
「ぐっ…！　ならば言ってみろ」
あらあら。頭が固いんじゃない？　ま、お望み通りにしてあげる。
明久が。
「作戦っていうのは、おそらくはCクラス相手のもの。
その表情を見る限り、間違いじゃなさそうだね」
坂本は、苦々し気に「ああ」と呟いていた。全く。どうしてこうも素直になれないのかしら。
「Cクラス？　して、何をするのじゃ？」
「まずは、秀吉のお姉さんの優子さんの姿に変装する」
「それは別に構わんが、ワシが女装してどうするんじゃ？」
男として見られるつもりは無い、と。
「木下優子さんになりきって、Aクラスの使者を装ってCクラスへと行ってもらう事になるかな」
「どうかしら、坂本？」
「相違ねぇよ」
不貞腐れないの。あなたが堕ちた事実に変わりは無いんだもの。
「と、いうわけだ。秀吉、用意してくれ」
「う、うむ……」
坂本が〝自身〟の鞄から取り出したのは、この学園の女子の制服。
大丈夫よ。引いたりしないわ。いつでも迎撃準備は万端だから。
木下がその場で脱ぎ始めた為、明久に目を塞がれた。

気にしないんだけど？
「……!!〈パシャパシャパシャパシャッ！〉」
指が擦り切れるんじゃないかというくらいの凄い速さでカメラのシャッターを切る様は、ムッツリというよりは寧ろオープンよね？
ムッツリーニという真名は返上した方がいいんじゃないかしら。
「よし、着替え終わったぞい。ん？　皆どうした？」
「さぁな？　俺にもよく解らん」
「おかしな連中じゃのう」
オマエモナー。
「んじゃ、Ｃクラスに行くぞ」
あ、そうだ。メールしとこっ。……送信っと。
計画は、着々と進行中。あとは結果を御覧じろ。ってね？

『静かにしなさい、この薄汚い豚共！』

酷いってレベルを超越してない？
「流石だな、秀吉」
「入っていきなり暴言吐くなんてめちゃくちゃだけど、これ以上ない挑発だね……」
甘いわ。これから、抑えるんだから。
『な、何よアンタ！』
『小山さん、話かけないで！　あなた豚臭いわ！』
「「酷っ!?」」
そう仕向けたのは誰よ。
『アンタ、Ａクラスの木下ね？　ちょっと点数が良いからっていい気になってるんじゃないわよ！　何の用よ！』
『私はね、こんな臭くて醜い教室が同じ学園内にあるだなんて我慢ならないの！　解る？　貴女達なんて豚小屋で充・分だわ！』
『なっ！　言うに事欠いて』
――――来た！
「…失礼します」

「翔子!?」
『っ!? だ、代表、どうしたんです?』
声が上ずってるわよ。木下。
『…優子こそどうしたの?』
『Aクラス代表の霧島さんね』
『…そう。Aクラス代表霧島翔子。お邪魔してる』
『あなたも、私達にはゴミ溜めがお似合いだとでもいいに来たの?』
『……ゴミ溜め?』
『巫山戯てんの!? Fクラスに決まってるじゃない!』
『……。Fクラスをバカにしてる?』
声のトーンが2段階は下がった。視線も冷たくなった。
明久と目が合い、「あーあ」と小さく零す。
『バカにしてるも何も事実でしょ? Fクラスには屑やゴミが〝ある〟っていうのは』
『……――科には感謝する』
使ったようで悪いとは思うけどね……。
『何? まだ何かあるの?』
『ある』
凄く怒っているわね。アレは。
『…Aクラスは、Cクラスに試召戦争を申し込む!!』

☆

「ドアと壁をうまく使うんじゃ! 戦線を拡大させるでないぞ! そこ! 危ないぞい!」
木下の指示が飛ぶ。
あの後午前九時よりBクラス戦が開始され、Fクラスは昨日中断されたBクラス前の位置から進軍をし始めた。
窓からの奇襲の為、坂本は「敵を教室内に閉じ込めろ」という号令を出していた。
「勝負は極力単教科で挑むのじゃ! 補給も念入りに行え!」

副司令の木下は、問題無いわね。
問題は、司令官であるはずの姫路ね。昨日の午後から姫路の様子がおかしい…。
「……。ぁ…」
「左側出入り口、押し戻されています！」
「古典の戦力が足りない！　援軍を頼む！　誰かっ！」
「姫路さん、左側に援護を！」
「あ、そ、そのっ……！　ぁっ…の……」
ちっ！　姫路、何をやっているのよ。…仕方ない。
「阿部理科が受けます。
姫路！　何もする気がないなら退きなさい！　邪魔で迷惑よ！」
「す、すみません……阿部さん。次こそは、私が行きます！」
そう言って姫路が戦線に加わろうと駆け出した。が……
「あ……」と小さく漏らした後、急に動きを止めて俯いてしまった。
ダメね。
「明久っ、…明久……？」
明久が怒ってる？
つい、と明久の目線を辿って理解した。
「くくっ…」といやらしく笑う根本が目についた。その手には手紙らしき物があるわ。おそらく昨日の午後の時点でか。
「……なるほどね。そういうことか。理科、潰すよ」
「えぇ、潰しましょうか。表は引き受けるから」
「うん、横っ面に食らわせてやるよ」
「姫路は、後ろに下がってなさい」
「……はい、すみません」
「あのさ、姫路。こういう時はさ、〝ありがとう〟なんじゃない？」
「！　はい!!　ありがとうございます！」
素直でよろしい♪

☆

ドンッ！　ドンッ！　ドンッ！
『あー？　何々だよさっきから』
そろそろ頃合いかしらね？
「須川、近藤。頼むわよ？」
「ああ！」
『おまえらいい加減諦めろよな。昨日から教室の出入り口に人が集まりやがって。暑苦しいことこの上ないっての』
『どうした？　軟弱なＢクラス代表サマはそろそろギブアップか？』
『はァ？　ギブアップするのはそっちだろ？』
『無用な心配だな』
『そうか？　頼みの綱の姫路さんも、隠し珠の阿部さんもどうやら調子が悪そうだぜ？』
そう。卑怯なことに、動いたら手紙をみんなの前で読み上げるなどとほざいたのだ。
『……おまえら相手じゃ役不足だからな。休ませておくさ』
さ、Ｆクラスにガソリン…いや、ニトロを注入よ。
『けっ！　口だけは達者だな。負け組代表さんよぉ』
『負け組？　それがＦクラスのことなら、もうすぐおまえが負け組代表だな？　根本』
教室内の声を聞きながら呼び掛けた。
「ＦＦＦ団並びに神風隊の猛者達に告げる」
『『何だ何だ？』』
「Ｂクラス代表根本は、異端者である！」
ぴくっ。と一斉に反応して眼窩を暗くする。
『『詳しくご説明を』』
「まずは、Ｃクラス代表の小山友香と付き合っているという事」
『異端者だ！』
『制裁を！』
「静まれ！　それだけではないの。姫路の大切な物を奪い、今なお脅しつけこの場から遠ざけている事実！」
『『何イッ!?』』

猛る炎の勢いを緩めない為の火種を放る。
ぎゅっと自身の体を抱き締め身震いして見せた。
「しかも……汚され…ちゃっ、た」
『『『■■■！　■■■■■■■ーーー!!!』』』
ドンドンドンッッ!!!
先ほどまでより大きく壁が揺れてる。あら？　明久も怒った？
すぅーっ……深く呼吸をして部隊指揮を開始する。鼓舞と言った方が近いかしら。
「…さて。皆の者、ヤツの行為は許されるものか？」
『『『否！　否!!　否!!!』』』
「そ。ならば」
『『『ｔｏ　ｔｈｅ　ｗａｒ！　ｔｏ　ｔｈｅ　ｗａｒ！』』』
「ええ、戦争よ。
ヤツはこの世にいてはならないと思うのだ！　では、何処へとやるべきか！」
『『『ｇｏ　ｔｏ　ｈｅｌｌ!!　ｇｏ　ｔｏ　ｈｅｌｌ!!』』』
「そうだ。ヤツを…いや、それに加担する者共をも地獄へと送ってやろう。……総員、直ちに構え！」
バッと、素早く腕を上げていつでも命令を下せる準備。
『『『はっ!!』』』
よく見なければ解らないほどではあったが、Ｂクラスの壁が音を立てて崩れ始めていた。
『さっきからドンドンと、壁がうるせぇな。何かやっているのか？』
『さぁな。人望の無いおまえに対しての嫌がらせなんじゃないのか？』
『けっ。言ってろバカが。どうせもうすぐ決着だ。おまえら、一気に押し出せ！』
「おおおおおぉっ!!!」壁から地鳴りのように声が響いた。
『……態勢を立て直す！　一旦下がるぞ！』
それを聞いた坂本が退却する。
『おいどうした、散々ふかしておきながら逃げるのかカス共！』

『あとは任せたぞ、明久』
「だぁぁーーっしゃぁーっ！」
雄叫びを上げて飛び込んで来た明久とほぼ同時に兵を動かす。
上げていた腕を勢いよく振り下ろした。
「――ヤツらを喰らい尽くせぇっ!!」
『『ウォォォッ!!!!』』
やべっ、楽し過ぎるコイツら。
「ンなっ!?」
すぐ隣の壁が壊れたことに驚いて引きつった顔の根本。
向こうの戦力は、坂本率いる本隊を追って教室から出て行った。
坂本の本隊には、近藤と十名ほどつけたから安心してられる。
っ！　と思ったんだけど、坂本を追いかけて行く先頭の二人と目が合った。――岩下と菊入だ。
他の人間が二人を守り、坂本までの道程を作っていく。
やるわね。岩下が指示を？　不味いわ。坂本じゃ保たない……。
時間が無い、急がないと！
「くたばれ、根本恭二ぃーっ！」
「Bクラス野中長夫が世界史で吉――」
「させないっ！　Fクラス島田が」
「Bクラス山本が受けます！　試獣召喚！」
「――世界史で、吉井明久に勝負を挑みます！　試獣召喚！」
「くっ！　近衛部隊か！」
「は、ははっ！　驚かせやがって！　残念だったな？　おまえらの奇襲は失敗だ！　っほ?!　ごほっ！　何だこの煙りは!?」
油断大敵。
「窓を開けろ！　っ、がはっ！」
それを教えてくれたのは……
ダン、ダンッ！
保健体育担当教師の特性は、教科担当が体育教師であるが為の並外れた行動力。
「……Fクラス、土屋康太」

「き、キサマ……！」
「……Ｂクラス近衛に保健体育勝負を申し込む」
「は？　バッカじゃねぇの!?　勝負を見誤ったな！」
「ふっ…」とニヒルな笑みを零し、いつの間にか根本の懐に入り込んでいた。さらに取ったことを気づかせることなく根本の眼前で手紙を一瞬だけひらひらとさせて、土屋は先ほどの根本の動作を辿る。
「くくっ…」という笑いも忘れずつけて。
「ムッツリーニィーッ！」
近衛も隠し珠も全て剥がして丸裸の根本。
「油断大敵よ」
それを教えてくれたのは……
「あなた達だったのにね。
――試獣召喚」
けど、惜しかったわ。岩下律子、菊入真由美。
「負けるかよ！　Ｆクラスのキサマらなんぞにいいいっ!!」
今回出したのは、Ｓ＆Ｗ　Ｍ２９の４４マグナム弾（直径１１．２ｍｍ）。リボルバー式のダブルアクション。本来は狩猟用に開発された物で、威力は折り紙付き。最高の威力の座は５０ＡＥ弾などに譲ったが、未だに使われる至高の一品。
「ｈａ！　ｙｏｕ，ｖｅ　ｇｏｔ　ｔｏ　ａｓｋ　ｏｎｅ　ｑｕｅｓｔｉｏｎ：〝Ｄｏ　Ｉ　ｆｅｅｌ　ｌｕｃｋｙ？〟　Ｗｅｌｌ　ｄｏｙａ，　ｐｕｎｋ！（はっ。じゃぁ、賭けてみたら、〝今日はツイてるか？〟どうなんだクソ野郎！）」
言葉と共に放ったが、
「くぅっ！」
弾かれた！　腐ってもＢクラス代表かっ！
しかも、フィードバックで態勢が――
「焦っただろ、今」
「え？」
「前見とけ、阿部」
召喚獣も含めた両方を須川が支えてくれていた。

「なかなか素敵じゃない。いい男よ？　アナタ」
「ありがとよ。っていうか、ダーティハリーの真似事か？　昨日も言ってたろ」
「あら、その年で知ってるのね」
　確か、１９７１年の映画だったはずだけど。
「人の事言えんだろ」
「ま、いいじゃない。
　それよりも……そのまま支えてなさい。片付けるから」
「解ったよ」
　銃を構えて、
「ａｒｅ　ｙｏｕ　ｈａｐｐｙ？　もし幸せだったのならごめんなさいね。
　アナタに不幸を届けに来たわ」
　戦争を終わらせるべく、引き金を引いた。

第十八問　サムライがーる。合言葉は『油断大敵』

「くくっ……」といやらしく笑う私達のクラス代表の根本が目についた。その手には手紙らしき物がある。

あれって……。

視線の先を辿って解った。姫路さんが泣きそうな顔で俯いている。コイツっ……！　……ギリッ！　気がつけば、歯を噛み鳴らしていた。

「律子、落ち着いて。阿部さんの言葉忘れた？」

「……え？」

ドンドンドンッッ!!!

さっきから壁が叩かれてる。私達までアイツとおんなじに見られるなんてって思ったら気持ちが沈んでいく。

そんな気持ちを断ち切るかのように真由美が真っ直ぐ見つめて喋った。

「〝努力をすれば、届くかもしれない〟それと、〝過程があるからこその結果。努力無くして成果無し〟」

うん、覚えてるよ。昨日のことだし、中途半端なところで諦めていた自分に檄を入れてもらったんだからね。

「次のＢクラス代表になればいいんだよ。ううん、目指せトップ１０入り！」

ふふっ。

真由美にも元気もらったね。真由美の手に軽く音を鳴らしてタッチ。

「ありがと」

そのまま手を取って駆け出した。

私達が駆け出したのと壁が壊され、壁向こうと教室の外からＦクラスが傾れ込んで来たのはほとんど同時だった。

なんか、阿部さんの言葉を思い出して、予感？　上手く言えないけど思ったの。阿部さんならこのままじゃ終わらないって。

それに、言ってた。私達は後一歩だったって。
考えろ！　行動しろっ！　そう意識したら、駆け出してた。
号令を出しながら進んで行った時に、最初はなからそこにいるんだという事を知ってたみたいに人波の中、彼女を見つけて視線が交わった。ほんの一瞬だったと思う。けど、自分の口角が上がったのが解った。　今自分はどんな顔をしているのかな？　なんか楽しくって仕方ない。
通り過ぎる時に、あの彼女が息を飲んだのが何故だかはっきりと見えた。
あはっ♪
「あはははははっ！」
「楽しそーね、律子」
「ええ！　だって……見た？」
「見た。
当然よ。目標にしている人だもん」
居た！　坂本っ！
「見えた！　追いついたわ！　みんなっ、Ｂクラスが落とされる前にＦクラスを落とすわ！　Ｆクラス代表までの道筋を抉じ開けて!!」
『『『おぉーーーっ!!!!』』』
近衛達も周りのみんなも抑えたわ！
「戦死者は、補習ーっ!!」
『嫌だぁ！　俺はまだ』
後一歩ぉっ！
「西村先生！　岩下律子と」
「菊入真由美が、総合科目でＦクラス代表坂本雄二に勝負を挑みます！」
「近藤吉宗も菊入と岩下に挑みます！」
「助かる！」
「承認する！」
「「「試獣召喚（サモン）！」」」

『Ｂクラス　岩下律子
Ｂクラス　菊入真由美
総合　２２４５点
総合　２０３１点
ＶＳ
総合　１１４３点
総合　８３６点
Ｆクラス　坂本雄二
Ｆクラス　近藤吉宗　』

現れたのは、指にスゴくおっきい鉄の指輪を幾つも隙間無くくっ付けた様なのが人差し指から小指に通されて、拳を握ると鉄の部分が数センチ飛び出した凶器を持った赤髪と棍を持った武術とかしてそーな道着着たの。
「はぁっ！」
始動が早かったのは棍を持った近藤って方。操作も近藤の方が上手いだろうね。代表が戦うってことはそこまでピンチだってことだから。つまり、近藤の方が厄介ってこと。
「真由美！　棍の方から倒すわよ！」
「解っ……」
「余所見してて大丈夫か？」
「律子！」
真由美の返事を遮って、Ｆクラス代表である坂本の方から突っ込んで来た。
「っくぅ！　大、丈夫だからっ！　真由美、そっちはお願い!!」
「任せて！」
駆けて行く真由美を視界の中で見送りながらも、坂本から目を逸らさない。
「さぁ、行くわよ！」
「受けて立つ！」
拳は使い慣れているのか、身軽なフットワークで避けてラッシュを

かけてくる。
数少ない透きに対して突きを繰り出しているけど、軽傷しか与えられていない。
急所以外のダメージは無視して、降す？　っと。お互い飛び退き様に武器を奮う。弾かれた勢いのまま近藤に向かう。
「なっ!?」
真由美は、もちろん気づいてた。だから近藤が横凪ぎにした棍を避けずに踏ん張って耐え、腕を絡めて脇腹に棍を挟み込んで固定していた。
棍を放せばいいものの、そこまで頭が回っていない。私達もやられたやつ。『油断大敵』、それを昨日学んだばっかりだもんね。Ｆクラスだからって油断しない。
近藤の右腕を斬り落としてから喉元に剣を突き入れた。
『近藤吉宗、戦死！』
その言葉を聞き流しながら振り返り、地面に触れるか触れないかの位置に刃先を置きながら頭低く走り出す。
「ちっ！　ヤバいか!?」
坂本がフィールドギリギリまで下がって、頭などの急所を庇うように拳の武器の部分を表面に、手首の辺りを軽く交差させて防御に専念する。
必殺の領域に入り込み、
「覚悟しなさい！」
烈迫の気合いを込めて剣を振り抜いた。
二の太刀の剣撃を考えない全力の一撃。
左手首を切断して右腕を弾く。私は攻撃できないけど、
「止めよっ!!!」
合図も無く助走していた真由美が、開けた急所、心臓に向けて槍を投げつけた。
「しまっ！……」
驚愕に見開かれた坂本の両の目を認識した瞬間に笑顔が零れた。
やった！

「勝っ――――」
【Ｂクラス代表　根本恭二　討死】
「「「え？」」」
　坂本達も私達も揃って声を上げてた。点数等を確認して見ても……
『Ｂクラス　岩下律子
　Ｂクラス　菊入真由美
　総合　　１４２０点
　総合　　９４９点
　ＶＳ
　総合　　０点
　総合　　０点
　Ｆクラス　坂本雄二
　Ｆクラス　近藤吉宗　』
　おかしなところはなかったのに……
『Ｆクラスの勝利です！』
　……はい？
「そんなぁぁぁぁぁぁっ!?」
「鉄村（てつむら）　人（じん）先生！　坂本です！」
「落ち着け。そんな名前の奴はこの学園にはおらん。それに俺もお前も坂本では無い。俺は西村だし、お前は岩下だろう」
　そうじゃないんですよ！　私が言いたいのは！
「岩下が言いたいことは解る。
　坂本の戦死したのが僅かに遅かったんだ」
　なっ！　思わず膝から崩れ落ちた。
「ホント、危ないところだった。
　……なぁ、岩下」
「何？」
「何でおまえは、前傾姿勢で加速してたんだ？」

「ああ、アレね。アレは、斬り上げに全て込める為。斬り上げが来るっていうのは解ったでしょう？」
「いや、横斬りの可能性も考慮に入れていたんだが…」
なら、なおさらに成功だったってことね。
「坂本。横斬りをしようと思ったら、一度上げてから斬らなきゃいけないし、急所は狙えないでしょ？」
「まぁ、そうだな」
「それに、しっかりとした踏ん張りと身体を起こした時のバネも使っての斬り上げができるし、真由美の視界の確保と序でに敵の視線の集中もできれば十二分って感じだったの。だから初めっから二撃必殺を狙ってたわけ」
それでも負けちゃったわけなんですけれどもねぇ？
なんか、ホント悔しい。あー、もうっ。
「岩下、菊入。勉強んなった」
「ん？」と、真由美と二人して首を傾げた。
「Ｆクラスが傾れ込んで、流れがこっちに傾いた時に〝勝った！〟ってほくそ笑んでた。
なのに、さっきはギリギリだったろ？」
「そうね」
「それで俺は、〝油断大敵〟ってのを思い知ったんだよ」
「ははっ」「ふふっ」
「それは私達もだよ。ね？　律子」
「うん、私達もその言葉を念頭に置いて戦ってたもん」
「ふっ……、そうか」とニヒルに笑う坂本を少し見惚れている真由美にまた楽しくなった。なんか怖い人だと思ってたからね。特に真由美は。
――――ひらっ。
目の前を春色の何かが横切った。ゆっくり舞っていたそれをそっと手に取る。
「ああ」
どうやら、窓の外から風が桜の花びらを運んできたようだ。

なんか、……春だね～……。
うん。私にもなんか、ぼちぼち春ちょうだい？
って言ったら怒られるかな？　むしろ、「ごめんね？」って言うかも
……ふふっ……。花見誘ってみよ。
「ん～～っ、ふぁ～っ……春だね～」

第十九問　跪いてお嘗めよ、聖なる足。掠れた喉で女王様とお呼びなさい。……むしろ、姫――いや、女神で。

「はい、おしまい。あんまり無茶し過ぎないようにね」
　明久の割れて出血していた拳を手当てして、傷口をつっ突きながら注意を促す。
「解ってるよ。ありがとう理科」
「明久よ、随分と思い切った行動に出たのう。
　なんとも……お主らしい作戦じゃったな」
　そうね、確かにそうだわ。うん。
「後のことを何も考えず、自分の立場を追い詰める、男気溢れる素晴らしい作戦じゃな」
「……秀吉、遠回しにバカだって言ってない？」
「けど、それが明久のいいとこ？　でしょう？」
「ちょっと待って理科！　何で途中に疑問を挟んだの!?」
　何でって……
「明久だし」
「酷っ!?　僕の硝子のハートは傷ついた！」
「対戦車ライフルも防ぐ防弾仕様でしょ？」
「強いわ！」
「相変わらず仲良いな」
　坂本のような者が、獣臭い香りを撒き散らしながら話かけてきた。っていうか……
「誰よ！　ペットなんか連れて来たの！　……翔子…？」
「やりかねんが、ちげぇよ！」
　翔子、マシにはなったんだけどね。
　坂本弄りは終わりにして、パパッと話を試召戦争に戻す。
「坂本、強かったでしょ？　あの子達」

「ああ。ギリギリだったよ」
「〝油断大敵〟よ（だな）」
坂本も何か学んだみたいね。
「ったく」とか言って頭をガシガシと乱暴に掻きながら、坂本が根本の前まで進んで行った。
「さて、それじゃ嬉し恥ずかし戦後対談といこうか。な、負け組代表？」
「ちっ……！　阿部さえいなけりゃ負けてなかったんだよ！」
……え？　何？　解らず明久に向かって尋ねた。
「明久、聞き間違いかしら？　今、下衆ランクがまだ上がりよ…いえ、下がりようがあったのかって驚かせられたんだけど？」
「そうだよ。理科のせいにしてたよ」
「……よく解ったな、おまえ」
「これでも、長い付き合いだからね」
「ま、いいが。
とにかく、本来なら設備を明け渡してもらい、おまえらには素敵な卓袱台をプレゼントするところなんだが……」
勿体ぶって教室を見渡し、根本に視線を戻したところでクラス中が坂本の口が開くのを待ち続ける。
相変わらず無駄なカリスマ性を持ち合わせているわね。
「特別に免除してやらんでもない」
坂本の発言に、ざわざわと周囲の、いえ、クラス中が騒ぎ始める。Ｆクラスはもちろん、Ｂクラスも。
「落ち着け、皆。前にも言ったが、俺達の目標はＡクラスだ。ここがゴールじゃない」
「うむ、確かにのぅ……」
「ここはあくまで通過点だ。だから、Ｂクラスが条件を呑めば解放してやろうかと思う」
その言葉を聞いてＦクラスは納得したような表情になったけれども、Ｂクラスは、「いいのか？」って顔がちらほら見られる。そらそうよねぇ。

「……条件はなんだ」
「条件？　それはお前だよ、負け組代表さん」
「俺、だと？」
「ああ。お前には散々好き勝手やってもらったし、正直去年から目障りだったんだよな」
　言い方はアレだけれども、決して誰もフォローを入れる気配がない。ここまでくれば、逆に清々しいわね。
「そこでお前らBクラスに特別チャンスだ」
　ニヤリというよりは、ニヤーッとしたいやらしさがより際立った相好の崩し方だ。なんだか知らん顔したくなってきた。
「Aクラスに行って、試召戦争の準備ができていると宣言して来い。そうすれば今回は設備については見逃してやってもいい。ただし、宣戦布告はするな。すると戦争は避けられないからな。あくまでも戦争の意思と準備があるとだけ伝えるんだ」
「……それだけでいいのか？」
　根本が疑うのもムリは無い。根本ならば余計に、かしら。
「ああ。Bクラス代表がコレを着て言った通りに行動してくれたら見逃さんでもないが？」
　そう言って坂本が何処からともなく取り出したのは、先ほど木下が着て且つ、坂本のカバンから出てきた女子の制服。
「ま、他人ひとの趣味をとやかく言うつもりはないわ」
「「違うっ!!!!」」
　坂本も根本も大変ね。
「あ、違った。変態ね」
「「だからちげぇっ!!!!」」
　必死なところが逆に、……ねぇ？
「何を考えているか解ったから否定しているんだぞ？　……全く。話が進まんだろうが」
　坂本がジリジリと詰め寄っていく。
「で。どうするよ？　おい」
「ば、馬鹿なことを言うな！　この俺がそんな巫山戯たことを……！」

根本が慌てふためく。そりゃ嫌……なの？
「Ｂクラス生徒全員で必ず実行させよう！」
みんなを鼓舞するように言う岩下と、
「任せて！　必ずやらせるから！　ね、律子？」
楽しそうな雰囲気と嬉しいという気持ちを前面に押し出した菊入。
『それだけで教室を守れるなら、やらない手はないな！』
『そうだわ！』
『俺達も協力は惜しまない！』
「ええ、その通りよ！　泣いても殴るのを止めないで!!」
「ちょっ！　理科!?」
『『解った!!』』
「解ったぁ!?!?　みんな、落ち着いて！」
『『大丈夫、泣いても殴るのを止めない!!』』
「怖いよっ！」
因みに、みんなっていうのはＢクラスとＦクラスの連合群。
群れが半端なく大きい。数の暴力、だわ。こういう場合は……
「見ざる、聞かざる、言うでござる！　覚悟なさいっ！」
「最悪だな!?」
最悪かな？　坂本、根本には勝てないから。
「まぁまぁ、雄二。とにかく決定でいいよね？　岩下さん」
「もちろん♪」
「貴様、勝手に人を売るな！　お、おい！　聞いて……くっ！　よ、寄るな！　変たぐふぅっ！」
『とりあえず黙らせました』
「お、おう。ありがとう」
一瞬で自身のとこの代表を見限って腹部に拳を打ち込んだＢクラス男子。野中ってヤツだったかしら。変わり身の早さに坂本も目を丸くしていた。
ていうか、岩下は気にせずに明久と楽しそうに話してる。……ライバル？　翔子に報告っと。
ｐｒｒｒ……。あら？　もう返ってきた。写メ？　……仕方な

いわね。
「岩下ー。はい、ちーず」
　メールに添付、送ー信ーっと。
「阿部さん、後で私とも写メ撮ろ？　それも一緒にもらっていい？　あ、アド交換しとこ？」
「いいわよ。――はい。じゃ、メールも……送ったから」
　翔子のをコピペ。早い早い。あ、写メ。
「わっ、ホントだ。ありがと阿部さん」
「理科でいいわ。こっちも律子って呼ばせてもらうから。はい、チーズ？」
　ちゃっかり、上目遣いな律子といつの間にか腕組みして真由美がカメラに入ってきた。
「あと……真由美も、ね」
　写真を撮った時の花のような笑顔が一変、隣に立って恨みがましく見ている菊入こと真由美。
「ズルいよ？　二人だけで盛り上がってるしい……」
「ごめんごめん。阿部…じゃなかった……理科。なんかこれからは、真由美共々よろしくね？」
「理科ちゃん、よろしくっ」
「もしもし、あたしリカ。真由美ちゃんよろしくね☆」
「まだあるのかな？」
「なんか、ありそうだよ真由美」
　どうやら、二人にも伝わったみたいね。
「「リカちゃん電話」」
「何をやってるんだおまえら……。
　おっと、逃がさねぇぞ？　根本恭子ちゃん？」
「や、やめっ――」
「「えいっ」」
「がふっ！」
　軽やかな首筋への攻撃。思わず見惚れてたわ。
「さすがね律子、真由美。素晴らしいコンビネーションだったわ」

そりゃもうスゴいのなんのって。寸分の狂いもなく、同時に左右から挟み込んでた。ぐったり具合から見ても、威力も折り紙つき。
親指を立ててサムズアップ！　うん、二人共いい笑顔だわ。
「では、着付けに移るとするか。明久、任せたぞ」
「了解っ」
ぐったりと倒れてる根本に近付き、制服を強引に脱がせる。うっ！
こぽっ。という音と共に喉が焼けた。
「酸っぱっ。明久、気をつけて。視覚に入れちゃダメよ？　精神汚染が半端ないわ」
「解った。ありがとう、理科」
「これはこの上ない苦痛だな。俺らもそれも」
「だね。うーん……。これ、どうするんだろう？」
「吉井くん、私がやってあげるよ」
律子がそう提案した。
「そう？　悪いね、岩下さん。それじゃ、折角だし可愛くしてあげて」
「それは無理。土台が腐ってるから」
「酷い言い様だね。それだけのことはしてきたんだろうけれど。
岩下さん。じゃ、あとはよろしく」
「なんかオッケー」
根本のことだからか、殊更に適当だ。というか、真由美はもうメイクに入ってる。
ん？　明久は、もう戻ったのかしら。
「今日だけは、姫路に譲ったげる」
「何がだ？　阿部」
「あら、須川。待ちきれなくなった？」
「ま、まぁ……否定はしねぇよ」
「……〈コクコク〉」
いつの間にか、話の輪に加わっていた土屋も頷いた。
とりあえず、目下の礼として須川と土屋の前に手を差し出す。
「どうした？」
「……手？」

「苦しゅうない」と軽く演じながら解りやすく促した。これで解らなければ、諦めて。
「っ！　まさか……！」
「……須川、何か解ったのか？」
　おっ、須川がいち早く察したようね。
「御手をお許しいただけるという事か!?」
「……何っ!?」
　土屋、もう鼻を押さえているの？　早くない？
「あら？　不満だったかしら、土屋」
　だったら……。
　と、下着の見えそうな絶対領域までスカートを摺ずり上げる。
「ももにどうぞ？」
「……!!?〈ブシャァァァッ!!!〉」
「ムッツ??リーニーッ!?」
「はい、須川」
　椅子に足を置いて太股を前に出した。
「さ、召し上がれ」
「「〈ブシャァァァァッ!!!〉」」
『『〈ブシャァァァァッ!!!〉』』
　アレ？　教室が血生臭いんだけど。
「ねぇ、おっきした？　って幼児言葉ってローマ字に直して頭にBを置いたら、勃ぼっ――」
「この状態のムッツリーニに止めをさすのか!?」
「ん？　土屋に須川。倒れた体勢のままだと下着が見えるはずなんだけどねー、……興奮した？」
〈ブシャァァァァッ!!〉
　再度、鮮血の華が咲いた。
「……我が生涯に、一片の悔い無し」
「俺も、だ……」
　なんか、男子陣に止めをさした女の子がいるんだって。
――阿部理科って言うらしいわよ？

第二〇問　嘘つきゆーくんと変われたしょーちゃん

なんかスゴい気持ちの悪い……Ｉｎｎｓｍｏｕｔｈ（インスマウス＝魚面）やＤｅｅｐ　Ｏｎｅｓ（ディープワンズ＝蛙面）こと深きものどものような生理的嫌悪感を抱く異常な存在だったわ。二日経った今でもこれ？　なんて威力よ。さすが、

「Ｂクラス代表は、伊達じゃないってワケね」

「違うと思うよ。ま、何を考えていたかは解らないけど、そういう表情の時の理科は半端ないよね」

そんなやりとりを目にした坂本は、「またか……」と項垂れそうになった頭をなんとか持ち上げて教壇からＦクラスに告げる。

「まずはみんなに礼を言いたい」

え？　どうしよう。終焉ラグナロクぐらい訪れるんじゃない？

「所謂、『神々の黄昏』ってヤツね」

「違ぇよ！　……おほん！　とにかく、周りの連中には不可能だと言われていたにも拘らずここまで来れたのは、他でもないみんなの協力があってのことだ。感謝している」

カミカゼ隊含め、みんなに合図。いくわよ？

「「ざわざわ……」」

「わざとらしく擬音を口にしてんじゃねぇよ!?」

「あら？　おかしいわね……」

「〝あら？〟じゃねー！　っていうか、おかしいのはオマエだよ!?　オマエだから！　な？　頼むよ?!」

からかい過ぎたかしら？　苦労性なのね。

「大変ね、坂本も」

「そうだね」

「「疲れているのね（んだね）」」

「おかげさまでな！」

「ほんとにだよ、ムリしないで雄二。大だい変態なんだから」

「誰がだ!?」

大変と変態をくっつけるだけで大変な意味合いになったわね。
あ。それより、注意しないと。
「ちょっと、明久。広辞苑にも載ってること態々言わなくても……」
「載ってたまるかっ!!!」
「坂本雄二。鬣たてがみポケモン。ゴリラの進化系」
明久に親指を立てて見せた。ナイスよ。
「進化してたまるか!? 昔から人だ! しかも、図鑑違いだっつの!
ったく、おまえらは……。
だが、その反応は解らんでもな……解らないんだが、これは偽らざる俺の気持ちだ」
既に心労がたたって見えるけど、大丈夫かしら。……ま、坂本だしね。
「ここまで来た以上、絶対にAクラスに勝ちたい。勝って、生き残るには勉強すればいいってもんじゃないという現実を、教師共に突きつけるんだ!」
『うおぉーっ!』
『そうだーっ!』
『勉強だけじゃねぇんだーっ!』
テンションの上がっていってるのを横目に、冷めた目でそれらを見ていた。
「みんなありがとう。そして残るAクラス戦だが、これは一騎打ちで決着をつけたいと考えてる」
『どういうことだ?』
『誰と誰が一騎打ちをするんだ?』
『妹と義妹』
『妹だな』
『ばっか! 義妹に決まってんだろ』
「妹に優劣をつける時点で、あなた達は間違っているわ」
『『おぉーっ……。さっすが、阿部さん!』』
「落ち着けバカ! 今から説明してやるから聞いておけバカ共」
坂本はバンバン、と教壇を叩いてみんなを静まらせる。

「やるのは当然、俺と翔子だ」
は？　何を言いだすかと思えば……。一騎討ち。それだけを聞けば、正しいと思うわ。Ａクラス平均と比較すれば、文字通り、桁違いの戦力差に敗北は必至。Ａクラスレベルが三人じゃぁ、勝率はほとんど揺るがない限りなくゼロに近いものになる。だからこそ、一騎討ちというのは正しい。条件が揃えば勝てるわけだし？
けどねぇ……
「坂本じゃ勝てないでしょうが。〝元〟神童であって、現在は違う。
それとも何？　九割とは言わないわ。八割以上の勝率があって言っているわけ？」
「まぁ、阿部の言うとおり確かに翔子は強い。まともにやりあえば勝ち目は無いかもしれない」
〝かもしれない〟？　はっ。思わず鼻で笑っちゃったじゃない。
「違うわね。勝ち目なんて皆無でしょうに」
「っく……。だが、それはＤクラス戦もＢクラス戦も同じだっただろう？　まともにやりあえば俺たちに勝ち目はなかった」
「まぁそうね。決め手は、Ａクラスの点数を持った人間だったわけだけど」
明久は黙って聞いてる。おそらくは、何が言いたいのか解っているのだろう。
言葉を切って、目線で坂本に先を促す。
「ああ、そうだな。つまり、今回だって同じだ。俺は翔子に勝ち、Ｆクラスは Ａクラスを手に入れる。俺たちの勝ちは揺るがない」
バカ共は、それを信じて士気が高まったようだが、姫路は、若干の不安を覚えたようね。それは正しいわ。疑う事も覚えなさいな、姫路。
坂本は、一つ大きく頷いて、
「俺を信じて任せてくれ。過去に神童と言われた力を、今みんなに見せてやる」
『『『おおぉーーーっ!!』』』
教室は歓声に包まれた。あーあ。ダメね――

「さて、具体的なやり方だが……一騎打ちではフィールドを限定するつもりだ」
――どんどん不愉快になっていく。
「フィールド？　何の教科でやるつもりじゃ？」
「日本史だ」
ふっ……。あぁ、そういうこと。
「ただし、内容は限定する。レベルは小学生程度、方式は百点満点の上限あり、召喚獣勝負ではなく純粋な点数勝負とする」
……人の思い出を、想いを、
「でも同点だったら、きっと延長戦よね？　そうなったら問題のレベルも上げられちゃうんじゃないの？　神童って頭いい人だっけ？　でも坂本、昔のことなのよね……それ。ウチは、厳しいと思うんだけど」
「確かに島田の言うとおりじゃ」
「おいおい、あまり俺を舐めるなよ？　いくらなんでも、そこまで運に頼り切ったやり方を作戦などと言うものか」
「では、お主は霧島の集中力を乱す方法を知っておるのか？」
「いいや。アイツなら集中なんてしなくても、小学生レベルのテスト程度なら何の問題もないだろう」
踏み躙って、利用しようってのね……。
「で？」
「ああ、すまない。つい前置きが長くなった。俺がこのやり方を採った理由は一つ。ある問題が出れば、アイツは確実に間違えると知っているからだ」
ある問題？　……ふぅん……、そう。
「その問題は――『大化の改新』」
「〈ガリッ〉……雄二っ」
辺りに響くほどの歯軋りが聞こえた。明久も相当怒ってるわね。
「どうした、明久」
「見損なったぞ、雄二」
「は？　おまえ何言って……」

「６２５（むじこ）の改新。でしょ？
はぁ……翔子ちゃんを利用するっていうのか……？」
「なっ!?　おまえ、何でそれを！　それに……」
坂本も息を呑む。今ので大方予想はついているんでしょうけれどね。明久も幼なじみなんだって。
「いいから、さっきの質問に答えろよ雄二ぃっ!!」
「っ！　……おまえには関係ない」
明久の怒声に、坂本の瞳の色が変化していく様を見てとれた。
「てめぇっ!?」
「明久」
胸ぐらを掴みにかかる明久を、静かに諌めた。
「はーっ……ふぅ……。ごめん、理科お願い」
意識して深呼吸しなければ落ち着けないほど、怒ってたみたい。こっちはまだ、腸煮え繰り返ってるけど。
「坂本、アンタじゃ勝てないわ」
「いいや、そんなことはない。翔子は間違える。これは確実だ。そうしたら俺達の勝ち。晴れてこの教室とおさらばって寸法だ」
よかった。本っ当によかった。翔子が明久を好きになってくれて。
「ムリよ、有り得ない」
「くっ、士気を落とすような真似はするな。阿部、おまえは何がしたい。どっちの味方なんだよ」
「ふっ……ふふっ、あははっ！　どっちですって？　いつだって翔子の味方よ！」
当たり前でしょうに。
あの後もずーっと、そうだった。そして今までもこれからも、ずっとずっともっと先まで。
「アンタじゃ絶対に勝てない。断言してもいい」
「何を根拠に」
解らないでしょうね……。ええ、あなたには。
「アンタと違って、翔子はいつまでも思い出に縋りついたりしない」
坂本が息を呑んで、二の句を告げないでいた。

「ちゃんと思い出を大切にはしているわよ？　けれどね、大切にする事と縋る事は違うの。違うのよ」
今以上に無口な翔子にも話かけてくれて、何でもできる（小学生からしたら）憧れの人だもの。大切にしているわ。
「解って！」
「解っていないからそうやってできるんでしょう？
作戦？　Ｆクラスの環境を変えたい？　Ａクラスに勝ちたい？
勉強すればいいってもんじゃないって知らしめたい？
はっ。笑わせてくれるわね？　本当は、自分の都合を押し付けようとしているくせに」
あなたはどうなの？　坂本雄二。……いや、坂本自身、解らなくなってきているのかもね。
「ねぇ、何をする気だったの？　何がしたかったの？　……翔子に何を求めてたの？」
「っ!?　そ…れは……」
何も言えず、ただただ坂本は俯いていた。
「過去ばっかり顧みて、今を全く見てない。速度の違いはあれど、いつまでも変わらないなんて有り得ないのよ。アンタが足踏みしている間に翔子は走って……いえ、翔んで行ってるわよ？　現在進行形で」
「……そう、か。……そうか……
翔子は……変わった、のか……？」
「不変のものは無いのよ。広大な宇宙でさえ、今この時も変わり続けているのだから。
それに……坂本も変わったし、これからも変われる。……でしょう？」
「ああ、そうだな……」
「で、どうするの？　アンタが求めていた答えは、おそらく無いわよ？」
坂本は少し思案するように、目を閉じた。
まだ考えが纏まっていないのか、苦笑いを浮かべながら話始めた。
「うん、まぁ、阿部の言うとおりだったと思う。なんて言うかだな

……、とりあえず謝ろうと思う」
　言っている途中から坂本の表情が変わっていった。
「あぁ、うん、そうだな……。言ってて納得できた。俺は、過去の清算をしたかったのかもな……」
「相変わらず素直じゃないんだね、雄二は」
「うるせぇよ、明久」
　なんだかんだで仲良いのよねぇ、この二人。
「だったら協力してあげるわ。ね、みんな？」
　呼び掛けに皆が応じてくれる。
「ま、仕方なかろうて。友じゃからの」
　木下がウィンクをかます。っていうか、男に向かってしてるけど、全く違和感無い。
「ウチもいいわよ？　それより、吉井。霧島とのこと詳しく聞かせてもらうわよ？」
「アンタにも勝ち目は無いわよ？」
「うるさいっ！　ばーか！　阿部のばーかっ！」
　島田のそういう可愛いとこをもっと表面に出していけば好かれるのにねー。
　はぁ～……。
　横を見ると、明久もため息をついてた。思ったことは、同じみたい。
「私も何ができるか解りませんが、頑張ります！」
　姫路らしいっちゃらしいわよね。力み過ぎてコケないでよ？
「……水臭い。保健体育なら任せろ」
　たぶん、学校一でしょうしね。保健体育は。エロースの生まれ変わりかインキュバスやサッキュバスが前世なんじゃないかしら。
『ここまで来たんだ、やってやろうぜ！』
『今さらだろうが。代表』
『やぁーってやるぜぇ！』
　Ｆクラスの面々も協力してくれるようだ。
「おまえら……」
「泣いちゃうのかしら？」

「泣くか！　けど、ありがとな」
照れくさそうに頬を掻いてから、再燃した目で宣言した。
「んじゃ、改めて。
俺達は、Ａクラスに挑んで勝利をもぎ取る！　そうすれば俺達の机は――――」
『『システムデスクだ！』』

Ａクラス戦、開戦……。あなたの望む結末があるといいわね

第二一問　お茶にごす……の？

「一騎討ち？」
「ああ。Ｆクラスは試召戦争として、Ａクラス代表に一騎討ちを申し込む」
恒例の宣戦布告。
今回は代表の坂本を筆頭に、姫路、木下に土屋と主力メンバー勢揃いでＡクラスに来ていた。
「うーん、何が狙いなの？」
現在坂本と交渉のテーブルについているのは木下の双子の姉の木下優子。ホント……
「いつ見ても、そっくりよね。本当の姉弟みたいじゃない」
「「本当の姉弟よ（じゃ）!?」」
「時々知らない人になったり……」
「しないわよ!!」「せんのじゃ!!」
「あら、そう？　残念」
言いながら目の前のお菓子を適当に選び取る。
「はぁ～……。すまないな、木下。で、だ。さっきの答えだが、俺達Ｆクラスの勝利が狙いだ」
ため息をつかないで欲しいわね。って思っていたら、木下姉が苦笑しながら気にしないで。と手を振っていた。
「そりゃ、面倒な試召戦争を手軽に終わらせることができるのはありがたいけどね、だからと言ってリスクを冒す必要も無いかな」
「賢明だな」
あら、このお茶菓子おいしいっ。どこの物かしらね。――――岩鍵？
どこよ、それ。輸入物なんだ。の割には食べやすいじゃない。ふむふむ、協賛は……川菱って…、偽物クサイ名前ねぇ。

「あ、翔子。お茶おかわり」
「……ん。理科それ、ちょっともらう」
「はいはい～」
翔子と目が合った。もうそれこそ、キュピィィーン！　という擬音がつきそうなくらいには目が爛々としていた。二人して。
「明久、あ～ん」
「ちょっと待つんだ二人共！　Ｆクラスどころか、Ａクラスさえも敵に回してしまっているんだ！　お願いだから気づいて!?」
「……あー……、ところで、Ｃクラスとの試召戦争はどうだった？」
濁したわね。お茶飲んでいるだけに？
坂本が腕を組み、顎に手を当てながら訊く。
「時間は取られたけど、それだけだったよ？　何の問題もなし。代表がいつになくスゴかったから余計にね」
翔子が照れくさそうに身を縮こまらせた。かわいっ。
あ、木下姉、口角が痙攣気味よ！　気づいて！
「心の中でシンパシーを送って気づいてもらわないと」
「理科、せめてテレパシーにしよっか。
あとね、アレはきっと僕達のせいだから」
心外だわ。ただのふわふわティータイムなのに。
あれぇ？　って感じで顎に指を当てて首を傾げていると、
「いやいや。教室奪いに来たぜ！　って言ってるすぐ傍で、お茶してるんだよ？」
「じゃあ明久は、翔子からの誘いを断るってのね？」
「バカな!?　セメントでできたパンを食べさせられるくらいに有り得ないよ！」
確かに有り得ないわ。みんなそう思うでしょうよ。
木下の挑発に乗り、昨日Ａクラスに攻め込んだＣクラス。まあ代表があんなのでクラスの統一が取れてない奴らが勝てるわけないんだけど。
「Ｂクラスとやりあう気はあるか？」
「Ｂクラスって……、昨日来ていた…あの……」

「ああ。アレが代表をやってるクラスだ。幸い宣戦布告はまだされていないようだが、さてさて。どうなることやら」
「でも、BクラスはFクラスと戦争したから、三ヶ月の準備期間を取らない限り試召戦争はできないはずだよね？」
試召戦争のきまりの一つ、準備期間。
試召戦争の泥沼化を防ぐための取り決めとして、敗戦したクラスは三ヶ月の準備期間を経ない限り、自ら戦争を申し込むことはできない。
「知っているだろ？　実情はどうあれ、対外的にあの戦争は『和平交渉にて終結』ってなっていることを。規約にはなんの問題もない。……Bクラスだけじゃなくて、Dクラスもな」
「……それって脅迫？」
そんなもの脅迫の内に入らないって。力関係がかなり傾いているから相手の優位は揺るがない。嘘も方便ってね。
「人聞きが悪い。ただのお願いだよ」
事実、その通り。
お茶を啜りながら、ちらっと横を見る。
「うーん……わかったよ。何を企んでるのか知らないけど、Fクラスに負けるなんて思わないからね。その提案受けるよ」
「ほ、本当に？」
「島田ぁ、何驚いているのよ？　このクラスから持ちかけた話でしょうに」
木下姉は「いや、でも……」なんて言ってる島田に、何か思い出したのか身震いして言った。
「……だって、あんな格好した代表のいるクラスと戦争なんて嫌だもん……」
確かにお断りだわ。アレはPTSDになってもおかしくは……、精神崩壊起こさなかっただけマシ？
「でも、こっちからも提案。代表同士の一騎打ちじゃなくて、そうだね、お互いに人選をして、一騎討ち五回で三回勝った方の勝ち、っていうのなら受けてもいいよ」

「なるほど。こっちから姫路が出てくる可能性を警戒しているんだな？」
「うん。たぶん大丈夫だと思うけど、代表が調子悪くて姫路さんが絶好調だったら、問題次第では万が一があるかもしれないし」
姫路に限っては無いわね。何だかんだで優良児。才女の敵では無い。
「安心してくれ。こちらからは俺が出る」
「無理だよ。その言葉を鵜呑みにはできないよ」
これは競争じゃなくて戦争だからね、と付け足す。当然ね。それを理解してない輩が多過ぎる。土台無理な話かもしれないが……。
「そうか。それなら、その条件を呑んでも良い」
あっさり呑んだけど、おそらくは今もテストを受けているあの二人も使うんでしょうね。
「ホント？　嬉しいな♪」
「けど、勝負する内容はこちらで決めさせて貰う。そのくらいのハンデはあってもいいはずだ」
教室奪うぜ。って言って尚且つ、教科の選択権を全部よこせってのは随分と図太い神経の持ち主。ほんっと、ズル賢いヤツ。
「え？　うーん……」
眉間にシワを寄せてるけど、あそこ押しちゃぁダメかな？
「……受けてもいい」
カリカリカリカリ……。とぽっきーを小動物のような動作で食べる翔子。
「……〈ごくん〉。雄二の提案を受けてもいい」
「あはは……。でも代表。いいの？」
「……その代わり、条件がある」
「条件？」
「……うん」
一応初戦が始まる前にカヲルさんと話はつけておいたけど、
「……負けた方は何でも一つ言うことを聞く」
それとは別にってこと……？

「……〈カチャカチャ〉」
「土屋何してるの？」
「……撮影準備」
何を撮影するつもりなのよ。もうちょっと考えなさいな。
「じゃ、こうしよう？　勝負内容は五つの内の三つをそっちに決めさせてあげる。二つはうちで決めさせて？」
ま、妥当な線ね。
「交渉成立だな」
「……勝負はいつ？」
「そうだな。十時からでいいか？」
「……わかった。明久も理科も頑張って」
「お互いに、よ」
「翔子ちゃんもね」
「よし。交渉は成立だ。一旦教室に戻るぞ」
「そうだね。皆にも報告しなくちゃいけないからね」
さ、忙しくなるわよ？

第二二問　美闘士達の決戦！『クイーンずブレイド』

今日はここ数日の戦争で何度もお世話になっている、Ａクラス担任かつ学年主任の高橋先生が立会人を務める。知的な眼鏡とタイトスカートの組み合わせって……いやらしいわよね？　気のせい？　ん～……

「明久」

「何？」

「ムラムラする」

「何言ってんのさ!?」

「では、両名共準備は良いですか？」

クールね、高橋先生。

「ああ」

「……問題ない」

会場はＡクラス。こっちの方が広いし、腐った畳のＦクラスじゃ締まらないしね。

「それでは一人目の方、どうぞ」

「アタシから行くよっ」

向こうは木下の姉、木下優子。

対するこちらは、

「ワシがやろう」

その弟、木下秀吉。

「ところでさ、秀吉」

「なんじゃ？　姉上」

「Ｃクラスの小山さんって知ってる？」

「はて、誰じゃ？」

Ｃクラスの小山って、確かこの前木下が……

「じゃーいいや。その代わり、ちょっとこっちに来てくれる？」

「うん？　ワシを廊下に連れ出してどうするんじゃ姉上？」
木下が姉のフリをして罵倒しまくった相手だったわね……。
あー、この分じゃぁ大分お怒りね。
手を合わせて目を瞑る。
木下……
『姉上、勝負は――――どうしてワシの腕を掴む？』
『アンタ、Ｃクラスで何してくれたのかしら？　どうしてアタシがＣクラスの人達を豚呼ばわりしてることになってるのかなぁ？』
『はっはっは。それはじゃな、姉上の本性をワシなりに推測して――――あ、姉上っ！　ちがっ……！　その関節はそっちには曲がらなっ……！』
〈ガラガラガラ……〉
扉を開けて木下姉が戻ってくる。
「潔く散った戦士バカに、黙祷」
「やめいっ！〈すぱぁん！〉」
「いたいわ、明久」
にしても、さすが明久。キレが半端ない。……それより、ハリセンも使うようになったのね。
「秀吉は急用ができたから帰るってさっ。代わりの人を出してくれる？」
「じゃ、お相手願おうかしら？」
一歩前に出て、すぐに答えた。
「あなたが？」
「ええ、お手柔らかに」
「おい、何を勝手に！」
「静かになさい。肩書きだけの代表さん」
「くっ……！」
坂本は苦虫を噛み潰したような顔になった。
「アンタは勝つことだけを考えてなさい」
「いや、だからこそアイツらを味方に入れたんだろうに」
仕方がないのできっちりと教える。

左手で右肘を持って、右手で頬杖をついて言った。
「いえ、個々ではなく、タッグの方が強いわ。そのことはあなたが一番理解できるでしょう？」
「……まぁ、な」
「でも、安心してくれていいわよ？　アンタ達に阿部理科との格の違いを教えてあげるから」
そのセリフにいち早く、木下姉が食らい付く。
「はい？　こっちにも言ったのかなぁ？」
ものスゴくいい笑顔ね。青筋の浮かんだ個性的なものだけども。
「もちろんよ。あら、解り辛かった？　理解力に乏しいのね」
「言ってくれるわね。たかが、Ｆクラスのクセに何を言っているの？
格の違いってそっち側が感じることでしょう」
「木下さん、結果で示せばいい事です。お二方、そろそろ初めてください。
教科は、如何しますか？」
高橋先生から叱責され、木下姉は素直に頷く。
「教科の選択は、あげるわ」
勝利は譲らないけれど。
「は？　あのね、どこまで巫山戯るつもりよ」
「そんなつもりは無いわ。回数が限られているんだもの、必要がないからあげただけ。それでも気に入らないっていうなら、こっちの得意科目である化学をあなたが選択すればいいわ」
「解った、受けて立ってあげるっ」
単　純。もっと思考なさいな、……だから、相手の手の平の上で踊ることになる。
「選択科目は、化学。……承認します。それでは、始めてください」
「「試獣召喚！」」
「すぐ楽にしてあげる」
両手を広げて、
「刮目なさい」
パン！　と柏手かしわでを打った。

「はい、おしまい」
種も仕掛けもありませんと両腕を軽く開いて見せ、そして優雅に見えるようしてみせた。
「え？　どういう……」
理解が追いつかないんでしょうね。
ただ。目の前では、既に消えていく自身の召喚獣を木下姉は呆然と見ていた。

『Ｆクラス　阿部理科
化学　　７７２点
ＶＳ
化学　　０点
Ａクラス　木下優子　』

急な音の方に意識をやったその瞬間に、倍はある点数にて素早く撃破した。そう……、ただそれだけ。
「それにしても理科、今日は調子悪かった？」
「「は？」」
「残った時間寝てたからね」
「「はぁ!?!?!?」」
「しょ、勝者、Ｆクラス阿部理科」
驚き過ぎよ、全く。そんなにおかしなこと言ったかしら？　高橋先生も、あんな一瞬で、しかも透きをついて終わらせるとは思ってなかったみたいね。
あー、そうそう。
「坂本も、Ａクラスの人間も、高橋先生も……、人を見下す前に己を磨いてみてわ？　蛙かわずよ、大海を知れってとこかしら？
曲がりなりにもＡクラスなんだから、理解……できるわよね？」
今回、腕輪を使わなかったにしても、律子と真由美の方がよっぽど大変だったわ。
腕輪このしあいのことはカヲルさんにもう言ってある。その代わ

りに、次の土日は学園に泊まり込みになったんだけどね。
『理科』という名前は、伊達じゃぁないの。名に恥じない生き方をしているつもりよ？　〝つもり〟で終わるなんてバカな真似はしないけど」
　木下姉に背を向けて自クラスに戻った。
「では、次の方どうぞ」
「……〈スック〉」
　土屋が立ち上がった。
　科目選択権がここで初めて活きてくる。
「じゃ、ボクが行こうかな」
　Ａクラスからは髪をショートカットにした、ボーイッシュな女子が出てきた。
「一年の終わりに転入してきた工藤愛子です。よろしくね」
　ぱっと見少年のようだ。かなり爽やかな印象も影響しているだろう。
「教科は何にしますか？」
「……保健体育」
　高橋先生の問いに即答した土屋。唯一無二の武器選択。
「土屋君だっけ？　随分と保健体育が得意みたいだね？」
　工藤が土屋に話かける。随分と余裕そうだけど、これの保健体育にかける情熱……いえ、性欲の実力を知らないの？
「……事実無根〈ブンブン！〉」
　途中から口に出てしまったわね。
「学年どころか学園一のどスケベの土屋に――」
「でも、ボクだってかなり得意なんだよ？　……キミとは違って、実技で、ね♪」
「――刺客どうるいがっ！」
「理科……。しっ」
　明久が人差し指を唇に当ててきた後、「ね？」と首を傾げていた。あら、いいわね♪
　って。

あのね、翔子……土屋ばりにシャッターをきるの、やめてみよっか。
「……くっ！　全くもって興味ない〈ドバドバ〉」
鼻血を止めてからいいなさいよ。カメラのフラッシュの中、目元を隠してみると、いつの間にか土屋も参戦していた。
……。
「眩しいから！」
ホント、目がチカチカする。
「……ごめん、理科」
「……すまな」
「Ｂクラス戦での約束は反古させていただくわ」
土屋は、見惚れるような土下座を繰り出した。
「申し訳ございませんでした。然るべき処置の後、何卒、もう一度ご考慮のほど、よろしくお願い致します」
「行動と結果で示しなさい」
「……仰せのままに」
恭しく腰から折るお辞儀をする土屋。
「あはは♪　面白いねー、Ｆクラスの人って。
あ、そっちのキミ、吉井君だっけ？　勉強苦手そうだし、保健体育で良かったらボクが手取り足取り教えてあげようか？　もちろん実技で」
「よろしく！　と言いたいところ――」
〝なんだけどね〟とでも続くのかしら？
「吉井には永遠にそんな機会なんて来ないから、保健体育の勉強なんて要らないのよ！」
「そうです！　永遠に必要ありません！」
「そんなことは無いわね」
「「え？！」」
驚き過ぎじゃない？　アンタ達。
「少なくとも、二人はいるわよ？　明久にじっくりたっぷりねっとりと、実技を教える人間が。実戦経験は無いけれどね」

教室の半数―2が反応してくれる。ニッシーと久保は、翔子の気持ちに気付いていたのかしらね。
「ちょっ!? 落ち着いて、理科」
「……そう、私は四十八手を覚えた」
今度は、二人も反応した。久保が眼鏡の中央の弦部分を押さえながら少しそっぽを向き、ニッシーは相変わらず無反応――――あ、今盛大なため息ついた。そして女子にも反応が……大丈夫? ……かしら。Aクラスは魔の巣窟だったわけね。
「何だって!? どうやってそんなものを!」
明久の疑問は、あっさり解消される。
「……ぐーぐるって便利」
「ネット社会のバカっ!」
「「明久、大丈夫?」」
「二人がね!?」
「日本語、大丈夫?」
「……心配。明久、病院行こ」
「僕は二人の仕打ちに傷ついたっ!」
明久弄りは、此処までにして、っと。……西村先生、お疲れですか? 米噛みを揉み解さないと取れないほどの頭痛って辛そうだわ。
「そろそろ召喚を開始してください」
ちょうどいい頃合いに、高橋先生から声が上がる。
「はーい。試獣召喚っと」
「……試獣召喚」
現れたのは、女子高生に巨大な斧を持たせたような姿の工藤の召喚獣。それにタイトルをつけるとしたら『セーラー服と大戦斧』かしら。土屋のは、もう見馴れた忍び装束に小太刀の二刀流。こっちのタイトルは、『天誅~互いに~』ってとこ? 首をブンブン振ってる土屋は、置いておきました♪
ちゃん、ちゃん♪

第二三問　ゴロゴロの実？　ｖｓ　鮮血のムッツリーニ

工藤が艶っぽく笑いかけるのと同時に、腕輪を光らせながら召喚獣が動いた。
巨大な斧に雷光を纏わせ、予想外のスピードで土屋の召喚獣に詰め寄る。
「早速だけど……それじゃ、バイバイ。ムッツリーニくん」
そして、豪腕で斧を振るう。
おそらく、誰もが土屋の召喚獣を斧が両断する――
「……加速」
――と思った直後、土屋の腕輪が輝き、彼の姿がブレた。
が、
「くっ……！」
「甘いよ？　ムッツリーニくん」
工藤は、いつの間にかその紫電をドーム状にして、自身の周囲へと張り巡らせていた。工藤も一気に数ヶ所の傷口を作って、蹈鞴たたらを踏む。
速さでいえば先ほどの比では追い付かないほどの攻防に教室が静寂に包まれた。
「……まさか、仕留め損なうとは…」
「おもしろそうだったから覗いてたんだよねぇ～、……Ｄクラス戦」
「っ！……、迂闊だった。俺とした事が、配慮に欠いた」
「油断大敵。なんだよね？　阿部さん」
一部のＡクラスにも浸透してたというよりは、Ｂクラス戦も見てたのね。
『油断大敵』。ま、当たり前だけど、当たり前を理解できないのね。みんなも。
『Ａクラス　工藤愛子

保健体育　　４４６点
ＶＳ
保健体育　　５７２点
Ｆクラス　土屋康太　』

ダメージを受けてあの点数。
「よっぽどのすけべね」
「……そんな事実は存在しない〈ブンブン〉」
話をしながらも工藤の背後から斬ろうとするが、またも、紫電を纏って土屋の攻撃を阻む。
「……厄介な」
「あれから、ムッツリーニくん対策の為に練習したからね」
可愛くウィンクをしている工藤に透きは見当たらず、土屋は責め開ぐねていた。
「もう降参？」
「……無礼なめるな！」
土屋は懐から手裏剣群を放っていた。取り出す動作が全く見えない。
棒手裏剣は真っ直ぐに、四つ刃の手裏剣は弧を描いて工藤に殺到した。棒手裏剣と手裏剣のタイミングをずらして放ってから二射目は全て同時に射る。やるわねぇ。
「くっ！……このぉっ！」
身の周りにドームを張り続けるのは工藤もさすがに厳しいのか、斧と体捌きによって凌いでいた。
その間にも、どんどん点数は減っていく。
「……おい」
土屋は、決めにかかるみたい。ぼそっ、と〝加速〟って呟いていた。
「背中ががら空きだ」
工藤がニヤァッと口角を吊り上げた。不味い！
「土屋！　退さがりなさいっ!!」
「違うよ。空けておいたんだよ」

「なっ!?」
「ボクのテリトリーにようこそ。ムッツリーニくん」
「…ちぃっ！」
　土屋が退がろうとするけど、工藤は小振りな攻撃で透きを作らない。
「そら！　そら！　そらっ！」
　斧で突き、横に躱せば払い、薙。後ろに飛び退こうとも、強く踏ん張り、前方に飛び上がりながらの斬り上げ。工藤が空中に浮いたところを反転してオーバーヘッドキックのような蹴りを頭部に繰り出し、蹴りの勢いのまま独楽の如く回転して斬撃を見舞う。
　あ。
「あはっ♪　ボディが――――」
　土屋の腕が弾かれた！
「土屋！　腕輪っ!!」
「解っている！」
　いつもの喋り方と違う為、土屋の焦りがよく見えた。言われる前に既にワードを唱えていたのだろう。叫んでいる途中で腕輪が光り土屋の姿がブレる。
　だが、工藤の腕輪と斧も光り輝いていた。
「――――がら空きだよ！」
　高速移動した先で土屋の上半身が刎ね飛んだ。
「「「え!!??」」」
　みんながおんなじ反応を示す。
　電光石火。
　高速の土屋を上回る光速で捕えたってわけね。
「……今回は敗けだ。だが、次は勝つ……！」
「望むところだよ、ムッツリーニくん。点数はこっちが負けてたし」
　二人が握手を交わし合う。土屋、女の子の肌よ？
「……そんな名前じゃない。土屋康太だ」
　3、
「あ、うん。康太くんね。じゃ、ボクも愛子で」

2、
「……」
1、
「康太くん？」
……0。
「……っ！〈ブシャアァァッ！〉」
「康太くん?!」
「21秒よ！　記録更新だわ」
「よかったね、ムッツリーニ」
「……〈ぐっ！〉」
力強く親指を立てているけど、気がついて！　そこは、――――工藤の太ももよ。
あ、また。
それは放物線を描いたが、器用に工藤は汚れないようにしてる。
「勝者、Ａクラス工藤愛子！」
そんなやりとりをやっている間にも、高橋先生は事務的に熟していく。
「土屋、元気出しなさい。反古にはしないから」
がばぁっ！　といきなり起き上がるかと思われたが、土屋の顔を覗き込んでいた工藤の胸にぶつかってバウンド太ももに着地。
「〈かっ！〉……、〈ブシャアァァッ！〉」
目を見開いてから鼻血を噴射。顔を逸らした為に工藤は無傷。無駄に紳士な土屋には感服しそうになるけど、……鼻血……。
「何、この残念な感じ」
「それ、理科が言っちゃダメだよ」
いつもと立場が違うとか言ったの誰？　いつだって本気よ！
「いい加減にしないと上方四方固めするわよ？」
「ちょっと待ってみんな！　Ｆクラスに混じって挙手しないで?!」
他クラスにも反応ものずきあり。
みんな寝技が好き。っと。
寝技を受けたい方は、連絡ぉいたっ。明久は、ツッコミが上手

い。っと。

第二四問　目からビィィーームッ!!!

「では、三人目の方どうぞ」
「あ、は、はいっ。私です」
姫路……か。まぁ、妥当ね。Ｆクラスには他にいないっていうのもあるんだけど。
「それなら、僕が相手をしよう」
「やはり来たか、学年次席。
ここが一番の心配どころだな」
学年次席、ねぇ……。坂本からしたら凄いのかしら？
「科目はどうしますか？」
「総合科目でお願いします」
高橋先生の声に、久保とかいうのが即答した。
「ちょっと待った！　何を勝手に！――――」
「坂本君、私は構いません」
「ああ、もうっ！　どいつもこいつも！　……ったく。解った、姫路に任せる」
「はいっ！」
「それでは……」
高橋先生がフィールドを展開する。
久保と姫路、それぞれの召喚獣が喚び出された。

『Ａクラス　久保利光
総合科目　３９９７点
ＶＳ
総合科目　４４０９点
Ｆクラス　姫路瑞樹　』

『マ、マジか!?』
『いつの間にこんな実力を!?』

『この点数、霧島翔子に匹敵するぞ……！』
無いわね。翔子に及んでない。
「姫路さん、どうやってそんなに強くなったんだ……？」
少しだけ悔しそうに久保が姫路に尋ねた。ま、がんばった方ではあるんだけどね。
「……私、このクラスの皆が好きなんです。人の為に一生懸命な皆のいる、Ｆクラスが」
褒め過ぎ。増長しちゃうから、こいつらは。
「Ｆクラスが好き？」
「はい。だから、がんばれるんです」
いい子なんだけど、真っ白過ぎて染まっていかないといいわね。朱に交われば赤っていうし。
「そうか。素敵なことだと思うよ。その点数も凄いしね――――」
久保は何か思いに耽っていたのか、暫く瞼を下ろしてから開いた。
「――――だからと言って負けるつもりは、更々ない。僕にだってプライドがあるんだ。悪いけど、姫路さん……ここは勝たせてもらおう！」
久保の繰り出した大鎌を弾き返して、姫路も己の気持ちを吐き出す。
「負けません！」
即座に腕輪を使って熱閃を浴びせる。弾かれた透きと開始早々の虚をついた見事な連撃。
「ぐっ…!?　しまった！」
お互いに召喚獣操作に馴れていないからこそ、決着は着かず。姫路も的の大きく急所も狙える胸辺りを射ち、久保は余計な動作はできないと、ただ体を丸めた。頭などの急所は守り、手足で受ける。
咄嗟の判断にしては、二人共に上出来ね。
明久も楽しそうに見てる。坂本の方には余裕が見てとれない。あの点差ならば、即決できるとでもほくそ笑んでいたの？　世の中そんなに甘くないわよ？
先に姫路が動いた。

姫路が駆け、相手目がけて突きを繰り――――違う！　そう思った時には剣先が輝き、再度の閃光が迸った。姫路はそのまま爆煙の中に突っ込み、大きく薙払って視界を正常に戻す。
「続けての使用は無いと思いましたか？」
「否定しないさ」
「そうですか。その程度の思いならば……私こそ勝たせてもらいます！」
「まだだ！　まだ終わっちゃいないっ！」
久保が鎌で突く。久保のは、斧槍というよりは、鎌槍……バルディッシュの類いだろう。大鎌に槍の穂先が付いている。
「させません！」
大剣で得物を搗ち上げた。ダメよ！　相手の得物は、槍じゃなく鎌なのに！
「捕えた！」
久保は踏ん張り、全力で鎌を振り下ろす。柄を大剣で受けるものの、曲がった刃先が肩に突き刺さる。姫路が驚愕に僅かばかり意識をやった刹那で、久保は姫路を蹴り飛ばして、自分の足元の方へと鎌を強く引いた。
「あっ！」
姫路が声を上げるも、時既に遅し。右肩を深く抉られて、大剣を振るうには不利な状況に陥った。
けれども、姫路の目は死んでいない。……ひゅ～♪　カッコいいわね。思わず口笛を吹いちゃった。
右手は添えるだけ、左手を軸に大剣を持ち替えて構え直す。
「すぅっ……、ふぅ……」
息を整えてまっすぐ相手を見据え、じりじりと姫路が擦り寄る。それに対して久保は、一足飛びに距離を縮めた。
「はぁっ！」
馴れないながらも、でき得る限りの小さい動作で久保の攻撃を捌き続けて身を守る。
久保の突きを大剣の腹で弾き、すぐ戻った鎌の払いを懐に潜り込ん

で避けた。姫路も攻撃できる間合いじゃない。
「甘いよ！　姫路さん」
久保が飛び退き、鎌を引いて姫路の背中を狙う。姫路の大剣が間合いに入るより早く、刃が背に食い込むだろう。
「百も承知です！」
そう返した姫路は、高く跳び上がった。姫路のセリフからして、前持って跳ぶ準備をしていたってわけね。
攻撃を予測していたっていうよりは、動きを誘導させた。……か。益々持ってスゴいじゃない。
先ほどまでは小振りの動作で凌いでいた姫路が、ここに来て漸く大剣を構え、上段から振り下ろした。
全体重がかかるようになんだろう。大剣の刃を下に、逆立ちする勢いで久保に斬りかかっていた。
「ハァァァァッ!!」
着地したばかりで体勢の整っていない久保の腕を浅く斬った。久保は武器を取り落としそうになるが、強く握りしめて防ぐ。
「っく、危なかった」
久保が思わず安堵の息をついた。
「そこです！」
強く叩きつけて跳ねた大剣の刃を、姫路は自信のダメージを顧みず思いっきり蹴り上げ、斬撃を生み出した。
「しまっ!?」
「これでお相子です！――――」
久保の左腕が宙を舞った。姫路は、それを見届けることもせずに大剣を横凪ぐ。
久保も無理矢理頭を切り替えて、バックステップで距離を保つ。
誰もが姫路の攻撃が避けられた。と思った時、「待ってました☆」と言わんばかりの獰猛な笑みが姫路に張り付いていた。
正直……ましい……。
「――――焼き尽くして！」
凪いだ大剣に沿って、剣先から〝熱閃も〟凪いだ。

「「!!!」」
声無き声で教室が揺れた。そんな使い方するとは思ってなかったんでしょうよ。
だけど何より、姫路の〝あの〟顔を見たのが大きいだろう。エンドルフィンが過剰分泌中かしら？
久保も姫路も結構ギリギリ。次の一手で決まりそうね。
「ここまでとはね。さすが姫路さんだ」
「ありがとうございます、久保君」
「いやいや。だけど、君も辛そうだ。姫路さん、もうお終いにしよう」
「もちろんです」
姫路が一歩踏み出したところで前に倒れた。
「え?!　どうして……!?」
あっ、久保の腕輪か！
「姫路さん、どうしても勝つ必要があるんだ。あと二戦……、何があるか解らないからね」
久保が眼鏡を中指で押し上げてから続ける。
「……だから、待った。この腕輪に馴れられないうちに倒せるよう、ね」
姫路が立とうとするものの、見えない何かに押さえつけられているみたいだ。しかも先ほどより、さらに身動きがとれていなかった。
「悪いけれど――――」
「動いて！　動いて!!　動いてぇっ!!!」
姫路は何とか動かそうと試みるが、微かに蠢くだけで、まさしく虫の息。
「――――ここは譲れない」
健闘虚しく、あっさりと首が刎ねられた。

『Ａクラス　久保利光
総合科目　３２点
ＶＳ
総合科目　０点

Ｆクラス　姫路瑞樹　』

「勝者、Ａクラス久保利光！」

高橋先生の宣言が響き渡る中で、姫路は「ごめんなさい」と泣いていた。

そこまで責任感じなくていいのに。いつもの姫路にホッと息を吐き、思いを馳せた。

さっき姫路を見た時、〝正直……怖おぞましい……。〟って思った。はぁ……。普段温和しい姫路でさえ、あそこまで好戦的になるなんてね。

モヤモヤする。

思い過ごしであればいいんだけど……。

第二五問　ＨｉＭＥ達の峻烈な舞

「久保君、あの腕輪ってやっぱり……」
「君達も気づいていたかと思うけど、重力を変化させる腕輪さ。吉井君」
　姫路の重心移動に合わせて発動させたわけね。刹那を見極めての発動、久保もやるわね。
「では、次の方どうぞ」
　次は、彼女達の出番ね。

☆

「はい！」
　高橋先生の声を聞いて二人で前に出たところ、理科と目が合った。
　気がつけば、笑みを浮かべてた。隣に立っている真由美も笑ってる。
「あの、どちらが……？」
「高橋先生、二人共です。タッグ戦をしてはいけないというルールはありませんから」
「そうですか。Ａクラスも二人になりますけど？」
「当然です」
　高橋先生は、首を傾げてた。一対一だろうが二対二だろうが変わらないのにって、なんか思ってるんだろうなー。
「ちょっと待ちなさいよ。その二人Ｆクラスじゃないでしょう？」
「だから？」
「っ！　何で参加して……！」
「他クラスの人間が参加しちゃいけないっていうのも、ルールになかったはずだが？」
「っく、……勝手にすればいいわ」
　坂本って、本当に意地悪だな。真由美、気をつけて。負けたらなん

か意地悪してくるかもしんない。
　ん？　話が終わったみたいだね。
「Ｆクラスからは、私、岩下律子と」
「菊入真由美が相手しいますっ」
「Ａクラスは、わたくし佐藤美穂さとうみほがお相手致します。以後お見知り置きを」
　前に出てきたのは頭良さそうな眼鏡の、いかにも優等生って感じの子。
「もう一人の方は……」
　高橋先生がＡクラスを見回すと、さっきまで坂本と言い合ってた女の子。闘志を滾たぎらせた目で佐藤さんに並び立つ。
「アタシが出ます。……代表」
「……優子、任せる」
　「ありがとう」って軽く会釈する。友達って距離感……かな？
なんか、ね。うーん……お堅いなぁ、なんか。
「ちょっと待て！　おまえは！」
　坂本、声大きいから。
「二回出ちゃダメだっていうルールは無いわよ？」
　うん、そうだよね。あ、やり返せてちょっと嬉しそう。木下さん、完璧だと思ってたけど、仲良くなれそうかも。
「Ａクラス、木下優子。
　Ａクラス以外をバカにしてたのは、……ごめんなさい。謝るわ。だから、今からは油断なんてしてやらない」
　望むところだから！
　なんか、楽しくなってきた。理科の時みたく期待していいのね？
「真由美、行こう」
「もっちろん。律子こそ先走らないでよぉ？」
「選択権は残りはＦクラスになります。科目は、どうしますか？」
　得意な科目でいく。Ｂクラスは、文系の人間が多い。古典、現国、現社に歴史……今回は、全般でいくか。
「社会で」

うん。と、相方の目を見て頷き合う。
「承認します！」
得意科目ならばＡクラスにも負けないっ！
「よろしく」
「お手柔らかに」
「構えなさい。完璧である為にも、完全に完膚無きまでに叩きのめして完封し、心服させてあげるっ」
それはまだ見下してるって解ってないんだろーね。周りが気づかせてくれない。うぅん。そういう人がいないのかも。なら、
「気づかせてあげる！」
「「「試獣召喚サモン！」」」

『Ａクラス　佐藤美穂
Ａクラス　木下優子
社会　４１３点
社会　４５３点
ＶＳ
社会　４４６点
社会　４８０点
Ｆ（Ｂ）クラス　岩下律子
Ｆ（Ｂ）クラス　菊入真由美　』

っ、はっ♪　ヤバい、なんか超イイ。全くもってスゴいイイ。みんなの惚けた間抜けな顔。
真由美は、社会系がずば抜けてる。んで、私は人体構造に関することと国語系が強い。自分で言うのもナンなんだけど、どちらかと言えば指揮官適正が高く、真由美が策略を巡らせる軍師よりってとこか。なんか体育もお互い得意だけどね。
さぁて……、
「おっ始ぱじめますか」
「そうだね。友達として、期待には答えたいしぃ」

言って同時に駆け出す。なんか合図無くとも、追随してくれる真由美は頼もしい限りだわ。
まずは、戦闘経験の少ない佐藤美穂から！
ていうか、
「温和しそうに見えて、物騒な武器よね」
「「鉄球とか」」
「優子さんまで何で?!」
存外ノリがいい。そういうとこ、
「好きよ？　木下さん」
あ、間違えた。なんか変なとこだけ伝えちゃった。
おぉっ!?　二人の召喚獣が前のめりになった。やった、チャンス！
剣の腹で叩いて木下さんの向きを変えて、佐藤さんへ向かう。
「いただきっ！」
すり抜けざまに佐藤さんの脇腹を裂き、反転しながら回し蹴りで押し出す。真由美の突きを避けられる体勢じゃない。さらに、背中に向けての袈裟斬りで挟み撃ち。
先に私の剣先が佐藤さんの体に入ったところで、
「『守護オーロラ』」
佐藤さんの一言ワードで透き通るような淡いグリーンの光が幕を広げ、佐藤さんを守って、私も真由美の攻撃も弾かれた。
って！
「何それ！　ズルいっ」
叫んでいる間に真由美が飛ばされた。
「きゃぁっ!?」
「私を忘れてもらっちゃぁ困るわね」
なんか、誤算だった。佐藤さんの腕輪の能力が防御に適していたなんて欠片も考えてなかったから。
「始めっから、全力全快の全撃全壊でいくから」
「おー、怖っ。真由美、早く立ちなって」
「解ってぇるよぉ。っと」
「姫路さんの熱閃には及ばないけど、さ。――『焔（ほむら）』」

木下さんが振るったランスが炎に包まれた。……マジ？
なんか、炎にいいイメージないわ～。理科に負けた時思い出すし。
「アタシのは常時展開型の腕輪能力。攻撃力も上がる優れもの」
「わたくしの守りは、味方にも施せる鉄壁」
「「げっ！」」
なんか思いっきり変な声出しちゃった。真由美と一緒して。
「アタシと美穂の攻撃陣は、強力激烈で凶悪よ？」
おっしゃる通りだと思います。
チラッと相方と目を合わせて、真由美と共に笑みを深める。
だからと言って――
「「――諦める道理は無い!!」」

第二六問　『ＨＯＬＹ』所属？

西洋槍ランスを風車の如く回転させて、私の攻撃を弾く。しかも、爆ぜ散る火の粉が僅かではあるけど、なんかダメージを受ける。ホンット、厄介。

佐藤さんを見てみると、真由美の攻撃を防いで崩れた体勢の真由美に鉄球を投げつけている。こっちはこっちで面倒。さらに驚異なのが、

「はっ！　やっ、このっ！〈キィン、キィンキィィンッ!!〉」

佐藤さんの能力が木下さんにも同時にかけられる上に、なんか張り続けることが可能なようなんだよ、ねっ。…っと。

今の攻撃も避けられることなく、幕に邪魔された。

なんかどうするっていうか、どうやって佐藤さんを倒して盾を潰すか……だよねぇ。

「随分と余裕、じゃない！」

木下さんの放つ西洋槍が穿とうと私に迫る。

「そう、でも無いんだけどね！」

なんとか捌き、距離を保つ……余裕すら無かった。

「考える暇すら与えないわ！」

「ならば作るまでっ！」

搗ち合ったまま、腕輪の能力を解放して木下さんを大きく吹き飛ばした。一瞬だから気づいてないみたいね。

「キャアッ！」

木下さんがぶつかって悲鳴を上げる佐藤さん。ん？……。

「ごめん、美穂」

今、……そういうことかぁ。なぁるほど～。今スゴく悪い顔している自信がある。ま、とにかく、

「真由美っ！　クロスシフト！」

私の呼びかけに対して「待ってました！」とばかりに気持ちの良い返事がきた。

「オッケェー」
うん、なんかアレだけど。
とか言いつつ、召喚獣の立ち位置を入れ替えながら素早く進み、みんなの視線がそれた時に私達自身もこっそり立ち位置を入れ替えた。そして、私の前に真由美の召喚獣が、真由美の前には私の召喚獣が立ち動く。
正直、時間稼ぎかなんかすれば何れは勝てるんだけど、それまでに点数がゼロになる可能性のが高い。でもそれは、相手にとってプレッシャーになる。真由美の予想外だろう点数の高さと、木下さんと変わらない私の点数。だと言うのに、大したダメージは与えられず自分達はじわじわと削れていく。
ああ。余裕だってのは、強ち間違いじゃなかったってわけだ。余裕に見えたっていうのは、知らないウチに、プレッシャーを感じてたってことかなんかだと思う。つ・ま・りぃ……、
「エンディングが、見えた！」
「「理科は、黙ってて」」
「酷いわ。ホントなのに」
「相変わらずだわ全く」
「理科らしいけどねっ」
でも今は勘弁して、ね？
だけど私達も、ねぇ？　真由美。
「……〈こくり〉」
軽く頷くだけで答えがくる。
今度は連撃途中に真由美と武器を入れ替えてリーチを変化させる。且つ、斧槍による斬り払いが優位に立たせてくれた。
真由美の方は、幾らか鎖を巻き取って輪っかの部分、繋ぎ目？　を剣先で地面に縫い付け攻撃を制限。――――し終えた瞬間、斧槍を返した。
当たり前に受け取った真由美に私自身の向かい側にいる佐藤さんも私の召喚獣の向かいにいる木下さんも息を呑んでいた。その透きが佐藤さん達に小さな傷を生む。

一瞬の間をおいて、木下さんが素手になった私を仕留めようと躍起になる。ははっ。ダメだよ、そんなに突っ込んで来ちゃぁ。しかも、対向斜線にいる私自身と私の召喚獣を見やり……忙しなく視線が動き回る。何処を見ていいか解らなくなって対応しきれていない。

西洋槍を躱して躱して、後ろにいた佐藤さんを飛び超えた。

「あっ!?」

佐藤さんも木下さんも気づかず、私の避けた西洋槍が佐藤さんのお腹に呑まれた。直撃の時、木下さんが腕を思いっきり引いて貫通せずにとどまった。

決め手に欠ける、か……。ならば！

手を天に掲げたところに炎波状剣フランベルジェが収まり集目される。そして、言わなくともやりたい事を理解していた真由美に胸が熱くなった。

『混乱世界カオティックフィールド』。アリスの世界を楽　しいんで？」

真由美の腕輪が輝き佐藤さんの防護幕が揺らぎ、木下さんの焔が大きく燃え上がった。途端、どちらも消滅して木下さん達が声を上げる。

「え？　どういうこと?!」

「わたくしも能力が勝手に!?」

木下さんの首を狙って斬りつける。それに対して木下さんは、〝足下に〟西洋槍をやって……

「っ!?」

不味いと思ったのだろう、上手く動かせないはずなんだけど我武者羅がむしゃらに武器を振り回して私の剣と触れ合う木下さん。そして私は、触れ合っただけの刃でその体を吹き飛ばしてみせた。私の腕輪は、ダメージが多少上がりはするけど、ただ吹き飛ばすだけ。ん、でもね、他の効果が高い腕輪と遜色無いのは、消費点数の少なさとほぼ回避不能の一撃。搗ち合った状態からのFクラス土屋の『加速』だったとしても、同時に発動した時点で、とりあえず土屋は吹き飛ぶ。で、唯一苦手なのが、遠距離からの攻撃。中距離なら即座に詰められるし

ね。
それをカバーする方法があるっちゃぁあるんだけど、かなり豪快……かな。真由美も呆れてたもんね。
背後に向き直り、討つ体勢に入る。
佐藤さんが喚きながら鎖を〝握って〟突っ込んで来た。
「何でなんですか!? 下がって！ 防御してっ！ 違っ、放ってください!!」
「ムリだよねぇ～、無意識下のとっさの行動は変えられない。ね？ 律子」
そう。私達みたく練習してない人が食らえば――
「――あべこべになる」
「――あべこべになる」
真由美の腕輪能力『混乱世界』は、あらゆる操作，思考が逆さまになる。木下さんが私の攻撃に対して西洋槍を下げたのもそう。佐藤さんが突っ込んで来たのや向き合っていた相手もそうだし、鉄球を投げないで鎖を握ったのもそう。武器を離さなかっただけマシかな。さらに言うなら、能力が消えたのもそう。〝使おうとした〟から消えた。ってことになる。
ま、攻撃一つにしても防御や回避どころか逃げだしたりもする。やろうと思っていた行動のほぼ正反対の動作に移るわけなんだよ。〝ほぼ〟っていうのは、ランダム性もあるんじゃないかと思ってる。思ってるって曖昧なんだけど、学園長も解らないみたい。……オイ。
そして……真由美と二人、交差する。
「んじゃ、一人目っ！」
私が横に一文字いちもんじ、
「打倒しぃて、…からの～」
真由美が縦に1文字いちもんじを刻む。
「能力解除。で、律子。そろそろ」
そうね。真由美のタイミングに任せて腕輪を使ってもらおっかな。木下さんの攻撃に合わせてやるのがベストだってのは……うん。

解ってるみたい。
「凄いわね、アナタ達」
素直に称賛を送ってくれる木下さん。照れるけれど、嬉しいね。
「でも、なんか苦手なヤツもあるからBクラスなんでしょうよ」
「Aクラスは全体的によくできてるけどねぇ、Eクラスみたく取り組むものが他に無いからってぇ気がしいなくも無いかなぁ。って」
確かに言えてるかもしんない。
「そうですね……、わたくし自身もまだ迷っているのでしょう。けれど、それを」
「認める強さが無い？」
佐藤さんの言葉尻を私が紡ぐ。真っ直ぐに佐藤さんを見つめる。
「……ですね」
少しの沈黙の後で、佐藤さんから肯定の意を得た。やっぱりかー、って思った。でも、
「なんかさー、甘々だよね」
悪いとは思うけど、そうも感じた。佐藤さん、だけとは言わないけど。
「うん。律子も私も他のみんなだって迷うしぃ」
当然。だってのに、なんか……
「それを理由に見下してる人がいて、容認する教師おとなもいるっと」
ふぅ……。さぁて、と。
「これ以上時間かけてもアレだから、ラストスパートに入りますか！」
いち早く木下さんが動いた。
「『焔』ァッ！　この一撃に全てをかける！」
くぅっ、左腕一本持ってかれた。しかも、炎が私に纏わり付いてくる。
けれど、
「それは冥土の土産に取っておいてよ」
木下さんの姿が破れ被れに見えてしまった私は、逆に冷静になった。
遅れて真由美が反応して『混乱世界』を展開。焔が霧散した。

「ここからはぁ、私達のターン」
ナイスよ！　真由美。っとぉ！
「ついでに教えてあげる。あなた達に足りない物、それは！――――」
斧槍をバッターボックスに立った選手みたく構えた真由美に向けて木下さんを飛ばす。
「情熱っ！」
木下さんが私の元に打ち返ってきて、それを交互にふっ飛ばす飛ばす飛ばす飛ばす！　そしてその度に言葉を重ねる私達。
「思想！」「理念！」「友愛！」「気品！」
真由美も木下さんを追って走り寄って来る。
「心の広さっ！」
木下さんが返ってきた瞬間、地面に向かって吹き飛ばす。真由美は追い付き、穂先に足をかけて待機。
「優しさぁぁ！」
返す刃で、バウンドした木下さんを上空に斬り上げる。私の腕輪の力で真由美も空高く舞う。
私も跳び上がりながら地面を強く叩いて能力発動、自身も木下さんに追い縋る。
追い……抜いたっ！
空中を踏み締めるように両足を広げ、正中線を大地と平行に隻腕を大上段に設置した。腕輪の煌めきが今まで以上に強くなっていく。上半身を弓のように大きくしならせ、全力で叩きつけた。
「そして何よりもー！――――」
私の横を矢の如く通り過ぎる刹那で、剣の腹を当てて能力解放。真由美にさらなる加速を促して――――
「――――速さが足りない!!!」
――――刺し穿つ槍。
神話に謳われた影の槍の如く。彼かの槍は、元々女性の持ち主らしいんだってさ。

『Ａクラス　佐藤美穂

Ａクラス　木下優子
社会　　０点
社会　　０点
ＶＳ
社会　　２５点
社会　１６６点
Ｆ（Ｂ）クラス　岩下律子
Ｆ（Ｂ）クラス　菊入真由美　『

「勝者、Ｆクラス岩下律子！　菊入真由美！」
高橋先生の宣言に、私達も召喚獣もハイタッチ♪
見たかっ！　なんかスゴい満足。

第二七問　三歩進んで二歩下がる

何で〝速さ〟なのかしら？　とりあえずは、
「「イェ～イ！」」
ハイタッチ。律子も真由美も末恐ろしいわね。あの操作力と腕輪能力。……ちーとなんじゃぁ…って思ったのは一人二人ではないはず。
ふと、違和感を覚えて前を見てみると、律子と真由美それぞれが左右のほっぺを持っていた。
「にゃにしゅんのょー」
「なんか理科のほっぺたやらかそうだったし、実際やらかいし」
ぽにゅぽにゅしながら話さないで。
「至福うって言葉を実感ちゅ～」
「ねー？」じゃないわよ。自分のでしなさいよ。
チラッ。と律子を見やる。
「～♪」
かなりご機嫌ね。
ちらっ。今度は真由美を見た。
「あんっ☆　って、さり気に服の下に手を突っ込まないで」
「胸は柔らかぁいかなって。ついでにおっぱい大きくしてあげようと」
「女なんだから柔らかいし、おっぱい大きくしてなんて望んじゃいないし。あとね、せめて了承とりなさいよ」
真由美を嗜めると、すぐさま尋ねてきた。
「理科ぁ、おっぱい揉んでいい？」
「いいわよ」
もちろん、快くＯＫを出したわ。それが友達ってもんよね。
「即答か！　それよりなんか、さっきから何言ってるのよ」
明久じゃなく律子にツッコまれるとは。
で。律子の問に対して真由美と二人して唸った。

ん～……、何って。
「おっぱい」
「何言ってんの!?　しかも、こんな目立っても手を離さないの?!」
そうね。忘れてしまうほどのフィット感。うん、スゴいわね。
「手ブラって」
「手ブラ!?　下着の下に突っ込んでんの!?」
後ろから抱きしめ、掬い上げるように胸を掴んでいる真由美。耳にかかる息がくすぐったい。
よく解んないけどたぶん……真由美はテクニシャン。あぁ、スゴいわ。かなり、
「クセになりそうっん……」
「なっちゃダメ！　それに、なんて声出すのよ！
あ、これ以上なんか言わないでいいからね？」
何か返す前に畳み掛ける感じで遮られた。周囲の温度が一気に奪われたように錯覚した。
「「……はい」」
今の律子には死を覚悟させられたわ。真由美と一緒して素直に返事をすることに何ら異存は無い。
「ん？」
ふと周りを見てみると、血の海だった。あら？
「何かあったの？」
（「「あんたらのせいだよ！」」）
生徒～教師まで心がレゾナンスしてた。――みたい。あとで明久に聞いた話。
そしてその件くだんの明久はというと……翔子によって沈められていた。
「下乳か……、やるわね」
翔子は制服をそこまで捲り上げて同じことをさせようとして、明久の息の根を止めた。
ツッコミが無いワケだわ。
あ、そうそう。

「ねえ、なんで〝速さ〟だったの？」
ちょっと気になってたのよ。
「ああ、あれね。孔子も言ってたでしょ？
〝少年易老学難成〟
（若いうちはまだ先があると思って勉強に必死になれないが、すぐに年月が過ぎて年をとり、何も学べないで終わってしまう、だから若いうちから勉学に励まなければならない）って。
なんか何も考えていないで停滞しているようにしか見えなかったし、光陰矢の如しだから後悔してからじゃ遅いんだよ、速く。ってね」
まさかここで孔子とはね。文系に関しては、律子トップクラスかな。
「律子ぉ、
〝朝聞道、夕死可矣。〟
（朝に人としてなすべき道を聞くことができれば、その日の夕方に死んでも後悔しない。真理を求める尊さをいう）ってのもあるよ？　やりたいことやれずに死んじゃうってのはヤだもんね」
あ、真由美も。
んー……にしても解らせてあげるんでしょう？　木下姉や佐藤、それに高橋教諭などの講師陣にも。……全く。
「だからこそ必死に生きてるんでしょ。大人はそれを忘れてしまったのかもね。
〝必死〟にではなく、〝一生懸命〟にとどまる。
そして、極々一部の一握りくらいが〝必死〟で居続けられる。だからこそ、誰もが憧れるワケ。
つまりはそれが、プロスポーツ選手であり、大俳優であるって事」
暗に木下姉に対して木下弟の事を揶揄して示した。あなたの弟さんは、あなたと違って目指している場所があるってね。
「結果、最後は理科が持っていく、と」
口を出すつもりはなかったんだけど、フォローしとこうかと思って。
「いつもいつもカッコいいよねー、理科はぁ」

真由美に褒められて悪い気がしない。大きくも小さくもない半端な胸を張って返す。
「まぁね。やりたいことをやり続けてるからね。もちろん、これからも。
だから言えるのよ。勉強だけしたって何にもなりゃしない。目標や目的があって初めて意味が成す。ただ闇雲に勉学を詰め込んで何になるの？　学者になりたいってんなら別」
「確かにねー」
みんなが勘違いしないよう補足する。
「あー、だからと言って疎かにしろってことじゃないわよ？　部活だけやってるEクラスも、せめて勉強する癖ぐらいはつけなさいな。ってこと。
将来、プロスポーツ選手になっている可能性は、まさしく一握りの逸材。どれだけ辛くても、苦しくても……諦めずに努力をし続けられるって人間は、きっと違うんでしょうけどね。
ま、その努力も、ひとの何倍何十倍ってのをできるかは大切。努力できるっていうのも、才能の一つなんでしょうね」
キリのいいところで声がかかった。
「そろそろ、最後の御一方前に出てください」
おぅっ、ナイスですね。己の事第一に動く！　そこに痺れる憧れるぅーっ！　って、忘れてた。とは言えないわね。何より高橋教諭の仕事だし。高橋洋子　氏うじは、できる女。
「随分と話込んじゃったみたいね。全く、飽きないわ律子も真由美も」
「理科アンタが言うな」
え？　どういうこと？　むぅ～……いっか。
とりあえず、明久がんばれぇ。（生死的な意味合いで）

第二八問　刀語り

静かだけど凛とした声が上がる。
「……はい」
Ａクラスから出てきたのは、翔子。
そして、こちらのクラスからは……
「俺の出番だな」
「待って雄二。ここは、僕が出る」
「は？　負けられないんだぞ」
「だからこそだよ。どうせ雄二は、復習とかしてないんでしょ？」
「うっ……！　だがな！」
「操作技術から言っても、僕の勝率の方が高いって雄二も理解してるよね？」
明久の言ってることが理解出来ているからこそ、坂本は何も言えずにいる。
「……雄二」
そこへ翔子が言葉を挟む。
「……あなたでは私に勝てない」
「そんなの！」
憤る坂本に翔子は、「……やってみなくとも解る」と、淡々と先読みして答えた。
「……今現時点で、テストの点数だけでの召喚獣勝負しか受けない」
「っ！　何を勝手な。こっちには選択権がある」
尚も食い下がる坂本に、翔子は透きの無い答えと真っ直ぐな気持ちでもって返した。
「……科目選択であってルール選択権ではない。
それに、私は明久としたいの」
「くっ…、勝手にしろ」
そのセリフが決定打になって、坂本が後ろの方へと下がっていった。

入れ代わりで明久が前に出て、翔子と対峙する。
「高橋先生、Ｆクラスは吉井明久が出ます」
「解りました。――教科はどうしますか？」
「どうしよっか、翔子ちゃん」
「……日本史。と言いたいところだけど、それじゃ私は勝てない」
「「はぁ？」」
恐らくは、高橋先生を除く全員が声を上げた。
あら？　律子と真由美は動じないのね。
「律子も真由美も驚いたりしないの？」
「なんか、可能性として考えてたしね」
「うんうん。幼なじみの理科が放置しないだろうしい、霧島さんと仲良さ気だからぁ、霧島さんなら教えてそうだなぁって」
うん。古典に関しては学年一位になり得る二人なだけあるわ。
「じゃぁ、総合科目でいこう。それなら、いい勝負ができるしね」
「吉井君、本当によろしいですか？　日本史ならば、あなたの勝率はかなり高いんですよ？」
「それだけの点差があるってことですね――それでも、です」
「解りました。これ以上は言いません」
みんなが明久のセリフに「何言ってんだ？」と訝し気な視線を浴びせていることに気がついた高橋先生は、
「因みに、吉井君と霧島さんとの点差は２２６点です」
さらっと補足した。
それを聞き流せなかったのか、坂本が大仰に驚く。
「はぁ!?　明久が、か!?」
「はい。吉井君が、です」
淀み無く受け答えしている高橋先生。
眼鏡のズレを直して二人に促す。
「では、そろそろ始めましょう」
「翔子ちゃん、よろしく。
試獣召喚サモン！」
「……此方こそ。試獣召喚サモン！」

『Ａクラス　霧島翔子
総合　５６３４点
ＶＳ
総合　５５１９点
Ｆクラス　吉井明久　』

クラス中が騒めき立つ。
『学年一位の霧島だけじゃねぇ!?　二人共にスゲー！』
『姫路の点数より、千点も高い！』
『どうなってるのよ!?　《観察処分者》じゃなかったの?!』
はぁ……。《観察処分者》だから侮るっていうのは、理解に苦しむわね。
……始まる。
「翔子ちゃん」
明久は元々学ランに木刀だった装備が、この学園の制服に刀と脇差。
翔子は日本の武将達が着けていたような感じの鎧に兜は無い剥き身の頭部と、同じく刀を持っていた。明久と違うのは脇差が無いってことでしょうね。
「……解ってる。油断するつもりは毛頭無い」
翔子は息を深く吐き、気持ちをリラックスさせるのとは逆ベクトルに眼光は鋭くなり、威圧感が増していく。明久を見つめたまま翔子と翔子の召喚獣は構えを取った。
「……全力」
明久は鞘に収めたまま、翔子は既に抜刀して青眼に構えて切っ先を鶺鴒せきれいの尾のように動かし、静かに佇んでいる。
明久が僅か刃を見せる程度抜く。
まずは、
「……はぁっ！」
翔子が先駆け動いた。

それに合わせて明久も抜刀し、腕をだらんと下げた。
翔子はそのまま大上段からの兜割り。明久はその攻撃に対して刀の棟で翔子の刀を跳ね上げ、自らの刀の切っ先を頭上に持っていき、左から右へ車に廻して勢いを付けて袈裟に近い胴斬りを行う。
「……っ！」
端から見ても解るくらいに息を呑む翔子。
間一髪。明久の攻撃を後ろに飛び下がって避け、その反動を利用して明久の頭上に飛び上がり、一気に斬り降ろす。
胴への攻撃を避けられた明久は無理に体勢を整えたりはせず、凪ぎの勢いを殺さないままに回転。後退しつつやや下がり気味の平青眼（刀を横に寝かせた中段の構え）で、じっと相手の動きを待って一気に攻める為に構えた明久。
「……甘い、二段構え！」
だが翔子は刀を振り降ろした後、さらに下段から地面すれすれに刀を打ち上げて、相手の小手を浅く斬る。
「くっ…！」
そして、そのまま首を狙いにきた斬撃に対して、明久は急遽中段の位置から刀を押し出す形で袈裟を放つ。
カキィィィン!!!!……。
明久と翔子が鍔競り合う。
「「ふっ……」」
明久と翔子につられるかのようなタイミングで揃って笑みを零した。
静まった教室に響く二人の声。
「さすがにヤルね、翔子ちゃん」
「……明久こそ」
瞬間、
『『『うおおおおおーーーっ!!!!』』』
音が爆発した。
誰も彼もが興奮を隠せないでいる。まるでお祭りね。

第二九問　それはまるで、バカボンド

すぅーっ……、はぁぁっ……。
呼吸をするのも忘れて見入ってしまったみたい。
さて、次はどうくるかしら？
「はぁっ!!」
お互いに弾き合って両者の腕輪が輝く。全く仲が良いこと。
「え？　えええっ!?!?」
「……あれ？」
明久が急に騒ぎ出したかと思ったら、翔子は逆にぽけ～っとしてた。
……何？　どういう能力よ。
「……あ、斬らなきゃ」
「翔子ちゃん、パンツ見えちゃうからっ！　って、ちょっと待っ…！っとぉ！」
翔子は思い出したように斬りつけ、明久はさっきとは違った不様な避け方をしている。パンツが見えるなんてどんな能力よ。明久の背が縮みでもしな…い……、そうか。そうだったの。じゃぁ、翔子は恐らく……。
「なんかどうしたの？　理科」
「いえ、二人の能力が何だったのかって考えてたわけ」
「理科ぁ。解った？」
「まぁね。予想でしかないけど、」
「うんうん」
律子と真由美が頷く。あんたらも仲が良いわね、ほんっと。
「明久の反応からして、恐らく翔子の腕輪能力は、フィードバックを逆算させて明久の視覚を召喚獣のものと入れ替えるんだと思うわ」
「何それ!?　なんかそれって」
「厄介な感じー？」
ま、律子も真由美もヒトのこと言えないんだけど。で、明久の能力

は――

「明久の腕輪が光った時、翔子がぽけーっとしてたからその反応から見て、翔子の意識を逸らすか幻覚でも見せるのかしらねぇ？」

「うわぁ、かなり強力だね」

「うん、ずば抜けてる腕輪っ」

「あなた達が言うワケ？」

「「え？　何が？」」

はぁ～……。ま、いいわ。

とにかく、これで一度仕切り直しのようね。

「翔子ちゃん。あの、戻してくれないと、その……見えちゃうから」

「……明久に見られるならば、本望」

本望なのは知ってるけど、時と場所を選ばないといけないんじゃない？

「……明久の能力の方がよっぽど厄介。

……」

数秒間目を閉じてから、ゆっくりと翔子の瞼が持ち上がっていく。

「……道筋は立てた。覚悟して、明久」

鋭くなった翔子の眼光を、明久は口元を緩めて返す。

「その数秒は、僕にもあったんだよ？　〝覚悟〟？――」

明久の腕輪が光る。

「――とっくに完了してる、よ！」

一足跳びに距離を詰めた明久は、心臓目がけて突きを入れる。

「……っ!?　ダァッ!!!」

意識の途切れていた翔子が覚醒して息つく暇も無く、らしくない大音量で吐き出された声でもって直前に迫ってた刃をとにかく叩き落とした。

それでも、逸らしきれずに脇腹を斬り裂く。翔子から追撃される前に明久が跳び退いて青眼へ構え直す。

「ハァッ……、ふぅっ。……厄介何かじゃない、最悪で災厄」

そう呟いて、お返しとばかりに相手へと踏み込みながら翔子の能力が発動。

「えっ?!」
急に視界が変わった為、微かではあったけど明久に透きができる。
僅かでもダメージや透きが欲しかったのだろう、翔子は動作が少なく到達までの時間が速い突きで返した。
「……腕をもらう」
言いつつ明久の胸へと定めて、さらなる混乱へと誘う。
明久は迷う時間すら惜しんで左へ跳び、躱そうと試みるが……
「ぐっ!……」
狙い違たがわず明久の右肩を貫いた。
すぐには抜かず、フィードバックで右肩に意識が向いたところを刀から〝手を離して〟鳩尾へ飛び蹴り。ピンポイントで爪先を当てて捻込んでいた。
「こっ〟!?」
明久自身が息を吐き出す。
しかし容赦無く翔子は回転して鳩尾を抉りながら、その勢いで反対側の脚を振り子のように動かして延髄蹴りを入れ背中を向けて着地。
その体勢で刀の柄を握って、鼻っ柱に暴れ馬の如く後ろ蹴りをかました。
「あっがぁ!?!?」
おもいっきり吹き飛ぶ明久に任せて、刺さっていた刀が抜ける。
翔子は血払いをして納刀。腰を落として柄に手をやり、向き直る。
所謂、居合いの構えだ。
「っう〟ー……」
よろよろと、膝をついていた明久と召喚獣が立ち上がる。
大丈夫かしら、明久。
「……明久。今楽にしてアゲル」
「あ〟ーっ……、それはちょっと遠慮するよ」
「……棄権する?」
小動物みたく首を傾げて愛らしい翔子に、さっきまでの衝撃を打ち払う意味もあるのか、明久は大げさなくらい首を横に振った。
「いいや。ま、さすがに効いたけどね」

苦笑を浮かべて後頭部を擦る。
「……フィードバックが大きい？」
確かに。相当辛そうな顔してる。点数の上限値によって変わってきたりするのかしら？
ああ……そういえば、Ｂクラス戦の律子，真由美との戦闘時も想像以上だったフィードバックの大きさに辟易したわね。
「だからと言って、まだ終わっちゃいないでしょ？」
明久は、「ふぅ……」と息を出し切ってから、呼吸を落ち着かせていた。
「行くよっ！」
飛び出した明久に対して、翔子は静かに佇む。
「……そう……」
瞼が半分ほど下りて、翔子はただ前を……虚空を見つめていた。
また明久の腕輪が光り、――――また？　っ！　……マズいっ！　ワンパターン化していた攻防は、そうなるように……？　くっ……！
そう。翔子は言ってたじゃない。〝……道筋は立てた。覚悟して、明久〟って。
気づき遅れて臍を噛む。
そして翔子は、〝普通に〟目を開けた。
「明久っ！　ダメよっ!!」
叫んでいた。
翔子は腕輪能力が解けた後も明久の攻撃を待ち、同時に起こって相手と相打ち覚悟の紙一重で回避を行う。
翔子の髪が一房舞った。
「……遅い」
一閃。
「がぁっ!?」
左腰の辺りから右肩にかけて裂傷が作られる。
「何あれ……」
「すっごぉい……」
律子と真由美が感嘆の声を漏らした。

でもその通りだと思う。スゴい。お世辞なんてものが必要無いぐらいに。
翔子は能力の効果が弱まってた為、忘れることを意識する必要がなかったのか？　あ、いや、考えていなかったっていうの？　全く、何も。ってことは、
「ふっ、ふふっ……」
笑いが零れるわ。
翔子は、明鏡止水を実行したっていうワケ？　スゴいわね、ホントに。
「……まだ……」
けど、そこで終わらない。
居合いは、抜刀と同時に攻撃する技術であると同時に、二の太刀、三の太刀を如何に素早く的確に放つかを追求したもの。
初太刀から刃を止めず流れるように刀を振るい、臨機応変に敵を斬る。それが居合いというわけ。
だから……
「ハァッ！」
ほら、来た。
「殺やらせないっ！」
翔子は首を凪ごうとしたみたいだったけど、明久に屈んで躱される。
それをものともせず、逆袈裟の位置で刃を反してさらに斬り下ろすも、明久は蹲踞の姿勢から翔子の攻撃と同時にパッと両手を大きく広げて飛び起き、脇差を投げて翔子の腹を刺しつつギリギリで躱した。
明久が放った蹲踞の姿勢からの攻撃は、恰あたかも獲物を狙って伏せて構えている虎が襲いかかる様に似ていた。
そして虎は――
チリッ。と刀が明久の頭を掠めるも、大事ない。目の前を刃が通り過ぎるのを見送って、翔子の右手首を落とした。
――獲物を逃がさない。
「……失敗しくじった…！」

直ぐ様、翔子は能力解放して腹の脇差を抜き、刀と肘を真っ直ぐに相手の喉元に伸ばして待つ。
すると、やられた相手は攻撃をしようと思えば自ずから喉を突いてしまい兼ねないので、攻撃し辛いはず。
何より、傷の痛み以外で明久が見せる苦悶の表情が物語っている。
だけど何かしら思いついたのか、明久が口に出す。
「峰打ち？」
何？　いきなりね。
「……ん？」
急に明久は何を言っているのかと、翔子も疑問符を浮かべた。
「逆刃になってるよ？」
「……え？」
その一言でチラッと翔子が刀を確認した瞬間、明久は刀を投げた。
槍投げのようにまっすぐじゃなく風車のように回転させて投げたのは、おそらく視認し辛くする為。
だからこそ胸……鎖骨辺りかしら？　その位置に投げ、前傾姿勢で走って追随するんでしょうね。
翔子もすぐに下段青眼に構え直し、迎撃体勢をとる。
だけど至近での投擲。しかも僅かに5歩程度しか空いてない距離からのもの。
十秒に満たない、たった数秒間だけの攻防。
全神経を、ありとあらゆる感覚を研ぎ澄まさせた濃密な数秒。コンマ単位まで記憶に残るような、いや、むしろ記憶の残滓ざんしにも残らないくらい鮮烈過ぎるのかもしれない。
「負ける――――」
翔子が飛んできた刀を弾く。その透きに明久は斬り落とした手首から刀を奪い取って翔子の横を斬り抜ける。
翔子は右膝から下を無くしてバランスを崩した。
消え入りそうなその声がなぜかはっきり聞こえて、
「……あ……」
と。空を仰いで喉元を曝す。

「――ものかぁぁぁっ!!!」
明久の叫びと共に振り下ろされた刀が、翔子の首を刈り取る。
――のと同時に、明久の首も刎ねられていた。
終焉おわりを楽しむかのようにゆっくりと時が流れて見えた。
!?
って、ぼーっと見てたけど……やるわね、翔子。
はぁっ。ホント、息つく暇も無い攻防ね。見てるだけで疲れちゃったわ。
でも、言えるのは……二人共スゴいしカッコいいってこと。
あら。目を輝かせているのが幾数名いるみたいだけど、おあいにく様。唾をつけるのが遅かったわね。
あ、翔子と目が合った。
「ねー?」
よく解っていなさ気だったけど、返してくれた。
ふふっ。かーわいいっ♪

第三〇問　だって涙が出ちゃう。女の子だもん！

『Ａクラス　霧島翔子
総合　０点
ＶＳ
総合　０点
Ｆクラス　吉井明久　』

「引き分け……？」
表れた結果を見て誰かが漏らした。
「勝者……」
だけど高橋先生の声を聞いて、先ほどまで誰もが想像しただろうものが打ち破られた。
曖昧にしないのねー。っていう事は、どちらが先に倒れたかを既に確認し終えているってワケか。
「Ｆクラス、吉井明久！」
『『『うぉぉーーっ!!!!』』』
Ｆクラスが勝鬨を上げて、Ａクラスは沈み込む。
「よっしゃぁー！　これでボロ教室ともおさらばだ！」
「ヒャッホーゥ!!」
「俺達の時代だ！」
「よ、吉井っ」
「うん？」
「これで、ウチらの卓袱台が……」
『『『システムデスクに！』』』
「最下層に位置したワシらの、」
「……歴史的な勝利だ……！」
「……」
島田に、木下，土屋も盛り上がっているが、坂本だけが憮然とした顔をしている。

落胆したいのは、こっちだわ。〝何に〟っていうのも理解できちゃうからなおさらにね。
「つたく……。はぁ……」
「理科？　なんかあった？」
機微を察して心配してくれた律子に、ひらひらと手を振って返すだけで、何も言わなかった。
「律子。たぶん、このFクラスのこともあるんだよ」
正解。律子も真由美の言葉で気づいたんだ？　頭の回転と空気を読むことに長けているのは素晴らしいわね。ただ勉強してなれる知識人では頭でっかちと変わらない。知恵も必要だからね。
にしても、バカ共が付け上がってるわ。……全く。躾けが必要みたいねー？　こいつらは。
人の話は最後まで聞くっていうのを習わなかったのかしら。
「三対二でFクラスの勝利です」
そう。Fクラスの勝利。だというのに……。ほんっと、
「時化た面してんじゃないわよ、アンタ」
「……るっせぇ」
「確かに、やりたかったこととはかけ離れたと言っていいんでしょうね」
「……何が言いたい？　はっきり言えよ」
解んないのね……。
ふぅーっと一つ息を吐いてから、落ちてきた前髪を掻き上げた。
「世の中勉強だけじゃないって証明がしたかったのだったかしら？」
少し待ってみたけど、言葉は返ってこない。
だんまりを決め込むつもり？　沈黙は肯定と取るわよ。
「まず、第一戦。ここからして予想外だった。瞬殺。二戦目の土屋は、予想を裏切り、敗北」
指折り解説するように話していく。片時も目線は外してなんかやらない。
「土屋自身も学年トップの実力。……でも負けた。そして、次の姫路も同じく、姫路の方が点数は高かったが久保に屈する。

この時点で既に、相手の方がアンタのやりたかったことをやってるわね。……どこで屈折しちゃったのかしら……？」
坂本は、悔しそうに下唇を噛み切っていた。
何て言えばいいのか……、子供のまま大きくなってしまって素直になれなくなったんでしょ。
うん。憶測だけど、当たってそうね。
「まだまともに撃破したBクラスの岩下律子，菊入真由美でさえ、Aクラス上位の点数を持っていた」
そして坂本が何より驚いたのが、
「最終戦。あなたの一番予想外だった……いや、心の何処かでは薄々気がついていて、見逃すことにした明久。
――結局、全てにおいてAクラスを上回る人材ばかりだっ　た」
結果は結果。きちんと、しかも最上と言ってもいいほどのものが出たはずだ。つまりは、
「私情を挟み込んだワケだ」
「は？」
「クラスが勝とうが何しようが、どうでもよかった。ってね」
「んなわけあるか」
「あぁ。負けるよりは、勝つ方がいいんでしょうよ。それでも、翔子とやりあって負けるなら……それで良かった。
――違う？」
「それ、は……」
とりあえず、確認してすっきりしたところで後は翔子に託しましょう。
「坂本、話は此処までいいわ。ある程度理解できたから」
けれども、そ・の・ま・え・にっ。
「戦後対談、始めましょうか」
翔子や坂本、高橋先生等と集まって来たところで会話を始める。
予　め　高　橋　先　生　と　鉄　じ　…　じ　や　な　い、ぇ　～
……あ。
「西村先生！」

「何だ阿部、どうした？」
「あ、いえ。やっと名前を思い出したってだけで」
「おまえなぁ」
米噛みの辺りを指で揉み解し始めた。あら？　疲れてるのね。なるべく早く切り上げましょうか。
「なる早で済ませます」
「いきなり略して言っても、伝わらないよ!?」
そう？　それなりにニュアンスは伝わると思うんだけど。
「いや、もう大丈夫だ。
吉井。……苦労してるんだな」
ほらね？　って言おうとしたらいつもの雰囲気は在らず、西村先生が明久に対して今まで見たことの無いくらい優しい眼差しを送るって……どんだけ？
「先生、どんなことでも慣れてしまえるんですよ……」
「はぁ……」
思わず首を傾げる。
どうして明久も揃って、西村先生とため息なんかついてるの？
ま、良いけれども。
「コホン」
一つ咳払いをして戦後処理を行う。
「まず始めに言っておくけれども、Ｆクラスは Ａクラスと設備交換しないわ」
「……え？」
誰かしら声が漏れ聞こえた後、
『『何イィィィィッ?!?!』』
Ｆクラス主催による、汚いオーケストラ。ホンット、勘弁してほしいんだけど。
「はっきり言って、アンタら何もしてないってのにシステムデスクがもらえるとでも思ったワケ？」
『『うん！』』
……はぁ～～～～～～っ。頭痛くなってきた。

「アンタら、バカぁ？
さっきの見てたんでしょうが。
それでも解らないってんなら、
『人のお話は、ちゃんと聞きましょうねー？』
ってとこから、きっっっちりと教えてくれる幼稚園を紹介状付きで紹介してあげるから入園してらっしゃい」
くいっ。と袖を引っ張られた。
そちらを見てみると、明久が首を振って言外に「ダメだよ」って伝えられた。
何が？　と問う前に耳障りな雑ぉ、…いや、騒音？　あー、害音？
うん、害音。それが聞こえてきた。
『イヤッホォォォイッ！』
『待て。大人数で押し寄せるのは、エプロンの先生に迷惑がかかる』
少人数でも迷惑どころか、害悪になると思うんだけど？
『そうだな』
『その通りだ』
『だったらまずは、俺が様子見としてエプロンの保母さんに』
保父さんもいるっていうの理解して……
『待て待て待て！　俺がエプロンの保母さんと』
『何をっ!?　俺のがエプロンの保母さんを』
……ないのね。保母さんと何しようっての。次のヤツは、保母さんにナニする気？
『抜け駆けか！　俺が裸エプロンの保母さんと』
風俗じゃないんだけど……。
『バカっ！　裸エプロンは俺のだ！』
もう、保母さんですらないじゃない。
「……あーあ、滅ばないかなぁ？」
「「理科っ!?」」
「ごめんごめん、悪いわね。律子と真由美も。
あ、西村先生。アレらに再教育が必要なようですので、此方を先生から親御さんへ渡しておいてください」

懐から出した物を手渡す。
「何だ、これは？」
「睡眠教育用の音源です」
西村氏は、「ほぅ……」と目を細めて興味を示した。
続けて、声音高く説明する。
「これさえあれば♪　寝る間も惜しんで勉強、食事を惜しんで勉強、水分補給惜しんで勉強。という将来有望な」
「待って待って待って！　過労死するし餓死するし渇死するし！」
「淀み無く言って見せたのに、何が不満だって言うの？」
「言うならば、全部なんだけど」
「テレビショッピングばりに、お得感をアピールしたんだけど？」
「むっ。何だ？　俺にも振るのか。さすがに困るんだけどな」
存外にノリがいいな鉄ちゃん。とか言いつつって?!　態々小突かなくてもいいのに。
顎に人差し指を当てて「むぅっ……」なんて唸って考えてみたんだけど、結局さっきのことにはまるっきり心当たりは無い……はず。……たぶん。……きっと。……ｍａｙ　ｂｅ．

なぁんて。やってから、高橋先生と共に説明していった。
箇条書きにすると――
・設備交換はしないがＥクラス程度の設備に直す。（勝敗に関わらず、直す予定だった）
・以下の数名は、週の半分をＡクラスで授業を受けることができる。
【阿部理科，岩下律子，菊入真由美，坂本雄二，須川亮，土屋康太，姫路瑞樹，吉井明久】
（木下秀吉は須川より点数が悪く、Ｆクラスで補習も含めて基礎からやり直し）
――だいたい、こんな感じかな。不承不承だったＦクラスのヤツらは、結果テストで示せ。って言ってある。
因みに。
反抗的だったヤツらは、「水分補給ならぬ水銀補給するから」と輸血

パックに並々入った銀色の液体に、顔を引きつらせていた。
みんな見てれば、結構傑作だったこと請け合い。
あ、さらに余談。
それを見た西村先生のでこぴんにて、沈められた。
でこぴん。って、文字や音の響き、動作とかによって可愛く見聞こえするけど、余りの痛みに呼吸ができなかったんだから。
ふぅっ……。
最後、翔子が坂本に大事な話があるって出て行った。
何を勘違いしたのか、島田は明久を誘ってデートに行くと言い（本人は、否定している）、それに便乗する形で、温和しそうな姫路までもが声をかけたけどやんわり断られている。
しつこく食い下がるレッドクリフ、じゃなかった。島田に今度ははっきりバッサリ断られ空気が一気に重さを増した。
苦笑している明久に、戻って来た翔子が手じゃなく腕を取って会話し出した。もたれかかるように、時折上目遣いで明久の瞳を覗き込む。
「ん？」と明久が聞けば「……ん」とそれだけ返す。余計な言葉なんて要らず、強い繋がりが見て取れた。
姫路は、「そうですか……」と笑みを浮かべていた。
何だか触れてしまえば壊れるんじゃないかと思わされるのは、姫路が必死に泣くまいと堪えているからでしょうね。
「……カッコいいわね……姫路」
そして明久は翔子のやることに対して嫌がる素振りを欠片も見せずに、自然な仕草で翔子の頭を撫でやる。
そう言えば誰かが言ってたわね。恋愛は戦争たたかいだ。……って。
そう……。
「――――敗者に言えることは無いのよ……」
眩しいものから目を少し反らしていた今の表情かおは、上手く笑えて……ぁ。
何だか、

……痛い。ああ、うん…。痛いわね……。
あーぁ。
……あーぁ……。
ほんとっ、もう……、
「……バカ」
寂し気な音が空に消えた。

第三一問　語れ！涙！

今は使われていない空き教室から声が聞こえてきた。
「話って、何だ」
一方は、坂本くん？　もう一人はぁ……
「……雄二。薄々気づいているはず」
そーっと……。教室を覗いて見たら、霧島さんが坂本くんの目の奥を覗き込むようにまっすぐ見据えて話していた。
「逃げないで……！」
！　びっくりしたぁ。
静かで、けれども力強い。凛とした声。
……違う。心の奥底を覗き込むんだ、きっと。だから見ていられなかった。
「……雄二……。聞いて。
……私は、大丈夫」
「っ!?　……何言ってんだ？」
離れていても解った。坂本くんが動揺してるんだって。肩が少し動いて強張った感じがした。近くにいればもっ!?　ヤバいっ！　霧島さんと目が合っちゃったぁっ！　これはさっさと……ん？
霧島さんが何か……『あ　っえ』？　――あ。〝待って〟だね！
でもぉどーして……。
むっ、今度は『おえあい』。……うん。これはすぐ解ったよぉ。
〝お願い〟。
どーしてかは、解らないけどぉ……。アレだけ真剣な目をしてるんだから大切なことだよねぇ。うん。
「……雄二、私はあの時の事をちっとも恨んだりしていない。……だから、いつまでも過去に囚われないで」
「俺、は……、別に……」
「雄二。雄二は、あの頃のまま時が止まっていない？」
「うっ！」と坂本くんが言葉を詰まらせた。

図星……なんだろうねー……。
「……あの頃。私が憧れていた雄二じゃなくて、――その後の〝失敗〟に傷ついた。……友達を……私を傷つけた。そう思ったままズルズルとここまで来た」
「……」
「……あの頃は、どうか知らない。けど、今は私の事……友達だって言える？」
「ったりめぇだ!!」
うん。よいね。友達思いのぉアチィ、よい男子おのこだ。
「……それ以外……それ以上の気持ちは――無かった？」
うぉっ!?　とぉ！　そーなのか、そー来るのかぁ。
「でも、何かを考えたり答えたりする前に言っておく。……私は、明久が好き」
霧島さんの綺麗な瞳に映り込んだ、坂本くんの唇をキュッと結んだ顔が見えた。
あー……、うん。
奥歯を強く噛んで、音を漏らさないよう口を閉じているその姿は、そうしていないと決壊するかもしれない自身の感情を押し殺しているのかもしんない。
なんて言っちゃうか解んない、坂本くん自身でさえ戸惑う感情があった。
そしてそれを理解しよーとしていなかった。……かなぁ？　霧島さんは、それを突き付けて理解させようと……、うぅん。きっと、その先の――
「あ　の……だな、翔子」
「雄二」
ビクッ！　坂本くんは強く反応する。
「この結果きもちは、覆らない。
でもね……」
「言うなっ!!!」って、坂本くんから心の叫びが聞こえてくるようだった。

「……私達は、友達。大切な、友達。
……もちろん、この先どうなるのかなんて解らない」
『誰と』とは言わないんだねぇ。
「……けれど、きちんと言っておこうと思った。いつまでも留まっているアナタに。前に進んでもらえるように――――」
坂本くんの目をまっすぐ見て、霧島さんは視線と同じく言葉を告げた。
「――――雄二。大好きだった。……ありがとう」
「……おう。……そうか……」
〝だった〟かぁ～。スゴいね、霧島さんは。
「……俺もだ。……好きだったよ、翔子」
坂本くんもスゴいなぁ。本当に。本っ当、に……っ、はっ…ぁ、うぅー……、もうっ、もうっ！　あーもう、止まらないよぉ！
「……ありがと、雄二」
頭を下げた霧島さんが教室を出て、態々こちらに回って来た。
「……お願いします」
霧島さんが深々と御辞儀をするので、慌てて声をかけた。
「顔上げて、霧島さん。それに畏まらなくてもいーよ」
「……解った。お願い」
それでも、また軽く頭を下げた。しかし、真剣に。
それを軽く受け取って、ほんのり赤身がかった目を曝しつつも柔和な笑みを浮かべて返したんだぁ。
「おっけぇ♪　んじゃ、いってくるよ」
「あの」
「うん？」
「翔子。って呼んで」
「いきなり何を……？」なんて思っていたら、
「……関係無いのに、泣いてくれたみたいだから……友達として託したい」
「託しされた。だからさぁ……、翔子。
自分のせいだなんて思っちゃダぁメ」

「あうっ……」
ちょこっと、小突いてやった。んだけど、可愛いなぁ全く。
ってな感じで可愛さに頬が緩んだところへ、坂本くんとご対面さぁ。
なのに、
「……」
「……」
「……」
「……」
あー、気まずいよぉ。かなり重い沈黙してぇ……。はぁ……。
どう切り出そうか迷っていると、坂本くんの方から声をかけてきた。
「……見てたのか」
それでも目線は合わしてくれないんだけどさぁ。
「……うん。まぁ……ね。最後の方ちょろっと聞こえた感じ」
誤魔化すように頬を少し掻いた。こんな不器用だったぁ？　なんて思ってしまうほど私は戸惑っていた。
「……」
また黙ってしまった坂本くんとの間にできた空気に堪えきれず、
「あのさぁ、」
声をかけたけど、
「放っておいてくれるか……頼む」
冷たく、……違う。切実なんだ。苦しいんだ。悲しいんだ。どうしていいか解らないんだ。
うん、だったら……
だったら、放っておけないなぁ。
「たははっ。ムリ言っちゃぁダ～メ」
後ろからそっ…と抱きしめてあげる。
「だから！　おまえはっ！」
ただ、ぎゅうっって。

「男の子だってえ、泣いていいんだよぉ？」
ビクッ！　って〝また〟なった。
ああ、そっか。坂本くんは、臆病なんだ。傷つくのも傷つけるのも……コワイんだ……。
大丈夫なのに。うぅん。大丈夫だよ。
「……私は見ないし見えないし誰も見てない」
かなり手加減して振り払おうとするけれど、私はそれを許さない。でないと、また溜め込んで坂本くんが傷ついちゃう。
「ね？　大丈夫だからさ。吐き出しちゃえ☆」
……ぽたっ。
前へ回した手の上に温かい水気が感じられた。
……ぽたぽたっ。
決壊した……。一度零れてしまえば、そこからどんどんと溢れてくる。
「……うぅっ……、ぉ、れっ、今さら！　今、さらっ……こんなにも好きだったんだって気づいた」
「そっかぁ……」
「ぐちゃぐちゃに、何も考えられないくらいいっぱいの気持ちでっ、っはぁっ……うっく……」
「うん……」
片手を背中に持ってきてゆっくりと擦る。
嗚咽が収まるまで、ただ傍にいた。

「あ〝ー、……悪ぃな」
「おっ、スッキリした顔だわ」
「おかげさまでな」
「……えらく素直じゃない？」
「あれだけのもん見られたら、どうって事ねーよ」
それだけの笑顔で言えるんなら、本心でしょーねぇ。うん、もう大丈ぉー
「おーいっ!?　何すんのぉ！　わしゃわしゃしないでってえ！　ちゃ

んとセットしてるのにいっ!!」
「もう放課後だろうが」
「そぉんなの、関係無いからね？　いつだってぇ、可愛くいたいんだからぁ」
「……とにかく、帰るか」
　坂本くんは、すたすたと教室を出て行く。もうっ。
「はぁいはい。歩幅違うんだからガンガンわぶっ?!」
　ひたたっ。急に立ち止まった坂本くんにぶつかった。鼻赤くなってないかなぁ？
　顔を上げてみると、首を少しこっちに向けてぶっきらぼうな声で言った。
「……サンキューな」
　夕陽に染まる校舎以上に赤く見えたのは、夕陽のせいだけじゃないよね。
　くすっ。
「惚れんなよぉ？」
「ふっ……、バァカ。
　でも、まぁ……いい女だわ」
　っ!?　くそぉっ。さすがに照れるってぇ。
「今さら気づいたんだぁ？」
「違ぇよ。今、気づけたんだよ」
　ん？　どーゆーことぉ？　疑問符を浮かべていたのが表情に出ていたんだな。ちょっと笑い止めてってぇ。
「なぁ、」
「何ぃ？　どったの？」
「雄二だ。改めてよろしくな」
　手を取って返した。
「うん、真由美だよ。よろしくねぃ？　ゆーじくん♪」
（「救ってもらった存在を手放したくないって思うのはいけないことか……？　なぁ、翔子……」）
「うん？」

「いや。……本当に――――」
続く言葉は、聞こえなかった。
ただ、笑顔でいてくれて「ほっ」とした。
『いい女だわ』
そう言ってくれた気がして、「でしょ？」ってこっそり胸張ってみた。

幕間　幸せだったり、楽しかったり、バカやったり

第三二問　キミとキスとアマガミと……

ハイハイ。なんか春休みも黄金休みも勉強漬けの毎日な私だったワケなん、です、が。

まぁ、和寛さんと一緒にいれるっていうのは悪くないかなぁ～、なんて。

勉強を頑張ったご褒美という名のデートもご満悦だったワケですよ。

あ、うん。なんか、ぶっちゃけ付き合ってるんだけどね♪

「りっちゃん、どーした？」

「うぅん。なーんでも」

「そ？　ならいいけど」

ぽわぽわ～。っていうか、ほんわかっていうか……、うん……なんか、あったかい人。

仲野なかの　和寛かずひろ。私が中学の頃からの家庭教師で、二三歳。今年の秋で二四になる大学生。あ、でも…付き合い始めたのは、ここ一～二年。なんか、こんな人でもちゃんと大人なんだなぁ～って何回も思わされた。

「あ。今失礼な事考えたでしょ？」

存外、勘がよかったりするのよ。

上目遣いで聞いてみる。

「怒った？」

「ははっ。オレの事考えてくれて嬉しいよ」

「私も。一緒にいれて嬉しい」

この人は、ストレートにモノを言うから反応に困ることもある。

そして、意外にも〝オレ〟っていう。ボクとかの方が似合いそうだけどね。

聞いてみたら……、「男だし、オレっていうもんじゃない？」って。

ボクもあるよね？　って聞いたら、「〝オレ〟の方がカッコいいじゃん」って笑ってた。
　こっちも笑顔になれた。
　なんか、「どっちがいい？」って聞かれたから、「どっちでもいい。和寛さんがいい」って言うとさっきより笑顔いっぱいって感じで「そっか」って言われた。
　ただ……
　重ねる程度の、普通に繋いでいただけの手は、
「ん……」
　しっかりと、指と指が絡み合う恋人繋ぎってヤツになって、チュッ、ズズッ。とキスしてた。うん、少し舌を吸われた。ホントのホントに恥ずい。
「ごちそうさま」
「…もうっ……」
　人前での恥ずかしさがあって、こっちなんか顔が熱いっていうのにっ……、はぁ……。
「適わないなぁ……」なんて思い知らされる。
　しかもこの人、大手からお誘いが来てるって。三菱だよ？　三菱。なんか、頭のできも違うんだろうね。自慢？　惚気？　まぁね。否定しないよ？　全然自慢だもん。私の彼なんだよ。って☆

☆

「和寛さん、わざわざ送ってもらってありがとう」
「いいよ。オレは、りっちゃんと少しでも長く一緒にいたかったってだけだから」
「ふふっ♪　私も。っん……」
　ばいばいのチュウ？　それとも、おやすみのチュウ？　かな。
「ぷはーっ……。ははっ。長かったね、今日は」
　しかも、かなり激しかったなー。舌も唇も甘噛みされた。照れる。
「まぁ、お別れのチュウでりっちゃん分をいっぱい補充したかったか

らね……」
「そんな寂しそうな顔しないで。ね？　私も寂しくなる」
「……うん。じゃあ、ばいばい。律子」
「うん。またね、和寛さん」
和寛さんは、振り返ることなく去って行った。
「……和寛さん……？」
いつもと、何か違う気がした。それが気になって、和寛さんが見えなくなっても暫く見続けていた。
ママから呼ばれるまで。
……ずっと、……ずっと……。
それは、学園祭の前の日の出来事でした……。

第三三問　サブ　↓　ルート　↓　エロイベント
↓　マスタールート……？

Ａクラス戦が終結してからの週末。約束通りにカヲルさんの手伝いに来ている。
キーボードを打ちながらパソコンの画面を睨む。時折、眼球をマッサージして目薬をさす。
カタカタカタカタ……。
何時間経ったろうか……。時間感覚が狂ってしまう。部屋の中、ただずっとこうして、規則的に聞こえる音だけが響いてた。
「カヲルさん」
返事が無かったのでそちらへ向いてみると、醜い姿を曝していた。
「そんな……。まさか、死んで「生きてるよ！」――――あら？」
「しかも醜い姿ってなんだい！　わざわざ口に出すことかいっ！」
「ミステリーちっくな感じでいいんじゃない？　特に〝醜い姿〟とか」
「ホラーじゃないんだよ！」
「自覚あり。ただの屍のようだ……」
「どういう事だい!?　って、そんな事はどうだっていいんだよ。それで、何々だい？」
今やっている作業を中断し、別ウィンドウを開いてピックアップした情報群を表示させる。
「――――亜音速の風をぶつける，金剛石も豆腐も同じように形を崩す事なく貫く刺突，触れただけで吹き飛ばす……これら全て腕輪の力。十分以上異常な、これらの力を上回る腕輪能力もありますよね？」
返答を待たずして会話を進める。
まずは、
「佐藤美穂の『守護オーロラ』。
纏う光は、熱も光も冷気もウィルスでさえ通さない。最強の守り。

おそらくは、核も水爆も効かない。
まさに英雄イージスの盾。アイギスやアイアスの方が伝わるのかしら？　アテナの盾の方かもね。
あ、次に霧島翔子の『死角強誘タイラント』。文字は『視覚共有』って言葉より凶悪に思える。特に対象の指定と効果範囲ってのが頭おかしいわ」
どこまでの範囲かは解らないみたいだけど、信じられないことに成長するみたい。しかも、効果範囲内であれば召喚フィールド〝外〟にいる者も対象者となる上に、人数制限も無い。
同じ様な広範囲の異常能力として上がるのが、菊入真由美の『混乱世界カオティックフィールド』。あべこべの世界を生み出す。その空間に一歩踏み出せば、そこは別世界。そう…、別世界を生み出すのだ。
そして、吉井明久の『儚却止考アノニマス』。これは『忘却思考ぼうきゃくしこう』かしら？　僅か数秒間とはいえ、ど忘れを起こす。一瞬じゃない。数秒間も、だ。こんなもの、どれだけ脳に影響があるか解ったもんじゃない。
極めつけが、阿部理科の『化学科学マーチャント・オブ・デス』化学や科学の実在しない兵器も具現可能。言ってみれば全部の兵器が使用可能ってワケ。名前通りよね。Ｍｅｒｃｈａｎｔ　Ｏｆ　Ｄｅａｔｈ……死の商人、だもの。
もうちょっと消費点数とかの調整や展開スピードなど色々しなきゃいけないところはまだまだある為、一番の試作品と言ってもいい。
「全く、冗談じゃないわよ。なんてモノ作ってんのよこの老怪わ……」
「まぁ、できてしまったんだよ」
だからと言って面倒事を押し付けるのは、勘弁願うわ。手伝わされるこっちの身にもなってみなさいっていうの、……ほんとに。
「子供じゃぁないんだから、しっかりしてくれない？　あなたには何度となく言ったと思うんだけど？　カヲルさん」
「ハッハッ！　まぁ、いいさね」
「良かぁないわよ。だから言ってんでしょーが。

そうそう。予想以上に面倒なんだから、報酬は弾んでもらうわよ？」
「ちょっ！　約束と違うじゃないかい！」
「だぁれのおかげで、」
人差し指を眼前に突き出す。
「幾つもの製薬会社がスポンサーについてくれていると思っているワケ？　……切るわよ？」
「くっ……！」とか言って渋々下がった。反省するって事を知らないの……でしょうね……。
ふぅ……。そろそろ明久達のとこ行って召喚獣を使って見ないとねー。あっ、と。その前に、
「召喚システムを見てみたけど、理解できなかった事があるのよ」
「何だい」
「姫路瑞樹の人となりは知ってますよね？　その姫路が〝好戦的〟な性格になってたんですよ」
「あの姫路がねぇ……」
呟いて、カヲルさんは真剣な顔を見せた。
「特に顕著だったのがＡクラス戦の時です。闘士が剥き出しな姫路のあまりの変わりように、おぞましく思ったくらいですよ」
「そこまでかい。もっと調整が必要だね」
「最悪、学園の閉鎖を考えないといけませんよ？」
「解ってるよ」
「研究者としての気持ちも理解できるつもりですけどね」
ちょうど良いタイミングでドアがノックされる。
「失礼します。――理科、終わったよ」
明久の報告を受けて、無色の腕輪をつけて立ち上がる。
一年生の時から使っている、教師無しに召喚ができる腕輪……『白黒しっこくの腕輪』。
物理学的には色の無いのは、『白』と『黒』だが、一般的には黒は切り捨てられ、『白』と『（無色の）透明』をあわせて無色と呼ぶ。
例えば、水は『無色の液体』であるが、多量の液体として存在する

場合、透明に見える。他方、霧のように細粒状に散在するとき、光を乱反射して透明ではなくなるが、色はないために白く見える。つまりは、どちらにも染まる無色。だから『白黒の腕輪』。
　阿部理科だけが使える。ま、他にも幾つか能力があったりもするんだけどね。
「律子達は？」
「翔子ちゃん達とアリス世界を堪能してるみたい」
「多様はあまりしてほしくないけどね。……じゃ、行ってくるわ」
「うん。いってらっしゃい」

☆

　召喚獣の数が結構いる。今日の元々の予定人数よりも多い。
　さらに言うなれば、スゴく面倒な混沌とした事になってしまったらしい。つーかなったわ。
　『白黒の腕輪』を使ってなぜか学校に来ていた者達と一緒に召喚した。いや、そこまでは良かったんだけど……召喚獣が操作できず、しかも勝手に動き始めた。勝手に腕輪をいじくったわね？
「ちっ！……」
「なんかダメだって理科」
「いいのよ、律子。学園長に罪を贖ってもらうから」
「阿部、男前過ぎだろ……」
「須～川っ、弁当いらないわね。うん、解った」
「すみませんでしたぁっ!!!」
　奇跡のジャンピング土下座をかました。そこまでするのならば、許そうかしら。約束を反古にするのも好きじゃないし。
「まぁまぁ……、落ち着きなってぇ～。ゆーじくんもぉやられてあげな？」
「何でだよ！　しかもやられるって何だ?!　俺も被害者だっつーの。っておい、真由美、聞いてねぇだろ？」
「……おまえも落ち着け。勝手に動くらい大したことないだろう」

「あれ？　康太くんがまともだ。どうしたの？」
「……どうもしない。いつもこう」
ちらっ。と工藤がスカートめくった。透かさずカメラに納める土屋。
「確かに。いつも通りじゃな」
「……〈ブンブンブンブン！〉……違う、偶々」
「たまたま～？」
ニヤニヤと言ってのける工藤。
アクセントが違う。字で書くとこうね……『玉々』。
「……！〈ブシャアァァッ！〉」
「それでこそ、ムッツリーニだね」
「……明久明久」
「何？　翔子ちゃん」
翔子がブレザーのボタンを外して、両手でぽにゅん。と下から胸を持ち上げた。
「……たまたま」
「「「ぐはっ!!〈ブシャアァァッ！〉」」」
木下と久保以外の男共がダウン。その二人も顔を真っ赤にして、明後日の方を向いていた。
負けないから。
「おしりの形は、いいと思うんだけどね」
少しむちっとしたおしりを突き出すと、スカートが少しズレて黒の下着が見えた。
「あら？」
「「「「ごはっ!!〈ブシャアァァッ！〉」」」」
男全滅。
「私？　下着での魅力アップしてるよ？　今日のは、えっと……」
律子がスカートのホックを外して後ろを見ながらずらした。半分……見えた。
「なんかローライズだった」
男子が倒れた。みんなガン見し過ぎ。

「私は、内緒ぉ」
ちょうど坂本が目線を上げた先にそれがあった。
真由美も気づいてスカートを押さえたが、坂本と視線が合った。
「あはは……。ゆーじくん、……見た？」
「……Ｔっ?!〈ブシャアァァッ！〉」
「「「「Ｔっ!?!?〈ブシャアァァッ！〉」」」」
ｏｈ…。坂本が一番に離脱。
「あ、阿部さん！　岩下さん！　菊入さん！　え、えええっちなのは、いけないと思いますっ」
そう言う姫路のブレザーについた胸元のボタンが弾け飛んだ。
「きゃぁっ?!」
「いいな姫路さん。でもボク、形はいいんだよ？　ほら。あっん☆
……ブラしてないんだった」
工藤が胸を寄せた瞬間に反応してた。
何人か痙攣してるわ。
「そ、そうよ！　ウチだっておしりは負けないわ！」
『そ、そうよ！　ウチだっておしりは負けないわ！』
「美波ちゃんっ!?」
島田のは、ぷりんっ。って感じ。召喚獣も一緒におしりを突き出す。
男共がさらに血でアーチを描く。
……ん？　島田の声が二重に聞こえなかった？
『……ん？　島田の声が二重に聞こえなかった？』
あら？
『あら？　もしかして……』
「「召喚獣がしゃべったぁっ!?」」
『『召喚獣がしゃべったぁっ!?』』
女性陣だけ声を上げた。
いや、ホントに余計な事するの止めてほしいわね、あの翁。
『いや、ホントに余計な事するの止めてほしいわね、あの翁』
男共は血の海に沈んでぴくりともしない。

第三四問　オデコさんと本音を曝け出した仲間達

彼岸へと旅立った男共は放って、じっくりと召喚獣の観察をしてみる。
武器は無く、文月学園の制服を着ていた。召喚者をそのまま小さくして獣耳と尻尾を生やした姿。
むぅーっ……。
『むぅ～っ……』
考えていることが声になるようだ。
『あの理科可愛いっ！　なんか持って帰ろ』
『でも、お化けじゃなくて良かったぁ……。ウチ本当に嫌なのに～。危うく前の時みたいに、また眠れなくなって、お姉ちゃんなのに妹の葉月と一緒に寝なきゃいけなくなるところだったわ……』
うん、何だか島田の妹さんはスゴくしっかりしてそうね。律子は、お持ち帰りしようとしてる自身の召喚獣を押さえ込んでいた。
『あははっ。あ、男の子達起きたっ！　ボク退屈だったんだよ？』
これは自動行動っていうよりは、児童行動って感じ。本音をしゃべってはいるものの、多少の自我もあるみたいだ……。何を考えてこんな事したのやら……。
「美波ちゃんは、お化けが怖くて妹さんと寝てるんですか？」
『私も妹欲しかったです！』
本音の自分と会話してるわよ、姫路。
「……危うく死んでしまうところだった」
『……天国だった。……この視点の低さなら、Ｔもローライズも容易に……！』
「相変わらずじゃな」
『天国だったと言うのには同意するが……。Ｔが見られなかったのが残念でならん』
木下……。平然とした面の下ではそんな事を。まさしく下心。
「な、何を言っておる！」

『じゃが……、ワシが近所の男子中学生に告白されたと皆が知ってしまえば、ワシはさらに女扱いされてしまう。男だと解ってもらう為にいっその事、菊入のを覗「そぉいっ!!　タッチダウン!!!」…っかはっ!』

首が曲がってはいけない方向に曲がってるんだけど……。

にしても、坂本。木下睨み気味じゃない？

『俺だってはっきり見えなかったってのに。……だが秀吉の意見はもっともだ』

「何言ってやがるてめぇ!?」

『いや、寧ろここで童心に帰ってのスカートめくりをするべきだな！

Tやローライズを味わえる』

『『まさに一石二鳥っ！』』

坂本と木下の心が一つになった。

「左中間へと飛んでけ！」

「海老反りでタッチダウンじゃ！」

「それ、ただのバックドロップ！」

明久は、基本的に思っている事を口にするものね。明久にはあまり意味の無いものだ。

「あっははっ！　秀吉くん面白いっ。あ。ボクのでよかったら見る？」

『喜んで！』

「させんわ！」

米噛みにエルボータックル……。えぐいわ、木下。

「木下君も男の子だって事だね」

『キミ達は、島田さんのぷりんっとしたおしりの素晴らしさが解っていない！』

「……」

久保ぇ……。眼鏡押し上げたまま固まってるし。自分の趣向がもろバレ。

『まずは形だ。大き過ぎず小さ過ぎずバランスの取れた大きさであり、少し突き出たお尻にはエロスすら感じる。

しかも、普段奔放な島田さんだから出せる健康美を伴った色香！
スポーツ万能な彼女だからこそ出せる引き締まったおしりっ。脂肪と筋肉の割合の完璧さと、それだから出せる張りのあるおしり。まさに、お尻の中のお尻！　触り心地などは解らないがきっと素晴らしいに違いない。あと見たいのが、小麦色に焼けた肌と水着下の白いヒップのグラデーションがもたらす健康的なエロス。ぜひとも、堪能したいものだ』
「……」
久保。引きつってる。頬、スゴい引きつってるから。
『……褒められたのかな……？』
そう来るの？　変化球もいいところだわ。
『かわいいっ！　よぅし！　いただきま〈ごすっ！〉』
「さすがの僕でもそれ以上は殴る」
蹴ってた蹴ってた。
『お持ち帰りぃっ〈がすっ！〉』
確かに可愛かったが、浮き足立ち過ぎる気が……。
「ちょうどサッカーをしたいと思っていたんだ。次でハットトリックさ」
爽やかなバカがいる。
「そう言えば明久、結局何しに来たの？」
「ああ。調整中に異変を察知して老女に問い質したら、〝てへっ☆〟とか言いやがったから思わずさ。問答〈ぽんっ〉無用で脳天に踵落としをしてしまったんだけど、こうやってたくさんの被害者が出てる上に、僕は心に傷を負って辛かった。所謂、これも正当防衛の一つだよ。で、みんなの事が心配になって見にきたってワケさ。だから、」
「『僕は悪くない』」
途中で、明久の召喚獣が呼び出されてる。心の底から思っているワケね。
ていうか、偉く大変な事になってるわね。
『俺的には、むちっとした阿部の』
バッ！　と声の主を探したが、見つからなかった。ま、いいや。

『ねぇー、ウチのおしりがんむーっ』
「ちょっとアンタ！」
『もちろんさ！　何と言ってもその』
「おいっ！」
　久保も島田も召喚獣を羽交い締めにする。
「……」
「……」
「あはは……」
　暫くの沈黙の後に二人揃って渇いた笑いを漏らした。
「へぇ～。本音を喋る召喚獣みたいだね」
『面白そうだねっ』
「「全然面白くないっ！」」
「じゃあ、ホントに本音を喋るのか、確かめてみようかな～」
「「……っ〈ササッ〉」」
　ターゲットにされまいと、皆が目を伏せる。
「あのさ、男の子達に質問」
　工藤が声をかけつつ、なぜか自分のスカートの裾を摘んだ。
「スパッツだからつまらないかもしれないけど――――」
　相手が考える為の間を取る工藤。
「ボクのスカート……めくってみる？」
　そう言って、工藤はぴらぴらとスカートの裾を上げ下げした。
「何を言ってるのさ工藤さん。僕はそんな『めくらせてください。……お触りはありますか？』いやらしい人間じゃないよ」
「そうだぞ工藤。俺達をからかっても『待て明久。俺が先だ。お触り……っ触りてぇぇっ！』無駄だからな」
「……何を考えているのか知らないが、俺『……触っていいのか!?　ついでに破ってみたい』は全く興味無い」
「おいおい、ムッツリーニ。欲望がだだ漏れじゃねぇか。工藤がからかってる『ちょっと待てちょっと待て！　〝揉む〟ってのは、〝触る〟の範囲か？』だけに決まってるだろ」
「須川よ。お主も大概じゃ『ワシもじゃ！　めくってみたいのじゃ！

触ってみたいのじゃ！　揉んでみたいのじゃ！』な。余計な期待が窺えるぞい」
「全く。工藤さんは相変わらずだね。あまり男子を『ここは、経験の無い者に味わせてあげるべきだと思う。だから、まずは僕が体験するよ』惑わせる言葉は控えた方がいい」
「「「「……」」」」
「……明久。私は準備万端」
翔子の口撃！
『イィィヤッホーゥ！』
「グランドスラムだ！」
反射神経抜群ね、明久。坂本のを引き継いでの満塁か。
『吉井君！　キミだけズルいぞ！』
「ハットトリック達成ぃっ！」
『久保ってばムッツリね』
得点王さん。もう、いい加減諦めたら？
でも
「結局は、みんなスケベって事よ。男の子も女の子もね」
『『女の子も!?!?』』
「「ぶっ飛べ！　銀河の果てまでぇっ!!」」
男共は仲良いわね。
『みんな仲良いなぁ～。私も早く帰って和寛さんに会いたい』
「ちょっ?!　ダメだって！」
女子陣、興味津々。全く……。隠し事とか止めてよ？
「そんな面白そうな話黙ってるとか無しだから」
『そんな面白そうな話黙ってるとか無しだから』
阿部理科、心から思ってます。だから暴露しちゃいな。
「なんかヤダっ、無し」
『えっとね……、和寛さんはね……』
本音としては、自慢したい気持ちもあるようです。
「なんかいっぱい可愛がってあげる」
『やーっ。可愛がり、やーっ』

可愛がりって相撲界での虐め的なアレの事か……？　まぁ律子、落ち着きなさいな。
「みんな参考にしたいだけだから、ね？　ボクも含めてさ」
「だったら……、少し…だけ」
「「よし」」
工藤、上手い具合に持っていったわね。
「えっとね……」

☆

ほうほう……。確かに自慢になるわね。大手企業に目をつけられて甘えさせてくれる優しい大人。
ダメなところも挙げてたけど、惚気にしか聞こえなかったしね。
例えば……「和寛さんに、なんか頼ったりしちゃう事が結構あったりするんだけどね、ちょっと抜けてる時とかあったりして、なんか可愛いんだ」――惚気じゃない。抜けてるって言うのがマイナスだと言いたいんだろうけど、ネガティブキャンペーンどころか、どう聞いたって惚気にしか聞こえない。彼氏がいない人間からすれば余計に。
あ。女子だけじゃなく、男子の方も盛り上がってたみたいねぇ。
とりあえず、今回のカヲルさんが起こした事については、大目に見てあげましょうか。
心の底からの本音を曝け出して、腹を割って話したおかげで必要以上に打ち解ける事ができたんだから。
ま、それなりには楽しめた週末だったかしらね。

特別問題　①―1　ｇｈｏｓｔｓｃｒｉｐｔ．――

姉原美鎖（あねはらみさ）＋ゲイリー・ホアン＆トウエニー

何だか今日は、嫌な予感でいっぱいでした。なんせ、一日の始まりが――

「おい、起きろ」

「ん……？　マスター？」

「マスターサポートナビゲータマリーナって名前のクセして、主人より起きるのが遅いとは、躾が必要か？」

……むぅ～……？　ロボットの私は、起動までまだ時間が。人間で言うなれば寝ぼけている状態？　低血圧は違いますね。血ありませんし……。

「ほら、これを押して目を覚ませ」

「？」

首を傾げながらもマスターが差し出してきた赤いボタンを疑いも無く押した。

ぽちっ。というちょっと間抜けな音がしたかと思っていたら、その時には既にマスターの姿は見えずに口から音が漏れた。

『……3』え？　勝手に口『……2』が！　マスタァァ『……1』ッ！　何ですかこのカウントダウンは『……0』」

どぅぅぅぅんっ!!!

……。ああ。ほら、これだ。生まれは選べないって言いますもんね……。……いた。

「マスターっ！　何でこんな起こし方するんですか!!」

「言わなきゃ解らないのか？」

「解りませんよ！」

「面白そうだからに決まっているだろう」

「ううっ……。酷いですよマスター……」

少し涙声なんじゃないでしょうか。
「それより、勝手にＰＣを起動するな。そこのスペアに移れ」
「私に愛をください～」
「愛？　何それ、美味しいの？」
はぁ……。解ってましたけどね。期待なんて犬にでも食べさせてあげますよ。
「ん？　……っ！」
「どうした、いったい」
「いえ、さっきの部屋から何か……熱量？」
「熱量？　何だ、それは」
え？　え？　どういう事？　それだけじゃないですね。変な力場が……場所は……、近…く？　違う！　近づいて!?
「マスター！　逃げてくださいっ!!」
「っ！　――――」
――マスターも私も世界も。…染まりました。

☆

雨音に紛れて何か大きな音が聞こえた気がしたので、地下の研究室に来た。
「……。気のせいね」
またどこぞの誰それが、侵入したのかと思ったわ。
「――だ？　……よ」
声？　誰かいるの？　……あっちは、仮眠室ね。明久に一応連絡入れて……はぁ……。今日に限って翔子が泊まり来てるし。
とりあえず、懐に了った拳銃を使わない事態である事を願いますか。
ん…、声が止んだ。気づかれた…？　攻撃されては適わないからね。
コンコン、コンコン。

妙な感じね。ノックをしている今の状況が。明久と翔子ですら、この仮眠室を使った回数が片手で事足りるんだから。
ドアを開けてまず見えたのが、中性的な顔立ちで髪は燃えたぎる赤。おそらくは、男。
そして部屋に入ってすぐ扉の影から飛び出してきて、手刀を首の頸動脈へ突き付けられた。ちらりと見やると、葵い長髪で透き通るような肌の女性が強く睨んでくる。
場違いにも、優しそうな女性だなと思った。
「はじめまして。とりあえず、人んちで盛らないでくれる？」
「……は？」
「違う！――」「違いますっ！――」
五月蝿いわね。せめて耳から離れなさいよ。
「――誰がこんな駄目ナビーと……」
「――誰がこんなバカマスターと……」
「仲良いわね。あなた達」
「何処がだ！（何処がです！）」
「ｎｉｃｅかっぽーは、何をしていたのよ」
「そういやぁ、さっき人んちだって言ったな……。オマエの家って事か」
「マスター！　流すんですか?!」
「えぇ。そうよ」
「あなたも無視っ!?　言い出した本人なのに」
視線が合わさった。長年の付き合いがあるかのように同調した。
「まず自己紹介するわ。
薬学者。薬師とも呼ばれている阿部理科よ」
「俺は海谷（うみや）　陸（りく）」
海谷ってのに促されて、女性が胸に手を当てて声を出す。
「そして私が」
「ボケロボだ」
「えぇっ!?　ちょっと待ってください！」
「なるほど……」

「なるほど!?」
「うちのバカが手荒な真似をしてしまって申し訳ない。このアホには言ってきかせる」
「抜けてるのね……、」
「…可哀想に」
「あんたら仲良いですねっ!?」
「言語障害がみられる。どうしたんだ、ストレスか？　いや…ウィルスか？」
「バカは風邪をひいた事にも気づかないって聞くわよ」
「泣きますよっ！」
　うるうるした瞳で上目遣いされる。
「そんな事言われたら、ゾクゾクするじゃないっ」
「ああ、全くだ。恥辱を収めたくなるな」
「ごめんなさい。もう、●ＲＥＣボタン押してしまっている事を、後れ馳せながら報告するわ」
　誰に気づかれる事なく、カメラを構えて録画が始まっていた。
「助かる」
「何処がっ!?!?
　もう……ヤダァっ」
　で。
「情報を統合した結果。あなた達が知っている世界と似通った世界……並行世界の可能性が高いわね」
「まさか、自分がそのような体験をする事になるとはな。全く。ぽんこつが」
「私のせいですか?!」
「海谷、それと……」
「マーナです！」
　そろそろもう可哀想になってきたわね。
　マーナの髪を撫で梳き、話かける。
「ごめんなさいね、マーナ。ちょっとからかい過ぎたわ」
「ぁ……、はいっ……」

借りてきた猫のように静かになった。どうしたのかしら？　……にしても綺麗な髪よね～。
「嫌だったかしら？　ごめんね」
「えっと……こういう事されるの、慣れてなくって。だから嫌じゃないですぅ」
くすり。と笑みを零してしまっていた。可愛いわね、ホント。
「そ。とにかく、あなた達を帰す為の装置を作らないとね。
でも、今日は遅いから明日以降かしら」

「と、言うワケで。集まってもらったんだけど……」
「りかぁ、何も聞いて無いんだけどぉ～」
何も言ってないものね。
「はいっ。……なんか不安何だけど」
何も言ってないものね。
挙手した律子を指し当てるとそんな言葉が返ってきた。
「「……〈じぃーーーっ……〉」」
無言の圧力ってやつね。
……さて、今回もお世話になります。岩下律子＆菊入真由美の二人っ。
「ほんと、申し訳ないと思ってるわ。心の中では土下座してるから」
「なんか実際は、腕組みして胸張ってるけどね⁉」
さすが律子ね。ツッコミがキレを増して来ている。
「りつこぉ、おちちついてぇ？」
「つかないよ！」
「ひっひっひー♪　……だよー」
「ひっひっふー。じゃあないのっ⁉　それだとなんか、ただの妖しい笑い声だから！」
真由美との連携も上々。というか、ラマーズ方も間違いよ？
「「……」」
そして無言の赤毛と青毛。
乗り遅れちゃったワケね。仕方ない……

パン、パン！　柏手を打つ。
二人の目を見ながら左右に揺れて。
「オーニ　さぁんー、こっち　ら～手ぇの　鳴ぁる方へ」
「バカにしてんだろ？」
「バカにしてますよね？」
「ホント、律子も真由美も酷いわ」
「ああ、うん。なんか私酷いらしいから、とりあえず先進もっか？」
矛先を変えてみたつもりが、スルッと流しちゃう律子の姐さん、ぱねぇ。
「なんか、理科がインフルエンザウィルスばりに迷惑かけたみたいで、ごめんね？」
「病原菌言うなし」
「理科、もうちょっと待っててねぇ～？」
「うん、ごめん。謝るから聞いて。紹介もしてないから」
「私は、岩下律子。こっちの相方が菊入真由美。今日は、なんかよろしく」
怒ってるっていうのが解った。
「俺は海谷陸」
「私は、サポートロボのマーナと言います。本日は私達の為に、ありがとうございますですぅ」
ぺこり。と綺麗なお辞儀を披露するマーナ。対して真由美は、
「いーですよぉ」と言ってマーナと握手を交わす。
「あー……。今回呼んだのは、実験素材の確保、収集」
「実験？　に、確集？」
うん、よかった。聞いてくれた。あれ以上は、さすがに泣くぞ。
「そ。Ｌｏｓ　Ａｌａｍｏｓ　Ｎａｔｉｏｎａｌ　Ｌａｂｏｒａｔｏｒｙ．通称ＬＡＮＬ。政府が所有し大学などが運営を行うＧＯＣＯ形式（Ｇｏｖｅｒｎｍｅｎｔ　Ｏｗｎｅｄ　Ｃｏｎｔｒａｃｔｏｒ　Ｏｐｅｒａｔｅｄ）の研究所で、エネルギー省の委託でカリフォルニア大学が６０年以上に亘り管理・運営を行ってきたロスアラモス国立研究所。

つまり、素材確集は――――アメリカで行うわ」
「えぇーっ?!」
ブラックホール研究は、並行世界移動に必要だからね。
「もしかしてぇ、その為に態々学園長に頼んでまでテスト受けさせられたぁ?」
「なんか……、既に帰りたいんですけど。和寛さんとの約束を断ってまで来たのに……。今日は、仏滅かなんか?」
「有名なトコへただで行けるのよ?」
「えっと……なんか聞きたく無いんだけど、何処?」
「初代所長はロバート・オッペンハイマー。ここで開発・製造された原爆が、広島に投下された原子爆弾『リトルボーイ』、および長崎に投下された『ファットマン』で、放射性物質の厳重な管理を怠ったり、機密情報を収めたディスクを紛失したりするなどの不祥事を続けざまに引き起こし、２００４年7月１6日に活動を一時停止した挙げ句、侵入者も増えたっていうね♪　そんな場所」
「〝ね♪〟じゃないわ！　何言ってんの!?　なんかバカなの?!」
「心配いらないわ。一応、薬学界でのトップだからコネを使うつもりだし」
「コネって何ですぅ?」
一家に一台欲しいわね、この娘。
「アメリカ国立衛生研究所（ＮＩＨ）、パスツール研究所、今は落ち込み気味だけど、ファイザー社とかね。
日本国内だけじゃなく、パスツールだけでも世界各国で、今現在三二の研究所に顔が利くから」
「やるなぁ、デコ助」
意外とマスター思いなマーナが、自慢するように話出す。
「でも、マスターの専門はプログラムとロボット製作だけに留まらず、さらに加えるなら薬学にも精通してますよぅ」
プログラムに関しては、専門外。カヲルさんの手伝いができる程度だしね。薬学に関しては、影すら踏ませてやらないけれど。
「はぁ……。厄介な事になったわね」

「「それに私達巻き込んだワケ?!」」
「……ええ」
項垂れる二人を見て申し訳なさでいっぱいになった。特に真由美が項垂れているのは珍しい気も……ダメージの蓄積か?
あ。律子の場合も慰めてくれる人がいたからなのかもしれないしね……今度、何かプレゼントしようかしら?

特別問題　①―２　すいみんスイミンすいみんスイミン睡眠不　足っ♪

――アメリカ合衆国ニューメキシコ州ロスアラモス。
ロッキー山脈の南端の美しい森林に囲まれた広大な敷地。
ヘリコプターで上空から、約一一〇平方キロメートルに二一〇〇棟もの施設が立ち並んでいるのが見える。ここには一万一三〇〇人の科学者・所員が勤務している。現在でも核兵器開発など合衆国の軍事・機密研究の中核となる研究所であるが、同時に生命科学、ナノテクノロジー、コンピュータ科学、情報通信、環境、レーザー、材料工学、加速器科学、高エネルギー物理、中性子科学、非拡散、安全保障など、様々な先端科学技術について広範な研究を行う総合研究所でもある。
年間予算は二二億ドル（日本円で二二〇〇億前後だと思えばいい）で、合衆国の頭脳が集まる名実ともに世界最高の研究機関であり、『合衆国の至宝』と称される。研究所は『Ｔｈｅ　ｗｏｒｌｄ’ｓ　ｇｒｅａｔｅｓｔ　ｓｃｉｅｎｃｅ　ｐｒｏｔｅｃｔｉｎｇ　Ａｍｅｒｉｃａ（アメリカを守る世界で最も偉大な科学）』を標榜する。
着いたみたいね…。緊張のせいか、通常の何倍にも建物が大きく見える。
首を軽く振って払い飛ばす。ふぅ……。
ここが、ロスアラモス国立研究所。
「緊張してるのか？」
横合いから声がかかった。
海谷だ。
「柄にも無くね」
軽く鼻で笑うの止めてくれる？
「理科さん、これ飲んで落ち着いてください。ハーブティーです」
海谷と違ってこの子は、気配りしてくれてる。まあ海谷は、……素

直じゃないのかしら？
「ありがと、マーナ」
紙コップに注がれた熱い紅茶をふーっ、と二～三度ほど息を吹きかけて一口飲んだ。
はぁ……。ハーブの香りも心地よく大分落ち着いた。
「……おいしっ」
「良かったです～」
満開の花が咲く。マーナから喜びを表す記号が目に見えるようだ。
「律子さん、真由美さんも如何ですか？」
「せっかくだし、いただきます」
「じゃ、私もぉ」
「デコ助、英語は話せるのか？」
海谷からの呼び名は、これで定着したようね。
「えぇ。他にもドイツ、フランス、ロシア、中国、韓国、朝鮮、アラビア語、ラテン英語……と、粗方何処ともビジネスするからね」
「なんか、そこまでいくと呆れ果てちゃうわ」
「りかりかぁ。私は話せないけど、そんなんで約に立てるのー？」
真由美に返事をする前に、というか、少し間を開けたその僅かな透きに別のところから声が入った。
「本日は遠路遥々、ようこそいらっしゃいました。歓迎致します」
声に振り返ると、見知った顔があった。
「お久しぶりですね、阿部博士」
「ありがと。けれど、その呼び方はいただけないわ。Ｍｓ．にしてちょうだい、櫻木華菜（さくらぎかな）博士」
姫路の髪色より薄い桃色で光りの反射によっては白くも見えるその髪の毛は、まさに桜色。ゆるりとかかったウェーブが、その人を柔らかく見せる。それは綺麗だし、羨ましく思うけどね……。まぁ――
―
「はいっ、解りまし」
「いつも通りでいいわ、華菜」
ちら、と連れてる人達に一瞥をくれたが、気にしなくていいと軽く

手を振る。
ならばと頷いて、華菜は話出した。
「賜った。助かる。私としては、此方の会話の仕方の方が良くてな」
――柔らかい、ふわふわした雰囲気と見た目なのに、話し方は堅い固い硬い。
それでも、話は弾んだ。改めて友達なんだと理解する。
「ふぁ～っ……」欠伸を途中で噛み殺す。
「此処が理科殿方が宿泊して頂く事になる仮眠室。先ずは、荷物を置いてから施設を案内して回ります」
話してる間に着いたみたい。久しぶりに会うと、思っていた以上に話し込んでしまうわね。
案内に従って移動しながら、カメラや部屋の場所、警備員の装備から動きまでつぶさに観察する。当然、怪しまれる様な動作は欠片も見せない。そして、マーナにもセンサー類の捜索をしてもらっている。表向きは、誰がどう見ても人だしね。
律子には、渡したイヤリングから発する超音波にて、返ってくる時間と角度等によって詳しいマッピングを行ってもらい、真由美には、ほぼ３６０度撮影のできるペンダント形カメラによる動画撮影。
そして、エレベーターで地下へ。
乗る前に指紋・掌紋認証に加えて、声紋認証までしてから乗り込んだ。
「これから、実験？」
「そうだな……」
腕時計を見てから華菜は答える。
「もうそろそろ始まる時刻だ」
「そ」
エレベーターを降りて見えたのが白い廊下。時折左右に伸びている廊下が、他の施設や部屋がまだあるという事を教えてくれている。
まっすぐ伸びた廊下の先に見える一際大きなドアが、どうやら目的地のようだ。

実験を見学した後、華菜と別れる前に言葉を投げ掛けられた。
「私に対して言伝は無いのか？」と。
明日でもう帰るんだし、何か色々話してもいいんだけど……それこそ、時間が無い。またの機会を設けようと思う。
「良かったのか？」
「いいのよ。あれでも、結構付き合い長いから。今度旅行にでも誘うわ」
「ま、どの道……決行は、二時間後だ。それまでにカメラの位置から巡回経路までを確実にしてルートを決めないとな」
「うわ……二時間って、なんかヤバくない？」
真っ先に反応を示したのは、律子。それを追う形の真由美も、焦燥が伺えた。
「こうしてるうちにもぉ時間経ってるからぁねぇ」
「そうね。二分無駄にしたわ。さっさと取り返しましょ」
「このカメラって、なんか携帯にも映像送れる？」
と思ったのに、律子は……
「貸してみろ。――――――っと。こんなものだな。……ほら」
「私もぉ」
真由美もか……。
ていうか海谷、随分と余裕綽々ね。誰の為にやっているか、忘れてないかしら。全く。
ま、頼りになるって事かしら。
「おい、その腕輪は……？」
「ああ、召喚用の腕輪よ。『観察処分者』としての特典をこの二人にも付けたからね」
「操作能力が凄いのか？」
「正しくは、操作能力〝も〟。よ」
興味を持った海谷に能力の説明をすると、ものスゴく呆れた顔を見せた。
「オマエらは、ここを制圧する気なのか？」
「私達ってぇ」

「なんか、マズい？」
「今さらよ。ここにいる時点で大事なのに」
何だか煤けて見える二人をマーナが宥め賺していた。
でも、
「頼りにしてるわ」
「なんか嬉しいけどさ……」
「うん。素直に喜び辛いよねぇ。答えられるよーにはぁ、がんばるけぇどねっ」
こういうことは、口にして伝えないとね。
「ありがと」

特別問題　①―3　バトルアスリート

なんか、もう…ね……。場違い過ぎるし、まだ意味解んないし、何より――怖い。
ああ、もうっ。安請け合いするんじゃなかった。割りに合わなさ過ぎっ！
「ふぅ…ふぅ……はっ…はぁっ……」
上手く呼吸ができない。
「大丈夫ですか？」
マーナちゃんに声をかけられた。本当にロボット何だろうか……。この子の優しさも性格もプログラムだとは思えない。
「すみません。私達の為に」
大丈夫だと返したけど、謝ってきたマーナちゃん。〝ハ〟の字の真ん中を人差し指で小突く。
「あ、いたっ。何するんですかぁ」
「謝んないでよ。友達――でしょ？」
「はいっ！　ありがとうございます！」
「しっ！　静かになさい」
「「はい……」」
二人揃ってしゅんとなったけど、それが何だか可笑しくって一緒になってくすりと笑った。
でもやっぱり、声はそんな大きくなかったけど、神経質過ぎるくらいで丁度いいんだろう。それに、ここは日本じゃなくアメリカ。一介の研究員でさえ拳銃を所持している。もっと広く言えば、中高生でも手に入るお国だからね……。
ブルッ。
うわっ。身震いした。なんか鳥肌も治まんないし。
「あ」
マーナちゃんと真由美が手を握ってくれた。
「何があっても、私が守ります」

「律子、私もついてるから」
「……うん」
やっぱ、恐怖は引っ込んでなかったな。幾ら召喚獣の強さを知っていても、怖いものは怖い。フィードバックによって返ってくる痛みで死なないとは言いきれない。そんな事試せないだろうし。
「ありがと。二人共」
「人じゃないんですけどねぇ」
お礼を言うと、くすぐったそうに身を捩った。その二人も私も置いて、理科が淡々とマーナちゃんに伝える。
「そんな些細な事いいから、センサーで中の確認よろしく」
「そのナビ使いの荒らさ……もう一人マスターが増えたみたいですぅ」
「いいからさっさと仕事しろ」
この場合、理不尽でも無いのかな……？　はは……、あ、まぁ。なんか放っておけなくて、マーナちゃんの手をぎゅっとした。
お。ヤル気を取り戻したみたい。現金だなー。ヒトの事なんか言えないけど。
「この部屋には誰もいません。カメラの類いは、突入と同時にダミー映像と差し替えますのでこのまま突入しましょう」
言ってすぐさま中へと入った。マーナちゃんの余りの鮮やかさに惚ほうけてしまい、ワンテンポ遅れた。
わわっ！　上げそうになった声を抑えながら慌てて部屋へと駆け込んだ。
「遅いぞ」
「ごめん」
あ、いや、こんな事になっている現状を未だ呑み込めてないのに。でも、うん、まぁ……協力はしたい。したいよ？　けどさ……むぅ～……。
「マーナを先頭に、通気孔を通ってエレベーターホールまで移動。そして――」
海谷くんが説明を始めた。ダメだな。もっと集中しないと。

マーナちゃんから順番にダクトに潜り込んでいく。殿は努めさせてもらおっか。
「掴まって、律子ぉ」
「はいは――――」
コツコツコツコツ……。
ヤバッ!? 足音が近づいて来てる。
「〈ぼそっ〉律子っ! 早く!」
「うん」
真由美の手を掴み損ねて落下した。あっ、しまった!
「あいたた……」
盛大に音が響いた。あーもうっ、……あれ? 足音が止んで、る? ……違う。これは……
「りっ!――――んむーっ」
ナイス。海谷頼むね? 携帯を取り出して耳に当てる。それと同時にドアが開いた。
「はいはい、りっちゃんでーす。うん、そう。で、どしたの?」
心臓バクバク! ドアの方に振り返る前に視線を上にやって、みんながいなくなっているのを確認しつつ自然な流れで入って来た人物を見た。
男性にしては長めのくすんだ金髪の外国人。何より目を引いたのは、ルビーのような深紅の眼。
思わず魅入って言葉が途切れた。
「あ、ああ、ごめんごめん。後でまたかけ直すから」
そそくさと携帯をポケットに仕舞い、緊張気味に英語で話した。
「そ、そーりー……。あー、あー……んー……っと」
身振り手振りで何とか伝えようとしていたら、
「日本語でOKデスよ。ワタシは櫻木博士とも親しく、ワタシ自身も各国の言葉で話せマスから」
あっさりと、日本語で返ってきた。なんか気を揉み過ぎたな。
「はぁ……。良かったです、なんか安心しました。
あの、お手洗いの場所を教えていただけますか?」

一刻も早く離れないとね。
「わかりマシタ。ここをまっすぐに、三つ目の通路を右に曲がって左側に見えてきマス」
「ありがとうございます」
今すぐにでも離れたくって、駆け足で移動した。妙な緊張感は、晴れなかった。
角を曲がる直前に声がかけられた。
「――Please give him my best regards. I'm looking forward to working with Mr Nakano.」
！　え？　今……。
急いで振り返る。
「もういない……か……」
先ほどまでいただろう深紅の色を探すが、その姿は無かった。
プリーズの一つ前にも何か言ってたんだけど……。イナバウワーって聞こえた。む～……。英語は解らん。とにかく、エレベーターホールまで急ごう。
――それにしても、最後見た笑顔が最初見た時と違って……なんか気味が悪かったな。
耳がピクピクと動いた。イヤリングから発する電気信号が知らせてくれる。
マーナちゃんから連絡だ。ほいほいーっと。
『律子さん、次の通路を急いで左へ抜けてください！』
「えっ!?」
疑問に思いつつも走り出す。
『二つ先の通路から人が来ますっ！』
「っ！　了解っ！　そのままエレベーターホールまでナビお願い！スピード落とさず、一気に駆け抜けるから！」
『はいです!!』
心強い返事どうも。ひっだりぃっ！
『次は一つ目を右に、通路を越えて直ぐの部屋に入って』

「大丈夫なの?!」
不安になって声を上げた。どんどん私達の泊まる部屋からは離れていってるから余計だ。
『律子さん、信じてください』
全く、友達信じなくってどうすんのさ。
「っよっ！　マーナちゃん、頼んだ」
『頼まれましたっ！』
っ、はぁっ……。部屋、鍵開いてるのも確認済みなワケね。なんか、スゴ過ぎなスペックだって。
はぁ、はぁっはぁ……。
『律子さん、呼吸をもう少し落としてください。そろそろ、人が通ります』
慌てて両手で口を押さえる。
ふぅっ、はふぅっ……、ひゅー…ひゅー……。
心臓の音が煩くって聞こえ辛い。
……もう、大丈夫かな？　ごくり。嚥下した唾が喉を通ってかなり大きな音が鳴った気がした。
『律子さん、静かに出て先の通路へ戻って右へ』
そっと、そっ　と……。左、目の前の……！　なんか向かいにいんじゃん!?　気づかれないように、静かに急いで右の通路っ！
っとぉ！　はぁっはぁっ……。
『中間辺りで右側の壁に沿って移動してください。
先の部屋の通路前に一人入りました』
バッ！　と後ろを向いてしまう。まだ来ないと解っていても、不安に苛まれた。
『カメラの映像を差し替えました。次の通路を右へ、そのまま真っ直ぐに――』
右！　そして、――――いた。後は、全力でぇっ……
って、止まれないいいっ!?!?
わぷっ！
「ぁ、はぁっ、あ、りがと……マ　ーナちゃっん……」

はぁはぁはぁ……。
「岩下は休んでろ。マーナ、警戒を怠るな」
「はいです、マスター」
「デコ助、召喚獣と武器を出しておけ」
「了解したわ。律子、真由美」
はいよっ。
「「試獣召喚サモン！」」
理科は、『化学科学』で武器を生み出した。さすがに、剣で手加減は難しいからね。
「このスタンロッドの柄にあるボタンを押すことによって、２～３０メートルの射程の電撃を飛ばす、強力なスタンガンとしても使えるわ」
ピィーッ。電子音が鳴ってエレベーターのドアが開いた。
マーナちゃんが辺りを警戒している間に海谷が乗り込み、理科に続いて私も乗ろうとしたところで理科に押し停められた。
「理科……？」
「律子、真由美。ありがとう。あなた達は、ここまでいいわ」
「ちょっ、ここまで来て何言ってんのよ？」
「これ以上は、フォローが効かないのよ。ううん、できたとしても連れて行きたくないのよ。……ごめん」
理科が珍しく理路整然とした物言いじゃなく、自分の気持ちだけを伝えてきた。
私達を想って、というか……、ただイヤなんだろうなぁって。理科の気持ちが解って、でも私達だって理科の事想ってるワケで……。
頬を少し掻いて照れくさく思いながらも言っておく。
「理科、私達も理科の事想ってるから。あー……、召喚獣だけでも連れてって。んと、いってらっしゃい」
「あ、うん。いってきます」
「理科、また学校で。マーちゃんもまたね」
「はいっ！　またです。
お二人のアドレス教えてもらってもいいですか？」

「さっさとしろ。いくぞ」
「海谷も元気で」
「ああ」
　ま、短い期間だったけど、それなりに楽しかったわねー。二度はごめんだけれどさ。
「またねぇ？　りっく」
　誰だよ。
「次会ったら、名前を訂正させてやるからな」
　ほら、言われた。
「うん、楽しみにしてるー」
　計算尽くならばスゴい。真由美の場合、どっちとも取れるからな……。
　つーか、帰りどーしよ……。
「律子さん、真由美さん。お部屋までのルートは携帯へと転送しておきました」
「おお、さすがマーナちゃん。
　んじゃ、このままだったら長居しちゃいそうなんでさっさ行くね」
「まったね～」
　後ろ髪引かれるな……、ほんと。でも、
「まだ終わってないよ、律子」
「おう。召喚獣に付けたカメラ映像送ってもらってるから、真由美はそっち見てて。召喚獣の指示も任せるから」
　イヤホンの音声だけじゃまともな動きはできないだろうしね。
　真由美の手を引く。
「私は、部屋まで連れてく」
「うん」
「「行こう」」

☆

「良かったのか？」

海谷の目を見て一つため息をついた。
「それ聞く？　ここまで連れて来たのだって心苦しいっていうのに」
「あはは……。でも……、私は嬉しかったです、とっても」
ま、苦労してる甲斐がある笑顔ね。っと、パシャリ。
ピロリロリ～ン♪
「報酬は戴いたから、きっちり熟すわ」
「わっわっわっ」
真っ赤な照れた感じ、可愛いわ。もう一枚。
ピロリロリ～ン♪
「今のはダメですぅ～っ！」
「オマエらなぁ……」
「緊張感くらい持ってるわよ？　本番直前は、大きくリラックスして軽く緊張しているぐらいが丁度いいのよ」
「建物前に来てガチガチだったと記憶しているんだが？」
「そうだったかしら？」
目線を扉にやったまま気を引き締めた。マイクを起動させる。これで律子と真由美にも届いてるはずだ。
「……着くわ」
『了解、なんか忙し過ぎて頭おかしくなりそう』
律子は地図見て部屋へ戻りながら、指示を聞いて召喚獣操作。真由美は、映像見て召喚獣操作して周りの音を拾いながら引かれた手の勢いを殺さず駆ける。
『感度良好ぉ～』
二人の声を聞けて嬉しそうにするマーナ。
「マーナ、先陣を切れ」
「了解しました、マスター。律子さん、真由美さん。そろそろ動きます」
『マーナちゃん、頑張ろうね』
『おーけぇー、マーちゃん』
にしても、マイクで指示するっていうか、指揮取らなきゃだし。いつも以上の緊張感だわ。

『理科、なんか口数減ったわよ？』
「律子、さすがに無駄口はそろそろしないって」
『そっか。んじゃ、なんか程々に期待してなよ。応えてあげるからさ』
『もちろん、私もねぇ？』
「ふっ……。期待しておくわ」

特別問題　①―４　ながされて世界紀行

エレベーターホールに降り立った。辺りを見渡すが、まだ誰も見当たらない。拍子抜けするくらいの静寂。
「真由美、後ろに意識向けてて。左右は受け持つから」
『はいはぁい』
「海谷も左右の意識もしてよ？」
「言われるまでもないだろ」
ビーッ！　ビーッ！　ビーッ！
「何事？」
不安感を煽るけたたましい音が響き渡り、通路が警告色で染め上がった。
不味い。かなりマズい。
「走れ！　一気に抜けるぞ!!」
「早速両側からお出ましよ」
「マーナ、全方位に煙幕！　前方の通路にも放ち、そのまま殿を務めろ！」
パン！　パンパン！　パパパパン!!
マーナの返事を遮って鳴る銃声。数人同時に撃ってるから、実際はかなりの弾幕だろう。
だがマーナは、海谷どころか召喚獣に飛んできた弾丸さえはたき落とし〝投げ返した〟。
「……させませんよ。マスターや理科さんだけじゃない……召喚獣にすら触れさせませんから。
さぁ、スモークですぅ。こう言うのが『煙に撒く』って事ですね。
――その身に刻んでくださいね？」
ヒューッ♪　やるぅっ。
横を通る時にマーナとハイタッチ。走りながら二人に声をかける。
「事態が急変したわ。律子も真由美も自分達の事を優先なさい」
『なんかもう着くから気にしないで』

『……理科、頑張ってね。っ！』
プツッと音が切れた。何かあった？　……何があった。
召喚獣の能力を使う。
「ちっ！『Ｔｙｌｓｋｉｊ—Ｔｏｋａｒｅｖａ　１９３０／３３、Ｂｅｒｅｔｔａ　Ｍ８０００』。
海谷、銃ぐらい扱えるんでしょう？　弾倉は３回分、足りなくなったらまた言いなさい」
「っと。トカレフ・トゥルスキー・トカレヴァ１９３０／３３、か」
と口にしながら、前方から来た敵の手を撃ち貫いた。
「そっちは、ベレッタか」
「正解。９ｍｍパラベラム弾の装弾数１５発のヤツ。それと……スモークグレネードっ」
それを前へとバラ撒、いたっ?!　煙の中へ入る前に、薬莢（やっきょう）を踏みつけて転んでしまった。マズッ！
「理科さん、避けてくださいっ!!」
体勢崩れているんだって言うのに。瞑りそうになる目を凝らして、弾丸を見据える。
「くっ……！」
最後まで諦めてやるワケにはいかないのよ！
「理科さん！」
カン！　ゴシュウゥゥ……。
「は……」
一瞬思考が飛んだ。音のした方に目をやると、何があったのか、壁からシュゥゥ……と未だに煙りを上げてその凄まじさを物語っていた。
そして眼前に立つのは、律子の召喚獣。抱えて飛び退いてくれたのが真由美の召喚獣。
「はは……」
吊橋効果実践中？　これは惚れるわ。
律子は自分達の方の警備員達の物音を聞く為に、片方の耳だけにイヤホンを着けて集中している。つまり、真由美が見て律子にタイミン

グ等を指示。律子は、それに合わせて僅かに数ミリの弾丸を捉え、凪ぎ、触れた刹那で能力解放して吹き飛ばした？
ふっ……、参ったわね。この二人なら、抱かれてもいいわ。
「下らない事言ってる暇があるなら、走れ」
「悪いわね。マーナ、先行して敵を片付けて。後ろは真由美に任せるから」
「はいです。後方の敵は、スタンロッドで意識を奪っているので、暫くは大丈夫かと思います」
「ありがと、助かるわ」
「煙りに紛れていますが、流れ弾にお気をつけください。――――！」
マーナの眼光が鋭くなる。
「２３メートル前方に四人捕捉。恐らく、これで最後かと」
「マーナが二人、」
「俺達が一人ずつか」
「殺すなよ？」「殺さないでよ？」
パパパパン！　四人の足下に威嚇射撃して透きを作り上げた。その間に口を開けた間抜け共に唾液に反応して炸裂する、いつもバカ共を鎮め（沈め？）ている薬品を放り込んでやる。
「ごふぁっ!?」
あら？　……銃はいらなかったかしら。ま、備えあれば憂い無しって言うしね。
海谷の方は銃を撃ち落として、マーナが意識を刈り取っていた。
「十二分だったみたいね。マーナがいれば百人力だわ」
「お褒めに預かり光栄ですぅ」
「余裕だな」
海谷の声を聞きつつ、マーナと海谷の二人が扉の開放作業を見守る。
「終わったぞ」
「早いわね」
「ペンタゴンに比べるとな」
「ですね」と同意していたマーナを思わず半眼で見やったのは仕方

ないと思う。何せ、同じ国なんだもの。
「どう？」
「ああ、大丈夫そうだ」
部屋へと入って軽い実験を繰り返し、一〇度目が終わったところで尋ねた。
部屋の入口は、塞いだ後にマーナが見張って入口のロックを解除されないように書き換え続けている。
「マーナ、聞こえた？」
「はいで――」
「あぁ。明確に聞こえたぞ」
ええ。こちらにも、あなたの声が届いたわ。……櫻木華菜。
「くっ……、油断した。見られていたってワケね」
「偶々だったがな、今日は泊まり込みで為すべき事があった」
どうかしらね。珍しくはっきりとしない言い方じゃない。
いいえ。『為すべき事』っていうのが……
「で。いつから気づいてたの？」
「連絡を頂いた時からだ」
「え？」
「正式な手続き方法として、以前から此方への来訪予定はあった。日時が決まっていなかった為に、」
話の途中にマーナが割って入った。
「それだったら、おかしくないですぅ」
「ダメナビー、最後まで聞け」
「其方のお嬢さんが言う通り、直前の連絡だったとはいえ、拒む理由など無かった。理路整然としていて社交性もあるが突然の来訪になっても理科らしい。
が。
今回理科は、私にも連絡を入れてきた」
『でもぉ、当たり前のことだよねぇ？』
『でもなんか……』
「理科の友人は気づいたみたいだ。〝私にも〟というのが……頂け

ない。頂けないな。全く理科らしくない。
理科ならば、私に何も知らせずに何食わぬ顔で目前へと現れるだろうからな。それに、その方が理科らしい」
「ちょっと待ちなさいよ！　何で……」
……もしかして律子達、
『ごめん理科』
『部屋に戻ったところで捕まっちゃったぁ』
いつ戻ってもいいように、部屋の側に待機させていたってワケ。はぁ……。
「人質のつもり？」
「いや？　拳銃を置いて作業に没頭しているようだったからな。回収しておいた」
「ふぅん……で？」
「温和しく日の本への帰国を告げる」
何があっても知らぬ存ぜぬで押し通す気かしら。
何よりも相手は、武器を奪っての慢心は無く、むしろ何かしらの警戒をしている。
「これが召喚獣か？」
見つからないように姿をくらませているはずの召喚獣が、突き付けられた。
「知ってるの？」
でも納得してしまった。「これか」と。理解している人から見りゃ、かなり物騒だものね。
「ああ、〝もちろん〟。世界でも有名じゃないか、ファンタジーな学園が存在するってな」
「情報に疎いつもりは無かったんだけどね。文月学園が有名になるだろうとは思っていても、そこまで意識を向けて無かったわ」
「それだけであれば、噂程度に終わるだろう。文月学園にもある程度の情報開示をしているが、言ってみればゲームの延長線上としてしか取られていなかった。
『ジャパンがまた面白いゲームを出したらしい。学校でできるん

だって。さすが、オタク文化大国だ！』という感じだったワケだ。
だが……、あの『薬師』がいるとなれば――――世界は稼働を始める」
「大げさね。あなたも、世界も」
「そうだろうか。曲がりなりにも、『神の薬』と呼ばれている人間だぞ？　生まれた時が違えば、神の子としてロンギヌスに処刑されて歴史に名を残していたさ。
いや、この現代においても、理科は後々の歴史に刻まれているよ」
「何が言いたいの？」
「過小評価が過ぎるのでは無いか？　そのような存在が常と異なった行動を起こした……。それだけで、理由は十分だぞ」
できる人間ってのは、面倒くさいわね。他人のふり見て我がふり直せ。「阿部理科うぜぇ」とか思われてたのかしら？
『〝敵を知り、己を知れば百戦危うからず〟。だよ？』
『理科は、己を知らなかったと』
「孫子の言葉だな。正に正答ではないか」
「でこ助、気が向いたら研究手伝ってやるよ」
海谷が唐突に話を振ってくる。華菜からしたら解らないだろうが、こちらは違う。
「いらないわ。むしろ、手伝ってあげましょうか？」
海谷は、憎たらしい笑みを浮かべて「いらねーよ」と答えた。
「それに……」「ま……」
「その方が面白いしね（な）」
「理科さん……」
「なーに、辛気臭い顔してんのよ？」
「だってぇ～、こっちのマスターの方がいいんですぅ！」
いつの間にかマスター扱いだわ。
「ふふっ。帰らない訳にはいかないでしょ？　それに、一生会えなくなるワケじゃないしね」
「……はい」
「じゃ、また一年後とか」
「何をする気か知らんが、このまま黙って見過ごすとでも思っている

のか？」
海谷が装置を起動させる。
重厚な音と甲高い音が綺麗に共鳴したような響きを感じた。
「何を！」
答える間も無く、世界を白く塗り替えられた。
後から思い返してみると、不確定要素が多々あった。焦っていたんだと今なら解る。
三体の召喚獣に白黒の腕輪、発動していた『化学科学』に、マーナの書き換え続けていた扉のコード……ｅｔｃ……。

☆

「またか……」
「全く。巻き込まれるこっちの身にもなりさいよ」
「「私達のセリフだ！」」
「あら、元気そうで何よりだわ」
そこには、召喚獣と共に怒り心頭の律子と真由美の姿があった。華菜もお怒り気味。
「訳が解らん。理科、説明を要求する」
「元々、並行世界移動をしようと思っての実験だったワケなんだけど、それに巻き込まれてあの場所から移動したのよ」
「なっ……!?　つまり、並行世界移動を成功させたというのか！」
「そ。ごめんね」
「いや。だが外に出ただけの可能性も……」
「無視か！　なんか他に言う事あるでしょうが!?」
「まあまあ。律子さん、私はまた会えて嬉しいです」
「私も～」
「私も嬉しいけどさ……何でこんな事に……」
「恐らく、なんだけど……。召喚獣に付けたフィードバック機能が」
「ですよねー？　なんか、そんな事だろうとは思ってたけどね」
最後まで言わせなさいよ。でも……、面白いわね。

「面白い!?　どの口が宣ったのかなぁっ!?　被害者からすれば、なんか納得いかないから！」
　おほらなひれょ。ほっぺむにむに止めて。
　でもあの二人。運や運命っていうのが作用しているっていうのかしら？　非科学的だけど全否定できないから、また面白いわねぇ。
「マーナ」
「今調べています……〈ピピッ〉該当データ無し。ここは、地球上の何処でもありません。……え？」
「では、成功していた、と。巻き込まれた、と。帰還するのも困難だと？」
　へぇ……。頬が緩むのを感じた。
「おい、自分で言って間抜け声を出すなボケロボ」
「全くよ。頼りないのか頼りないのか、ハッキリなさいよボケボロ」
「惜しい！　というか、ただの暴言ですから！　しかも二択に見せかけた、〝頼りない〟の一択!!」
「「迷うな……」」
「何でですぅ!?　何処に迷うところが！……」
「有り得ないと言わしめるくらい頼りないとか？」
「マスター!?」
「酷い頼りないわね」
「せめて〝酷く〟頼りないにしてください。その言い方だと、酷いし頼りないみた「「あ、それ」」――嫌いです！」
　マーナを律子と真由美が慰めていた。仲良いわね。
「すみません、少しいいですか？」
　誰かと思って周りを見回しても誰もおらず、ぽかーんと口を開けた律子と真由美の視線が気になってそれを辿ってみると……
「何だか疲れ果ててるみたい」

祭りってアレよねぇ…。人がゴミのようだわ。

第三五問　実行委員の一存

桜並木は坂道から徐々に姿を消して、代わりに新緑が芽吹き始めたこの季節。

文月学園では、新学年最初の行事である『清涼祭』の準備が始まりつつあった。

学園祭準備の為のＬＨＲの時間は、どの教室を見ても活気が溢れている。

そして、

「阿部！　こいっ！」

Ｆクラスはというと――――

「相手になったげるわ、須川」

「おまえの球なんか、場外まで飛ばしてやる！」

こんな感じ。校庭での野球に勤しんでいた。

「言ってくれるじゃない。ただの球を投げるとでも？」

「何っ!?　卑怯だぞ！」

「何を喚いているのかしらねぇ？　勝利への常套手段じゃない」

「可愛いは、正義って事か」

ミットを構えている坂本のサインを待つ。

『次の球は、カーブを……バッターの頭に』

解ったわ。

坂本にこくり。と頷き返す。

「くらいなさい！　僅かな衝撃で爆発する魔球を！」

「ちょっと待てぇ！」

慌て始めた二人の声を聞き流して、振りかぶる。

「無に還れっ!!」

なかなかの豪腕。急ぎ離れようとした二人の間にあったホームベースを黒煙と砂煙が包んだ。

「虚しい戦いだったわ……」
「貴様ら、学園祭の準備をサボって何をしている！」
「うげっ、にしむーじゃない」
「聞こえているぞ、阿部！　誰がにしむーだ！」
「……〈ぴっ〉」
「指をさすな。言葉で伝わらなかったって意味合いじゃあない！　いいから全員教室へ戻れ！　この時期になってもまだ出し物が決まっていないなんて、うちのクラスだけだぞ！」

とか言われて教室へ戻ってきたワケよ。
「阿部よ。さすがに、ふてぶてし過ぎんか？」
「五月蝿いわ。木下、いえ……淫行変態ヤリタインジャーのスケベェピンク」
木下が膝を抱えて、〝の〟の字を書き出した。
「……今日は……早退してもよいかのぉ……？」
「よーしよし、秀吉くん大丈夫だよ～」
「愛子、甘やかさないで。秀吉も、男ならウジウジしない！」
木下姉と工藤だけじゃなくて、翔子はもちろん、久保や律子と真由美も来ている。もうほとんど終わってるらしい。あらゆる、やる事成す事が上位クラスなワケね。
「阿部もほどほどに」
「須……ブラックは黙ってなさい」
因みに、赤→坂本（代表）。青→土屋（貧血）。黄→明久（明るさ）。緑→久保（爽やかさ）。っていう構成。
「とりあえず、議題進行並びに実行委員として誰かを任命する。そいつに全件を委ねるので、後は任せた」
「アンタやんなさいよ」
「パス。面倒だ」
それを押し付けるつもり？　全く。
「そ。
因みに、Ｂクラスの実行委員は、ここにいる岩下律子と菊入真由美

のふた」
『俺に任せろ！　実行委員と言えば、この俺だ』
『バカな！　実行委員は、代々俺の家系が受け継いできたものだぞ？』
『言ってろ。〝実行委員〟の〝じ〟の文字すら理解に及べないカス共が！』
『なら知ってるってのか!?』
『ふっ……。語るに落ちるな。そう言っている時点で知らないと言っているようなものだ』
『しまったぁっ！』
最後まで言わせなさいよ。
で、坂本は？
「うぐぐ……」
唸ってるわ。いつまでもこうしてたって仕方がないし、さっさと終わらせましょ……。
すっ。と手を上げた。
「阿部と須川か」
「「え？」」
これは予想外だった。ま、いっか。
「んじゃ、それで」
「俺もか？」
「ああ。おまえらに任せる。……ふぁ～っ……」
ヤル気の欠片も無いわね。
「真由美と親密になりそうもなくて一安心した？」
「ばっ!?　違ぇ！」
「ふぅん……。だってさ、真由美」
「そっかぁ。結構嫌われてるみたいだしぃ、週末にうちへ呼ぶのは木下〝くん〟達だけでいいかなー」
「ちょっ！　あいや……、他のヤツ呼ぶくらいなら、俺を呼んでくれた方が嬉しい」
「春も終わり、初夏に突入かのぉ」
「黙ってろ秀吉。おまえだけ御盆に突入させてもいいんだぞ？」

珍しい組合せねー。明久の役目かと思ってたけど、翔子の相手でいっぱいっぽいし……。
「ハイハイ、静かに。とっと決めてしまうわよ。意見があるなら挙手して。
須川、書記」
「わーかったよ……。仕方ねぇ、俺の華麗なるテクニッ」
「はい、土屋」
「聞けよ」
「……〈スクッ〉
……写真館」
「無視か。おまえら無視か」
「土屋、健全ならば許可するわ」
打ち拉がれた須川は、放置して。
「……俺は健全な物しか世に出した事など無い」
「ほら……〈ちらっ〉」
スカートをちらり。
パシャパシャパシャパシャッ！　という連続したシャッター音と机の脇を縫って頭から滑り込んでくる土屋。バカ共がそれに気づき、モーゼの如く机の群れが左右に退いて道を作った。
親指を力強く突き立てて後ろを振り返り、道を作った者達も笑顔でサムズアップ。
その時には既に上着の内ポケットから一口大サイズの小玉を取り出しながら土屋の鳩尾に蹴りを入れる。差し出された頭に踵の照準を定めて、その他大勢を爆。
「どの口が、ほざいたのかしらねー？　土屋、言い遺したい事は？」
「……ブラも見せてくれ」
この状況でも7：3で下着を見るのには驚く。
脚を振り抜き、土屋を沈めてから見回す。
「っていうか、他のヤツらも見たでしょ？　今。駄賃は、高くつくわよ？」
久保も木下も顔反らしてんじゃないわよ。『逸らす』じゃなく『反ら

す』。鯱ばりに反った。
「須川、板書と提出する用紙にも書き込んで」
「あいよー」
【候補①　写真館『笑顔のゲンキ』】
（裏）『秘密の覗き部屋』】
「じゃ、木下」
「単純にメイド喫茶もよいかと思ったのじゃが」
「……木下、私達のとこメイド喫茶」
「あ、いや、既存の可能性を考えての……。その、阿部よ。執事喫茶などどうじゃろうか」
　翔子の言葉にしどろもどろになってたけど、結局流したわね。木下、口笛吹いて誤魔化すな。むしろ腹立つ。
「でも、あなたが芝居したいって言わないだなんて……、どういう風の吹き回し？」
「うむ。もっと早よぉ言えば良かったのじゃが、ワシも部活があったしの」
【候補②　執事喫茶『ｐｒｅｃｉｏｕｓ　ｍｅｍｏｒｙｓ』】
「ふぅん……。次は……」
「阿部、俺もいいか？」
　そう言った須川に目で促す。
「俺は中華喫茶を提案する」
「中華喫茶？　チャイナドレスでも着せようっていうの？」
「いや、違う。俺の提案する中華喫茶は本格的なウーロン茶と簡単な飲茶を出す店だ。そうやってイロモノ的な格好をして稼ごうってワケじゃない」
　指を一本立てて続け出した須川。長くなりそうねぇ……。
「そもそも、食の起源は中国にあるという言葉があることからも分かるように、こと『食べる』という文化に対しは中華ほど奥の深いジャンルはない。近年、ヨーロピアン文化による中華料理の淘汰が世間では見られるが、本来食というものは――」
　あ、うん。これ以上言われてもね。情熱は伝わって来たわよ？　同

じく薬学にのめり込んでいる身としては、仲間を見つけた気分だわ。
【候補③　中華喫茶『黄龍小』】
　何でこれだけ真面目？　ん？　違うわね。……ウォンロンシャオ。小シャオは、～ちゃんって意味合いだったかしら？　黄龍ちゃん。って名前か……。
「他は？　はい、久保。……久保？」
「ああ。せっかくだから思いついた意見を言わせてもらえるかな？」
　何だか自信満々に見える。そんな面白い事考えたの？　いいわ、聞こうじゃない。
「許可するわ」
「では失礼して……。この学園ならではの、召喚獣を使った催し物は面白いんじゃないだろうか？」
　確かにね。何をするつもりかしら？
「うん、そうね。でもどのような事をするつもり？」
「お客様にも召喚獣を使ってもらおうかと思っている」
「ほぅ……。続けなさい」
「ああ。まずお客様に簡単なテストをしてもらって、その採点データを元にプログラミングしてかかるだろう時間を告げて、再度来店していただき、召喚獣操作を体験してもらう。
　但し、今のは対戦してみたい人向けで、ただ操作するだけでいいというのならば、５～１０問の小テストで操作してもらえばいいかと思う。
　小さな子もできるように一桁算、ひらがなやカタカナでの文字の読み書きなどしてもらえばいい。
　長々と話してしまったんだが……どうかな？」
「悪くないわね。これで集計を取るわ」
【候補④　召喚獣操作＋対戦『あなたでもなれる召喚士（サモナー）』】
　いや。ツッコまないから。さすがにもうツッコまないから。
「皆、清涼祭の出し物は決まったか？」
「てつむー、候補はこの４つです」
【候補①　写真館『笑顔のゲンキ』】

（裏）『秘密の覗き部屋』×?】
【候補②　執事喫茶『ｐｒｅｃｉｏｕｓ　ｍｅｍｏｒｙｓ』】
【候補③　中華喫茶『黄龍小』】
【候補④　召喚獣操作＋対戦『あなたでもなれる召喚士（サモナー）』】
「……まぁいいだろ」
「この候補の中から一つだけ選んで挙手なさい」
　挙げられた手の本数を数えた結果、
「Ｆクラスの出し物は召喚獣操作体験に決定。全員、働きなさいよ？」
　というワケで、当日召喚の事とかお願いしますね、てつじー」
「〝てつじー〟でも〝てつむー〟でもないが、協力しよう。もとより、そのつもりだったがな」
　そう言って教室を出て行った先生に後を任されて、大まかな事を決めていく。
「簡単にだけど決めていくわ。意見があれば、また挙手でお願い。
　はい、律子」
「なんか一応、お茶菓子とかの用意はある方がいいかも。大袋のお菓子とかバラエティーパックなんか買えばいいんじゃない？」
「そうね」
　須川が書き込み終えたのを見て、真由美を指す。
「理科～、衣装とかはぁ？」
「んー……衣装、か……。制服のままでも、いい気がするんだけどね」
　衣装までは「ま、いいか」と考えあぐねていると、土屋が立ち上がった。
「……俺に考えがある」
「任せていいのね？」
「……ああ」
「男子の分も」
「……任せろ」
　その間は何。まぁ、土屋一人に押し付けるのは、よろしくないわね。
「姫路、裁縫はできる？」

「あ、はい。大丈夫です」
「じゃ、姫路は土屋と衣装係って事で」
「解りました。よろしくお願いしますね、土屋くん」
「……こちらこそ頼む」
土屋が握手を求める。
「はい！　あ、」
それに応えようとした姫路が、机に足を引っかけて倒れそうになったところを透かさず土屋が支えた。
男子にしては、かなり小柄な方である土屋だが、その実、鍛え上げられた肉体を持っていた。だから、影では女子人気が結構あったりするんだけど、知らぬは本人ばかりってね。
「あの、す、すみません！」
「……気に……するな」
耐えてるわね、土屋。姫路を抱き抱えているっていうのに。
ここで、姫路が爆弾を落とした。
「土屋くんって、結構おっきいです」
「……っ！〈かっ！〉」
いつまで保つかしら？
「それに……、〈くんくん〉いい臭いがします」
「……」
バストを押し付けた状態からの、首筋の臭いを嗅ぐだと!?　さすがの土屋も、声を出せないみたいね。
「はわっ!?　すみません！　変な事しちゃいましたっ……。えっと、その……よろしくお願いします」
腕の中で上目遣い！　これは土屋もダメでしょう。
「……よろ、しく……〈ガクッ〉」
メーターを振り切ったにも関わらず、意識を失ってまで堪えきったっていうの？
「感動した。あなたの根性に感動したわ」
ぱちぱちぱち……。教室内から疎らに音が聞こえる。それが次第に大きくなり、

ぱちぱちぱちぱちぱちぱちぱち!!
割れんばかりの拍手で包まれた。
忘れ物を取りに戻って来てた西村先生から一言。
「バカか、おまえら」

第三六問　ツブレドブネズミに選ばれた戦士たち

「あ」
「お？」
　向かい側から坂本が歩いて来た。坂本がわざわざ学園長室へ来るのは普段ならば有り得ないと思っただろうが、このタイミングで鉢合わせたってことは……。
「あなたも化石に呼ばれてたのね？」
「ああ。つまりは、おまえらも天然記念物にってことか」
「何をさせたいのやら」
「全くだ」
「しっ！」
　今何か……
「何々だ、阿部」
「黙ってなさい」
『……賞品の……として隠し……』
『……こそ……勝手に……如月ハイランドに……』
　声を殺したところで、学園長室の中から誰かが言い争っている声が聞こえてきた。
「どうした、明久」
「いや、中で何か話をしているみたいなんだけど」
「そうか。つまり中には学園長がいるというわけだな。無駄足にならなくて何よりだ。さっさと――」
「しっ！」
　「中に入るぞ」とでも続けるつもりだったのだろうが、それを遮って耳を澄ます。
『……と、……間に契約……いたんだい？』
『……て？　……に……と……り、……はずですがね』
　何の事？　それにこの声は、……教頭？　何かあって痛い懐を探られないように呼んだってことか。

カヲルさんの事だから、それだけじゃないんでしょうけどね。
「何をやってんだ、おまえら」
っ！　不味い！　振り向いた先に根本がいた。
あいつは、卑怯なだけじゃなく空気も読めないの?!　急ぎドアノックして、返事を待つ。数秒と待つことなく、部屋の中から声をかけられた。
「誰だい」
「Fクラス代表と他数名です」
坂本が「何でおまえが答えてんだよ」と目で訴えかけて来ていたが、無視して入室する。
「失礼致します」
「ガキ共、何勝手に入って来てんだい。誰が入室を許可した」
長い白髪の剥製が藤堂カヲルさん。口がかなり悪いけど、この文月学園の学園長っていう偉い立場だったりするからね。何とも……。そして試験召喚システム開発の中心人物で、研究第一の自己中心的な人。……人？
「これが人なら、海洋生物でさえ人になるね」
最後のが漏れてたらしい。
「明久、魚が食えなくなるから悍おぞましいことを言うな」
「ゆーじくん、シーマンに失礼だぁから」
「真由美。……せめてウーマンにしよ？」
「人魚が穢れそぉでヤダ」
「アンタら馬鹿にしてんのかい!?　アタシゃ人間だよ！　本当に失礼なガキ共だねぇ」
「……立てば山婆、座れば魔女、歩く姿は深き者共(ディープ・ワンズ)」
クトゥルフの醜い魚人だったかしら。翔子……。スッゴい毒吐いてるわ。
「やれやれ。取り込み中だというのに、とんだ来客ですね。これでは話を続けることもできません」
ふぅ……。っと息を吐いた後に、眼鏡を弄りながらカヲルさんを睨み付けたのは教頭の竹原先生だ。

「……まさか、貴女の差し金ですか？」
「馬鹿を言わないでおくれ。どうしてこのアタシがそんなセコい手を使わなきゃいけないのさ。負い目があるというわけでもないのに」
「それはどうだか。学園長は隠し事がお得意のようから」
　何か知っているっていう事？　学園長と教頭の話し合いということは、学園の経営について？　ずぼらなカヲルさんなら、教頭に全部任せて自身は研究に没頭してそうだからね。
　だとすれば、何でさっき……
「何度も言っているように隠し事なんて無いね。アンタの見当違いだよ」
「……そうですか。そこまで否定されるならこの場はそういう事にしておきましょう」
　そう告げると、竹原先生は部屋の隅に一瞬視線を送り、
「それでは、この場は失礼させて頂きます」
　踵を返して学園長室を出て行った。あの視線は何？　何かを気にしてた？　……解らないわね。
「んで、ガキ共。随分とゆっくりだったじゃないか」
「竹原先生との会話を中断させたかったのかしら？」
「さて、何の事やら」
「耄碌もうろくするにはまだ早いわよ？　カヲルさん」
「余計なお世話だよ。それより、オマケが多くないかい？」
「本気で言っているの？　腐っても天才と呼ばれる科学者でしょうが」
「理科、額に御札貼らなくて大丈夫？　道術が切れないかな？」
「バカか明久。御札が無く動いているんだぞ？　キョンシーじゃないってことだ」
「じゃぁ何さ」
「死霊術に決まってんだろ。
　いやまさか、ネクロマンサーが実在していたとはな」
「勝手に殺すんじゃないよ！　アタシャ生きてるよ！」
　どっちも前提条件が死体だからね。

「カヲルさん、そろそろ話してもらえませんか」
「話逸らしたのは、誰だい」
「どっちもどっちって思いますけど？」
「清涼祭で行われる召喚大会は知ってるかい？」
「ええ、まぁ」
　丁度話題に出てたものね。
「じゃ、その優勝賞品は知ってるかい？」
「え？　優勝賞品？　理科知ってる？」
　明久の問いに首を振って返した。出場するつもりなんて欠片も無かったから見向きもしてなかったわ。
「学校から贈られる正賞には、賞状とトロフィーと『白金の腕輪』、『黒銀クロガネの腕輪』、副賞には『如月ハイランド　プレオープンプレミアムペアチケット』が用意してあるのさ」
「それが何だってんだ、翁」
「誰が翁だい！　ったく、話は最後まで聞きな坂本。慌てるナントカは貰いが少ないって言葉を知らないのかい？」
「老化した人類に限りなく酷似した老朽化した人のような何かである今目の前にいるアンタのことだろ？　慌てるナントカって、急に痴呆が進行したか？」
「何さね、それは!?」
「雄二、言い過ぎだよ。でも少し心配だね。後で僕が性質・体質・品質と、質たちの悪い葬儀屋を紹介して生命保険の契約を取り付けるから安心して？」
「アンタも、何を爽やかな笑顔で宣ってんだい！　驚きの余り尊敬するよ!!」
「有難き――くない、不幸せ」
「中途半端に言い直してんじゃないよ！　バカにしてんのかい!?」
「明久がそこまで言うなら、仕方ないか……クソッ」
「何でそんなにも嫌そうな顔して――吉井と阿部も一緒にやってんじゃないよ!!」
「さ、学園長老、話の続きを」

明久が無理して作ったような笑みで先を促す。健気だわ。
「あ〝ーっ！　こいつらと話ているとストレスでどーにかなりそうだよ！　阿部だけ話な！」
さて、マジに真面目にいきますか。
「明久も坂本も、これ以上は止めて頂戴」
「続けるよ。この副賞のペアチケットなんだけど、ちょっと良からぬ噂を聞いてね。できれば回収したいのさ」
「回収……ね。賞品に出さなければいいって話ではないと？」
「そうさ。この話は教頭が進めたとは言え、文月学園として如月グループと行った正式な契約だ。今さら覆すわけにはいかないんだよ」
やっぱりか。経営に関して教頭に全部一任したツケが回ってきたと。
「契約する前に気付かなかったの？　だとすれば、自業自得もいいところでしょ」
「うるさいねぇ。白金の腕輪の開発で手一杯だったんだよ。それに、悪い噂を聞いたのはつい最近だしね」
カヲルさんが眉を顰める。責任感じてますよーって見せて、何か腹に据えてるわね。……あ。
「それで悪い噂ってのは、如月グループは如月ハイランドに一つのジンクスを作ろうとしているのさ。〝ここを訪れたカップルは幸せになれる〟っていうジンクスをね」
その程度で問題にして騒ぎ立てたりしないだろう。つまり、
「まだ続きがあるんでしょう？」
「ああ。そのジンクスを作る為に、プレミアムチケットを使ってやって来たカップルを結婚までコーディネートするつもりらしい。企業として、多少強引な手段を用いてもね」
卒業するまで無理でしょうが、どー考えても。それに気がつかないカヲルさんじゃぁない。っていう事は、本命は別に……？　如月ハイランドの話の後に出ていた話題の方が重かった気がするんだけど、それも関係している？
「……」

がしがしっ。頭を乱雑に掻きむしる。あ〝ーっ！　解らないわね、もうっ。
「……科！　理科！」
「何？」
「何？　じゃないわよ。なんか引っ掛かる事でもあった？」
「……くすっ。律子は、スゴいわね？　正解よ」
「何言っているんだい」
嫌な予感でもしたのか、カヲルさんが余裕ぶっていた相好を崩す。そして、その予感は的中よ。
「シロガネ」
ビクッ。と反応した。
「副賞の腕輪……でしょう？　不具合でもあったのかしら」
「何の事さね。そんな事実は無いよ」
「ま、いいです。けれども、対価無しにっていうのはいただけません。カヲルさん、等価交換」
「はぁ……。解ったよ。とりあえず、吉井も阿部も霧島も優勝は困る。それを補助する形で出場しておくれ」
「解ったわ」
「その三人は、お金もあるし進学も就職も困らないだろう？　他の奴らには、半年分の学食無料チケット……で、アンタらは何が欲しいんだい？」
明久や翔子はどうか知らないけど、頼む事はもう決まってる。
「この……『白黒の腕輪』を頂くわ」
「なっ!?」
「んじゃ、僕達は」
「……『白金』と『黒銀』両の腕輪を頂きます」
「馬鹿言うんじゃないよ！　何勝手な……」
「知り合いの伝手を使って、卒業までに腕輪を作り上げますのでお気になさらず」
「くっ……！　好きにしな」
「言われるまでも無く。あ。デモンストレーションとかあるんでしょ

うか？　あるとすれば〝誰でも〟いいんでしょうか？」
まだ隠し事するのかしらね？　カヲルさん。
「……はぁ。態々Ｆクラスに頼んでいるっていうので、察しておくれ」
だとすれば、坂本も微妙かしら？　最近、点数が伸びて神童を取り戻しつつあった。
召喚大会の形式はトーナメント方式で、二対二のタッグマッチだったわね。そして、一試合ごとに教科が変わっていく。ん～……。
「……優勝させるのは、木下と須川がベスト……か。ベターは坂本と土屋かしらね。それ以下に翔子や明久、律子と真由美にも協力お願いするわ」
「えっ?!」
揃って声を上げている律子と真由美に、指差し言ってやった。
「ここまで話聞いておいて、〝はい、無関係です〟なんて罷り通るワケ無いでしょ？」
「ですよね～……。なんか解っちゃいたんだけどね」
「理科はぁ？」
「ん？　恐らく教室に付きっきりになるわよ」
「何でぇ？」
顎に人差し指を添えて首を傾げ、真由美は可愛く尋ねてきた。
「Ｆクラスの出し物、さっき決まったでしょう？　それで召喚獣のプログラムに不具合があった時、対処できる人間が必要になってくるのよ」
坂本が一歩前に出て、
「ババア、こちらからも提案がある。対戦表が決まったら、その科目の指定を俺達にやらせてもらいたい」
カヲルさんに提案を持ち掛けた。今さらカヲルさんがこれを断る理由は無い。
「ふむ……。いいだろう。点数の水増しとかだったら一蹴していたけど、それくらいなら協力しようじゃないか」
一間を空けて、カヲルさんが念を押してくる。

「さて。そこまで協力するんだ。当然召喚大会で、優勝できるんだろうね？」
ふっ……。一つ貸しよ。
「今まで期待には応えてきたつもりなんだけど？」
坂本が不敵な笑みを浮かべて続く。
「無論だ。俺達を誰だと思っている？」
「……私も協力する」
翔子は揺るぎない心を表すような力強い瞳で。
「絶対に優勝して見せます」
お人好しなのは相変わらず。何だかんだ言って、カヲルさんにも明久は気を遣うみたいね。
「私達は、準優勝狙おっかぁな」
いつでもマイペースな感じの真由美が強かに宣言して、
「結局は、なんか勝てばいいだけでしょ？」
律子が事も無げに言う。
「それじゃ、任せたよ」
「「「「おう！」」」」
「…おう」
ズルッ！　総転け。
「翔子、ワンテンポ遅い」
頬の辺りの黒髪を指先に絡ませて遊び、
「……うん。……照れる」
この発言にはやられた。
「翔子可愛いわ」
「「「「うん」」」」
今度は、ズレることなく満場一致。
これは仕方のないことだと思った。
でも何だか……嫌な予感が収まらない。
何事もなければいいんだけど……。

第三七問　惡ノ華

「しっ！」
　阿部が坂本の言葉を遮って扉に耳を当てて学園長室の音声を拾おうとしているみたいだな。…というか、扉に張り付く人数が多くてコントにしか見えないんだが……何々だ、あの集団は。
「何をやってんだ、おまえら」
　酷く驚いたようだったが、それでも即座に持ち直して学園長室の扉をノックしていた。
「誰だい」
「Ｆクラス代表と他数名です」
　坂本が何か目で訴えかけていたが、阿部は無視して入室する。
「失礼致します」
「ガキ共、何勝手に入って来てんだい。誰が入室を許可した」
　相変わらず酷い言い種だ。あれに教育は無理だろ。教え育てるんだぞ？　むしろ、こっちが教えなきゃならないような言葉遣いだからな……
　学園長室の前を過ぎたところで扉が開いた。
「忌々しい〈ぼそっ〉」
　教頭？　とりあえず、軽く会釈して――
「恭二」
「友香？」
　……え？
「早く行きましょ」
「あ、ああ」
「気をつけて帰るようにな」
　後ろを振り返ることなく、友香に引っ張られるまま足早にその場を去った。
　そして、友香の教室を過ぎてＢクラスも過ぎてＡクラスまで来てまだ止まらずに……って、

「どこまで行くんだよ」
「え？」
何驚いた顔してるんだよ。……大丈夫なのか？
「どうした。何かあったか？」
「ん？　別に。そんなことより早く行こ」
「……そうだな」
気にし過ぎか？　ちょっと寄り道して気晴らしするか。
「恭二、そっちじゃないでしょ？」
「ああ。なぁ友香、寄り道してもいいか？」
「いいけど……、どこ行くの？」
「買い物したり、なんか食べ行ったりとか？」
「デート……ってこと……？」
「友香がそう言うんだったら、そうなんだろ。……あ、もしかして嫌か？」
「ううん、そんなことないわ。行こっか」
「ああ！」
「珍しい事もあるのね」
「何がだよ？」
「凄く嬉しそうにしてたから。ふふっ」
「あ……」
笑った。やっとちゃんと笑った気がする。
何だか嬉しくなって、キスしそうになった。柔らかそうな頬っぺたに伸ばしていた手を横にずらして髪を梳く。
「ん…。恭二？」
相変わらず綺麗な髪だな。好意による補正みたいなものもあるのか？　というか、色っぽい声で鳴くな！　ただでさえ我慢してるんだ。
ああ、全く。小動物よろしく首を傾げてる姿は、保護欲を掻き立てヤバい。何がヤバいかって、とにかくヤバい。ホント、
「ヤバいよなぁ」
「何が？」

「友香の可愛さが」
「え？」
「あ……。いや、そうじゃなくって！」
「そうじゃないんだ……」
「いやいや、普通に可愛いんだが」
「ありがと」
「くっ……まぁその……おう」
「とりあえず、あそこのクレープは奢りね」
「なんっ！……はぁ……解ったよ」
　美味そうに食べてんなぁ。あむっ。
「うまっ!?」
「アレ？　食べたことなかった？　ここのクレープ」
「ああ。こんな美味いとは思わなかった」
「ふふん、来て良かったでしょう？　……あ。この近くにファンシーショップがあるんだけど、寄ってってもいい？」
「おう、いいよ全然」
　けど、俺にはファンシー過ぎるな。おっ、
「これなんか可愛いんじゃないか？」
「何？　買ってくれるんだ？」
　期待した目でみんな。買ってやるけどさ。
「ちょっと待ってろ。……すみません、これください」
　そういってテディベアの付いたストラップをレジに持ってく。
「ほら」
「あ、うん。……ねぇ、今日はどうしたのよ？」
「別に。そーゆー気分だっただけだ」
　納得したのかしてないのか「ふーん」と言ってきたが、やっぱり納得はしてないんだろうな。なんて思っていると細い声でありがとって聞こえた。気のせいかと思って友香の方を見てみると、
「ありがとって言ったの。少し落ち込んでたかなって。――――しないんだから」
　後ろの方小さくって聞き取り辛かったが、なんとか聞き取れた。だ

けど、なんだって今そんなこと……。
「なぁ友香」
「じゃあ、バイバイおやすみー」
気になって聞こうとしたら、食い気味に言葉を遮って足早に帰っていった。
「友香！　おい！　何だよ……」
〝死なせたりしない〟って何々だよ！
ｐｒｒｒｒ……ｐｒｒｒｒ……ｐｒｒｒｒ……。
あー、もうっ！　誰だよ！　知らない番号だったが勢いのままにとった。
「……は？　…っ！　お前か……お前が……！」
その後何かを言ってたみたいだが気付けば、
「あぁあああ〝あ〟あああーーーーっ!!!」
一瞬意識が飛ぶほど発狂してたらしい。
店員に支えられているって理解するのに数分必要だった。
……クソッたれ。